愛媛大学埋蔵文化財調査報告　XIV

文京遺跡Ⅳ

── 文京遺跡20次調査 ──
── 文京遺跡23次調査 ──

愛媛大学埋蔵文化財調査室

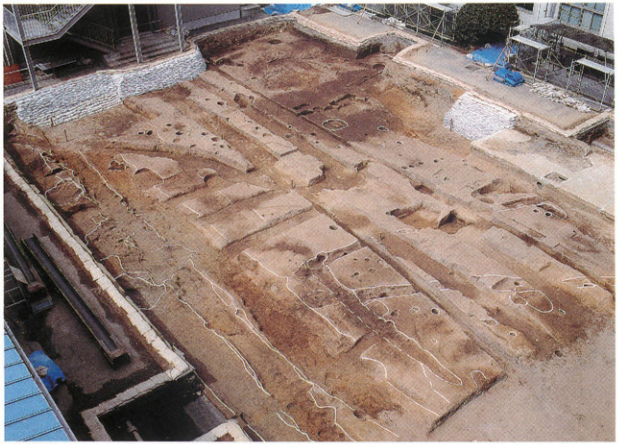
2005

文京遺跡Ⅳ

― 文京遺跡20次調査 ―
― 文京遺跡23次調査 ―

愛媛大学埋蔵文化財調査室

2005

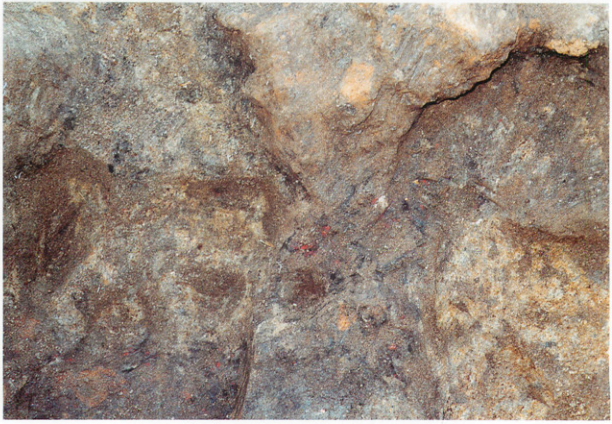


1　20次調査古代・中世面完掘状況（南東から）

2　20次調査弥生・古墳面完掘状況（西から）

巻頭図版2

1　20次調査SC-35（北から）



2　20次調査SC-35中央土壙（SK-48）赤色顔料検出状況

1　20次調査SX-22検出状況（南西から）

2　20次調査SX-22完掘状況（南西から）

1　20次調査東西畔土層断面

2　20次調査南北畔土層断面

序　文

愛媛大学は、松山市および愛媛県内各所に大小のキャンパスをもち、敷地総面積は464ヘクタールに及び、本部事務局と４つの学部が所在する城北団地には文京遺跡、農学部と附属高等学校がある樽味団地には樽味遺跡、国際交流会館がある鷹子団地では鷹子遺跡、教職員宿舎のある北吉井団地では桑原西稲葉遺跡など、数多くの遺跡をかかえている。これに対し愛媛大学では、1987年に愛媛大学埋蔵文化財調査委員会の指導に基づいて埋蔵文化財調査室を設立し、埋蔵文化財の保護に努めてきた。中でも、城北団地に所在する文京遺跡は、2004（平成16）年度までに、28次にわたる全面調査が実施され、弥生時代における西日本屈指の大集落であることが判明してきている。

本書で報告する文京遺跡20次調査は、1999年度に実施したベンチャー・ビジネス・ラボラトリー建設に伴う発掘調査である。調査地点は、既に報告した文京遺跡13次調査（地域共同研究センター新営工事に伴う調査）の東に隣接し、13次調査地点からの遺跡の広がりが予測された。しかし、意外に遺構の分布は濃密でなく、とりわけ調査区東半では目立った遺構のない状況が確認された。そして、そのような地点において、石器製作を行った小型竪穴式住居が１棟発見されたことは、興味深い。文京遺跡集落を分析していく貴重な資料である。また、中世においては、東西方向に直線的に走る溝が確認され、中世の土地利用を示唆する。

さて本書では、文京遺跡23次調査についても報告している。四国電力による城北団地構内高圧線敷設工事に伴う調査であり、城北団地南縁にほぼ等間隔にトレンチが設定された。このため、小規模な調査ながら、効率よく遺跡の広がりを確認でき、旧地形に関する新たな知見も得ることができている。また、９トレンチでは、焼成失敗品を一括廃棄した土器群が出土し、文京遺跡における土器製作を考察する有効な資料を得た。

両調査は、大学構内の調査においても南側に位置し、必ずしも弥生集落の中心部ではない。しかしそのような地点の様相が明らかになったことは、具体的な集落構造の分析に対して、大きな成果を得たと確信している。今後、大規模密集型集落中心部の整理を待って、さらなる分析を進めていくところである。

さて、重要な調査成果があげられながらも、報告書刊行に至るのに、５年以上の月日を要している。連続して実施される校舎建設に対応して発掘調査が優先されたためであり、その間、調査後の整理作業は断続的とならざるを得なかった。そこで、施設部と協議し、中期的な整理計画に基づき、整理体制の強化を図り、報告書刊行を順次行っていくこととなった。そのような成果として、『樽味遺跡Ⅳ（愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅸ）』、『文京遺跡Ⅲ（愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅻ）』に続く３冊目の報告書が本書であり、愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅻにあたる。ただし、未刊の報告書はなお多く、調査から時間は経過する一方である。残された課題は多い。

発掘調査から記録・遺物類の整理、そして報告書の刊行にいたるまでには、多くの方々から協力を得た。それらの方々に深く感謝するとともに、本書が多くの人々に利用・活用されることを祈念します。

2005年２月15日

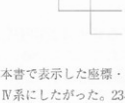
愛媛大学埋蔵文化財調査室
室長　下　條　信　行

例　言

1　本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が1999年度に実施した文京遺跡20次調査と、2001年度に実施した文京遺跡23次調査の報告書である。

2　愛媛大学埋蔵文化財調査室では、これまで文京遺跡について、8・9・11次調査、10次調査、13次調査の報告書を刊行している。本書が4冊目の報告書となることから、『文京遺跡Ⅳ』とした。また同時に、愛媛大学埋蔵文化財調査報告第Ⅰ冊にあたる。

3　埋蔵文化財調査室では、事前全面調査・遺跡範囲確認調査については、遺跡毎に調査次数を付しているが、同時にすべての小規模調査も含めて、1975年から始まった大学構内の発掘調査まで遡って調査番号を与えている。調査番号は、西暦の下3桁の後に各年度ごとの調査順に1からの2桁の通し番号を加えた5桁の番号で表示している。調査番号に加えて、複数の地点（トレンチ）を調査した場合、－の後に地点番号を付して表示している。



4　本書で表示した座標・標高・方位は、文京遺跡20次調査では、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系Ⅳ系にしたがった。23次調査では、トレンチ位置測量については、周辺建物等を平板測量して、後に座標系を有する地図上に落とし込んでおり、方位は磁北を示す。なお、図1は国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図「三津浜」・「松山北部」・「郡中」・「松山南部」を複製したものである。

5　土層・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1967）に準拠している。

6　本書に使用した遺構図は、吉田広・三吉秀充・山村芳貴・坂元恒太・武田尊子・丸毛のぞみが作成し、製図を吉田・三吉・宮崎直栄が行った。縮尺は、20次調査が1/50を基本とし、23次調査は1/40である。

7　本書に使用した遺物図は、吉田・三吉・山田誠司・濱田美加が作成・製図を行った。縮尺は1/4を基本とする。また、担当した遺物の観察表作成と本文記述についても、それぞれが担当した。なお、図10-12～16・19及び微細剥片に関しては愛媛大学法文学部助教授村上恭通氏に、図10-17に関しては愛媛大学法文学研究科大学院生兒玉洋志氏に依頼した。

8　本書で使用した遺構・遺物写真は、吉田・三吉が撮影した。なお、図版16および18-8の顕微鏡による写真撮影は村上氏に依頼した。

9　出土遺物の自然科学的分析については、赤色顔料の分析を近畿大学南武志氏に依頼し、玉稿をいただいた。樹種同定・種実同定・動物遺存体同定については、㈱古環境研究所に分析を委託し、その報告を掲載した。また、SX-22については村上氏に分析を依頼し、その報告は本文中に掲載した。

10　本書の作成にあたっては、愛媛大学法文学部考古学研究室、岡山真知子氏からご協力いただいた。

11　本書の執筆は、吉田・三吉・山田・濱田・村上・兒玉が担当し、分担は目次と文末に示した。

12　本書の編集は、下條信行の指導のもとに、田崎博之・三吉・宮崎・渡邉かおるの協力を得ながら、吉田が行った。

13　本書に報告した調査に関わる記録類・出土遺物は、愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管されている。

目　次

Ⅰ　遺跡の環境 …… 1
1　遺跡の位置と既往調査 …… (吉田) … 1
（1）遺跡の位置 …… 1
（2）遺跡の既往調査成果 …… 2
2　遺跡の区割と基本層序 …… (吉田) … 2
（1）遺跡の区割 …… 2
（2）遺跡の基本層序 …… 2

Ⅱ　文京遺跡20次調査 …… 5
1　調査・整理の体制と経過 …… (吉田) … 5
（1）調査にいたる経緯 …… 5
（2）調査の体制 …… 5
（3）調査の経過 …… 5
（4）整理作業の体制 …… 6
（5）整理作業の経過 …… 6
2　整理の方法 …… (吉田) … 7
（1）遺構・遺物の登録 …… 7
（2）遺物・記録類の保管 …… 7
3　調査の概要 …… (吉田) … 8
（1）土層の堆積状況 …… 8
（2）遺構と遺物 …… 13
4　調査の記録 …… 14
A　弥生時代の遺構と遺物 …… (吉田・三吉・山田・濱田・村上・兒玉) … 14
（1）遺構の分布 …… 14
（2）竪穴式住居 …… 15
① SC-35 (15)　② SC-65 (22)
（3）溝 …… 22
① SD-33 (22)　② SD-34 (22)　③ SD-37 (26)　④ SD-36 (26)
⑤ SD-44 (26)　⑥ SD-43 (26)
（4）土壙 …… 27
① SK-20 (27)　② SK-31 (27)　③ SK-39 (27)　④ SK-45 (27)
⑤ SK-46 (27)　⑥ SK-47 (27)　⑦ SK-55 (28)　⑧ SK-59 (28)
⑨ SK-60 (28)　⑩ SK-61 (28)　⑪ SK-62 (28)
（5）その他の遺構 …… 28
① SX-38 (28)　② SX-40 (29)　③ SX-41 (29)　④ SX-42 (31)
⑤ SX-49 (31)　⑥ SX-50 (31)　⑦ SX-51 (32)　⑧ SX-52 (32)
⑨ SX-53 (32)　⑩ SX-54 (32)　⑪ SX-56 (32)　⑫ SX-57 (32)
⑬ SX-58 (32)　⑭ SX-63 (32)　⑮ SX-66 (32)
（6）柱穴・小穴 …… 34
B　古墳時代の遺構と遺物 …… (吉田・三吉・山田) … 36
（1）遺構の分布 …… 36
（2）竪穴式住居 …… 38
① SC-27 (38)　② SC-28 (39)　③ SC-29 (40)
（3）掘立柱建物 …… 42
① SB-67 (42)　② SB-68 (43)　③ SB-69 (44)　④ SB-70 (46)
（4）土壙 …… 47
① SK-30 (47)

（5）柱穴・小穴 ……47
（6）北3区の遺構と遺物 ……51
C　Ⅲ層の調査と出土遺物 ……（吉田・三吉・山田・村上）…54
（1）遺物の出土状況 ……54
（2）出土遺物 ……55
① Ⅲ層出土遺物（55）　② SX-32出土遺物（59）
（3）北2区の調査 ……59
D　古代以降の遺構と遺物 ……（吉田・三吉・山田・濱田）…60
（1）遺構の分布 ……60
（2）溝 ……60
① SD-1（60）　② SD-2（68）　③ SD-3（76）
④ SD-1～3断割出土遺物（81）　⑤ SD-71（81）　⑥ SD-64（81）
⑦ SD-4（81）　⑧ SD-5（83）　⑨ SD-6（83）
（3）土壙 ……84
① SK-7（84）　② SK-9（85）　③ SK-11（86）　④ SK-17（86）
⑤ SK-12（86）　⑥ SK-21（87）
（4）その他の遺構 ……87
① SX-13（87）　② SX-14（87）　③ SX-15（89）　④ SX-16（92）
⑤ SX-19（92）　⑥ SX-26（93）
（5）柱穴・小穴 ……94
（6）灰黄褐色砂質土出土の遺物 ……94
E　撹乱層出土の遺物 ……（吉田・濱田）…96
5　自然科学的分析 ……98
A　文京遺跡出土赤色顔料の分析 ……（南　武志）…98
B　樹種同定 ……（㈱古環境研究所）…103
C　種実同定 ……（㈱古環境研究所）…104
D　動物遺存体同定 ……（㈱古環境研究所）…106
6　まとめ ……（吉田・三吉）…108
（1）遺構の変遷 ……108
（2）竪穴式住居SC-35 ……109
（3）中世の溝群 ……111
表8　文京遺跡20次調査出土遺構一覧 ……（吉田・三吉）…113
表9　文京遺跡20次調査出土遺物観察表 ……（吉田・三吉・山田・濱田）…126

Ⅲ　文京遺跡23次調査 ……139
1　調査・整理の体制と経過 ……（吉田）…139
（1）調査にいたる経緯 ……139
（2）調査の体制 ……139
（3）調査の経過 ……139
（4）整理作業の体制 ……140
（5）整理作業の経過 ……140
2　整理の方法 ……（吉田）…140
（1）遺構・遺物の登録 ……140
（2）遺物・記録類の保管 ……141
3　調査の概要 ……（吉田）…141
4　調査の記録 ……（吉田・三吉・山田）…142
（1）1トレンチ ……143
（2）2トレンチ ……143
（3）3トレンチ ……143
（4）4トレンチ ……144

（5） 5トレンチ……145
（6） 6トレンチ……145
（7） 7トレンチ……147
（8） 8トレンチ……150
（9） 9トレンチ……150
（10） 10トレンチ……157
（11） 11トレンチ……157
（12） 12トレンチ……158
5 まとめ……（吉田）…158
（1） 域北団地南縁の遺跡の展開……158
（2） SX-16出土土器の位置づけ……161
表11 文京遺跡23次調査出土遺物観察表……（吉田・山田）…165

Ⅳ 文京遺跡の弥生集落の一様相……（吉田）…167

図 版

報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭図版1
1 20次調査古代・中世面完掘状況（南東から）
2 20次調査弥生・古墳面完掘状況（西から）
巻頭図版2
1 20次調査SC-35（北から）
2 20次調査SC-35中央土壙（SK-48）赤色顔料検出状況
巻頭図版3
1 20次調査SX-22検出状況（南西から）
2 20次調査SX-22完掘状況（南西から）
巻頭図版4
1 20次調査東西畔土層断面
2 20次調査南北畔土層断面

図 版 目 次

図版1 文京遺跡20次調査(1)
1 弥生・古墳面遺構検出状況（南東から）
2 弥生・古墳面完掘状況（南東から）
図版2 文京遺跡20次調査(2)
1 SC-35焼土・炭①・②検出状況（北から）
2 SC-35焼土・炭①・②検出状況（西から）
図版3 文京遺跡20次調査(3)
1 SC-35屋根材検出状況（南から）
2 SK-48屋根材検出状況（北から）
図版4 文京遺跡20次調査(4)
1 SK-48A-A'畔（北から）
2 SK-48B-B'畔（北西から）
図版5 文京遺跡20次調査(5)
1 SK-48炭化物・赤色顔料検出状況（北東から）
2 SK-48完掘状況（北西から）
図版6 文京遺跡20次調査(6)
1 調査区北西部弥生・古墳面完掘状況（西から）
2 SD-33・34・36（南から）
図版7 文京遺跡20次調査(7)
1 調査区南西部弥生・古墳面完掘状況（西から）
2 SX-40完掘状況（南西から）
図版8 文京遺跡20次調査(8)
1 SC-27・28検出状況（西から）
2 SC-28完掘状況（南西から）
図版9 文京遺跡20次調査(9)
1 SC-27・28完掘状況（西から）
2 SC-27完掘状況（南東から）
図版10 文京遺跡20次調査(10)

1　CU13区粘土検出状況（北西から）
2　SC-29遺物・焼土出土状況（南西から）
3　北１区完掘状況（南西から）
4　SC-29竈検出状況（西から）
5　北２区完掘状況（南から）
6　北３区完掘状況（北西から）
図版11　文京遺跡20次調査(11)
1　南区完掘状況（南東から）
2　SP-443土層断面（北から）
3　輪羽口（R37）他出土状況（北東から）
4　鞴羽口（R37）他出土状況（南から）
5　SX-22検出状況（北西から）
6　SX-22検出状況（南西から）
図版12　文京遺跡20次調査(12)
1　古代・中世面遺構検出状況（南東から）
2　古代・中世面完掘状況（西から）
図版13　文京遺跡20次調査(13)
1　SD-２ウシ下顎骨（R6）出土状況(1)（西から）
2　SD-２ウシ下顎骨（R6）出土状況(2)（西から）
3　SD-１～３（Y＝-67168）土層（北西から）
4　SD-１～３（Y＝-67156.2）土層（北西から）
図版14　文京遺跡20次調査(14)
1　SK-９土層断面（西から）
2　SX-15検出状況（北西から）
3　SX-13検出状況（北から）
4　SX-17完掘状況（北から）
5　SX-19完掘状況（北東から）
6　SP-130遺物出土状況（東から）
図版15　文京遺跡20次調査(15)
1　SC-35出土遺物(1)
2　SC-35出土遺物(2)
3　SC-35出土遺物(3)
4　SC-35出土遺物(4)
5　SC-35出土遺物(5)
6　SC-35出土遺物(6)
7　SC-35出土遺物(7)
8　SC-35出土遺物(8)
9　SC-35出土遺物(9)
図版16　文京遺跡20次調査(16)
1　SC-35出土遺物(10)
2　SC-35出土遺物(11)
図版17　文京遺跡20次調査(17)
1　SD-33出土遺物(1)
2　SD-33出土遺物(2)
3　SD-33出土遺物(3)
4　SD-44出土遺物
5　SX-50出土遺物(1)
6　SX-50出土遺物(2)
7　弥生時代柱穴（SP-377）出土遺物
8　弥生時代柱穴（SP-422）出土遺物
図版18　文京遺跡20次調査(18)
1　SC-27出土遺物(1)
2　SC-27出土遺物(2)
3　SC-27出土遺物(3)
4　SC-28出土遺物(1)
5　SC-28出土遺物(2)
6　SC-28出土遺物(3)
7　SC-28出土遺物(4)
8　SC-28出土遺物(5)
図版19　文京遺跡20次調査(19)
1　SC-29出土遺物(1)
2　SC-29出土遺物(2)
3　SC-29出土遺物(3)
4　北１区Ⅲ層出土遺物
5　北１区攪乱層出土遺物
6　SB-67出土遺物
7　SB-69出土遺物
8　SB-70出土遺物
図版20　文京遺跡20次調査(20)
1　古墳時代柱穴（SP-148）出土遺物
2　古墳時代柱穴（SP-150）出土遺物
3　古墳時代柱穴（SP-170）出土遺物
4　古墳時代柱穴（SP-189）出土遺物
5　SC-23出土遺物(1)
6　SC-23出土遺物(2)
7　SC-23出土遺物(3)
図版21　文京遺跡20次調査(21)
1　Ⅲ層出土遺物(1)
2　Ⅲ層出土遺物(2)
3　Ⅲ層出土遺物(3)
4　Ⅲ層出土遺物(4)
5　Ⅲ層出土遺物(5)
6　Ⅲ層出土遺物(6)
7　Ⅲ層出土遺物(7)
図版22　文京遺跡20次調査(22)
1　Ⅲ層出土遺物(8)
2　Ⅲ層出土遺物(9)
3　Ⅲ層出土遺物(10)
4　Ⅲ層出土遺物(11)
5　Ⅲ層出土遺物(12)
6　Ⅲ層出土遺物(13)
7　Ⅲ層出土遺物(14)
8　Ⅲ層出土遺物(15)
9　Ⅲ層出土遺物(16)
10　Ⅲ層出土遺物(17)
11　Ⅲ層出土遺物(18)
図版23　文京遺跡20次調査(23)
1　SD-１出土遺物(1)
2　SD-１出土遺物(2)
3　SD-１出土遺物(3)

4　SD－1出土遺物(4)
5　SD－1出土遺物(5)
6　SD－1出土遺物(6)
7　SD－1出土遺物(7)
8　SD－1出土遺物(8)
9　SD－1出土遺物(9)
図版24　文京遺跡20次調査24
1　SD－1出土遺物10
2　SD－1出土遺物11
3　SD－1出土遺物12
4　SD－1出土遺物13
5　SD－1出土遺物14
6　SD－1出土遺物15
7　SD－2出土遺物(1)
8　SD－2出土遺物(2)
図版25　文京遺跡20次調査25
1　SD－2出土遺物(3)
2　SD－2出土遺物(4)
3　SD－2出土遺物(5)
4　SD－2出土遺物(6)
5　SD－2出土遺物(7)
6　SD－2出土遺物(8)
7　SD－2出土遺物(9)
8　SD－2出土遺物10
9　SD－2出土遺物11
図版26　文京遺跡20次調査26
1　SD－2出土遺物12
2　SD－2出土遺物13
3　SD－2出土遺物14
4　SD－2出土遺物15
5　SD－2出土遺物16
6　SD－2出土遺物17
7　SD－2出土遺物18
8　SD－2出土遺物19
9　SD－2出土遺物20
10　SD－2出土遺物21
11　SD－2出土遺物22
12　SD－2出土遺物23
13　SD－2出土遺物24
図版27　文京遺跡20次調査27
1　SD－3出土遺物(1)
2　SD－3出土遺物(2)
3　SD－3出土遺物(3)
4　SD－3出土遺物(4)
5　SD－3出土遺物(5)
6　SD－3出土遺物(6)
7　SD－3出土遺物(7)
8　SD－3出土遺物(8)
9　SD－3出土遺物(9)
10　SD－3出土遺物10
図版28　文京遺跡20次調査28
1　SD－3出土遺物11
2　SD－3出土遺物12
3　SD－64出土遺物(1)
4　SD－64出土遺物(2)
5　SD－4出土遺物
6　SD－5出土遺物
7　SD－6出土遺物
8　SK－9出土遺物(1)
9　SK－9出土遺物(2)
10　SK－9出土遺物(3)
11　SK－9出土遺物(4)
図版29　文京遺跡20次調査29
1　SK－17出土遺物
2　SX－13出土遺物(1)
3　SX－13出土遺物(2)
4　SX－14出土遺物(1)
5　SX－14出土遺物(2)
6　SX－14出土遺物(3)
7　SX－14出土遺物(4)
8　SX－14出土遺物(5)
図版30　文京遺跡20次調査30
1　SX－14出土遺物(6)
2　SX－14出土遺物(7)
3　SX－14出土遺物(8)
4　SX－14出土遺物(9)
5　SX－14出土遺物10
6　SX－14出土遺物11
7　SX－14出土遺物12
8　SX－14出土遺物13
図版31　文京遺跡20次調査31
1　SX－14出土遺物14
2　SX－14出土遺物15
3　SX－14出土遺物16
4　SX－14出土遺物17
5　SX－15出土遺物
6　SX－19出土遺物(1)
7　SX－19出土遺物(2)
8　SX－19出土遺物(3)
9　中世柱穴（SP－130）出土遺物
10　中世柱穴（SP－134）出土遺物
11　灰黄褐色砂質土出土遺物
図版32　文京遺跡20次調査32
1　撹乱層出土遺物(1)
2　撹乱層出土遺物(2)
3　撹乱層出土遺物(3)
4　撹乱層出土遺物(4)
5　撹乱層出土遺物(5)
6　撹乱層出土遺物(6)
7　撹乱層出土遺物(7)

8　撹乱層出土遺物(8)
9　撹乱層出土遺物(9)
10　撹乱層出土遺物(10)
11　撹乱層出土遺物(11)
図版33　文京遺跡20次調査(33)
文京遺跡20次調査の炭化材
図版34　文京遺跡20次調査(34)
文京遺跡20次調査の種実
図版35　文京遺跡20次調査(35)
文京遺跡20次調査の動物遺存体Ⅰ
図版36　文京遺跡20次調査(36)
文京遺跡20次調査の動物遺存体Ⅱ
図版37　文京遺跡23次調査(1)
1　1トレンチ（北東から）
2　2トレンチ（西から）
3　3トレンチ（北東から）
4　4トレンチ（北から）
5　5トレンチ（北から）
6　6トレンチ（北から）
図版38　文京遺跡23次調査(2)
1　7トレンチSR-5（東から）
2　7トレンチⅣ層上面遺構検出（北西から）
3　7トレンチ東壁土器出土状況（西から）
4　7トレンチ完掘（北西から）
5　8トレンチ土器出土状況（北西から）
6　8トレンチ（北西から）
図版39　文京遺跡23次調査(3)
1　9トレンチSX-16土器出土状況（北から）
2　9トレンチSX-16検出状況（西から）
3　9トレンチ完掘（北西から）
4　9トレンチ東壁土層（西から）
5　10トレンチ（西から）
6　11トレンチ（西から）
図版40　文京遺跡23次調査(4)
1　2トレンチ出土遺物
2　3トレンチ出土遺物
3　4トレンチ出土遺物
4　6トレンチSK-6出土遺物(1)
5　6トレンチSK-6出土遺物(2)
6　7トレンチSP-8出土遺物
7　7トレンチSP-12出土遺物
8　7トレンチSR-5出土遺物
9　8トレンチ出土遺物
図版41　文京遺跡23次調査(5)
1　9トレンチSX-16出土遺物(1)
2　9トレンチSX-16出土遺物(2)
3　9トレンチSX-16出土遺物(3)
4　9トレンチSX-16出土遺物(4)
5　9トレンチSX-16出土遺物(5)
6　9トレンチSX-16出土遺物(6)
図版42　文京遺跡23次調査(6)
1　9トレンチSX-16出土遺物(7)
2　9トレンチSX-16出土遺物(8)
3　9トレンチSX-16出土遺物(9)
4　9トレンチSX-16出土遺物(10)
5　9トレンチSX-16出土遺物(11)
6　9トレンチSX-16出土遺物(12)
7　9トレンチSX-16出土遺物(13)
図版43　文京遺跡23次調査(7)
1　9トレンチSX-16出土遺物(14)
2　9トレンチSX-16出土遺物(15)
3　9トレンチSX-16出土遺物(16)
4　9トレンチSX-16出土遺物(17)
5　9トレンチSX-16出土遺物(18)
6　9トレンチⅢ層出土遺物
7　10トレンチ出土遺物

付　図

付図　文京遺跡20次調査遺構配置図（縮尺1/100）

挿図目次

図1　文京遺跡位置図（縮尺1/75,000）…… 1
図2　文京遺跡の区劃
（縮尺1/5,000、1/1,000、1/200）…… 3
図3　文京遺跡20次・23次調査周辺の既往調査
（縮尺1/2,000）…… 4
図4　文京遺跡20次調査土層断面図
（縮尺1/100・1/50）…… 9・10

図5　弥生・古墳時代遺構配置図（縮尺1/100）……11・12
図6　弥生時代主要遺構配置図（縮尺1/200）……14
図7　SC-35遺構実測図（縮尺1/40）……16
図8　SC-35中央土壙（SK-48）遺構実測図（縮尺1/20）……17
図9　SC-35出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）……18
図10　SC-35出土遺物実測図(2)（縮尺2/3）……19
図11　SC-35出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）……20
図12　SC-65（南区）遺構実測図（縮尺1/50）…22
図13　SD-33北部・34・37・SX-63遺構実測図（縮尺1/50）……23
図14　SD-36・44・SK-39遺構実測図（縮尺1/50）……24
図15　SD-33南端・43遺構実測図（縮尺1/50）……25
図16　SD-33出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…25
図17　SD-36出土遺物実測図（縮尺1/4）……26
図18　SD-44出土遺物実測図（縮尺1/4）……26
図19　SK-20遺構実測図（縮尺1/50）……26
図20　SK-45・SX-49遺構実測図（縮尺1/50）…27
図21　SK-46遺構実測図（縮尺1/50）……27
図22　SK-47遺構実測図（縮尺1/50）……27
図23　SK-55遺構実測図（縮尺1/50）……28
図24　SK-59遺構実測図（縮尺1/50）……28
図25　SK-61・62遺構実測図（縮尺1/50）……28
図26　SX-38遺構実測図（縮尺1/50）……28
図27　SX-40遺構実測図（縮尺1/50）……29
図28　SX-40出土遺物実測図（縮尺1/4）……29
図29　SX-41遺構実測図（縮尺1/50）……29
図30　SX-42遺構実測図（縮尺1/50）……29
図31　SX-50・51遺構実測図（縮尺1/50）……30
図32　SX-50出土遺物実測図（縮尺1/4）……31
図33　SX-52遺構実測図（縮尺1/50）……31
図34　SX-53遺構実測図（縮尺1/50）……33
図35　SX-54遺構実測図（縮尺1/50）……33
図36　SX-56～58・SK-60遺構実測図（縮尺1/50）33
図37　SX-57出土遺物実測図（縮尺1/4）……33
図38　弥生時代の柱穴・小穴遺構実測図（縮尺1/50）……34
図39　弥生時代の柱穴・小穴出土遺物実測図（縮尺1/4）……35
図40　古墳時代主要遺構配置図（縮尺1/200）……36
図41　SC-27遺構実測図（縮尺1/50）……37
図42　SC-27出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2、1/1）……38
図43　SC-28遺構実測図（縮尺1/50）……39
図44　SC-28出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…40
図45　北1区遺構実測図（縮尺1/50）……41
図46　北1区出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…42
図47　SB-67遺構実測図（縮尺1/50）……43
図48　SB-67出土遺物実測図（縮尺1/4）……43
図49　SB-68遺構実測図（縮尺1/50）……44
図50　SB-69遺構実測図（縮尺1/50）……45
図51　SB-69出土遺物実測図（縮尺1/4）……45
図52　SB-70遺構実測図（縮尺1/50）……46
図53　SB-70出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…46
図54　古墳時代の柱穴・小穴遺構実測図(1)（縮尺1/50）……48
図55　古墳時代の柱穴・小穴遺構実測図(2)（縮尺1/50）……49
図56　古墳時代の柱穴・小穴出土遺物（縮尺1/4、1/2）……50
図57　北3区遺構実測図（縮尺1/50）……52
図58　北3区出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…53
図59　CX14区Ⅲ層内遺物出土状況（縮尺1/10）…54
図60　SX-22位置図（縮尺1/50、1/20）……54
図61　Ⅲ層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……56
図62　Ⅲ層出土遺物実測図(2)（縮尺1/4、1/2、1/1）……57
図63　SX-32出土遺物実測図（縮尺1/4）……58
図64　北2区実測図（縮尺1/50）……59
図65　古代以降の遺構配置図（縮尺1/100）…61・62
図66　SD-1～3遺構実測図（縮尺1/100）…63・64
図67　SD-1～3土層断面図（縮尺1/50）……65
図68　SD-1出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……66
図69　SD-1出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……67
図70　SD-1出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）……68
図71　SD-1出土遺物実測図(4)（縮尺1/4、1/2）69
図72　SD-2出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……70
図73　SD-2出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……71
図74　SD-2出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）……72
図75　SD-2出土遺物実測図(4)（縮尺1/4）……73
図76　SD-2出土遺物実測図(5)（縮尺1/4）……74
図77　SD-2出土遺物実測図(6)（縮尺1/4）……74
図78　SD-2出土遺物実測図(7)（縮尺1/2）……75
図79　SD-2出土遺物実測図(8)（縮尺1/2）……76
図80　SD-3出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……77
図81　SD-3出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……78
図82　SD-3出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）……79
図83　SD-3出土遺物実測図(4)（縮尺1/2）……79
図84　SD-3出土遺物実測図(5)（縮尺1/2）……80
図85　SD-1～3断割出土遺物実測図（縮尺1/4）80
図86　SD-64出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…81
図87　SD-4～6・SK-7遺構実測図（縮尺1/50）82
図88　SD-4～6・SK-7出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）……83
図89　SK-9遺構実測図（縮尺1/50）……84
図90　SK-9出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…84
図91　SK-11・17遺構実測図（縮尺1/50）……85
図92　SK-17出土遺物実測図（縮尺1/8）……85

図93　SK-12遺構実測図（縮尺1/50）……85
図94　SK-12出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…85
図95　SX-13遺構実測図（縮尺1/50）……86
図96　SX-13出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…86
図97　SX-14遺構実測図（縮尺1/50）……87
図98　SX-14出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……88
図99　SX-14出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）……89
図100　SX-14出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）……90
図101　SX-14出土遺物実測図(4)（縮尺1/2）……91
図102　SX-15遺構実測図（縮尺1/50）……92
図103　SX-15出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…92
図104　SX-16遺構実測図（縮尺1/25）……92
図105　SX-19遺構実測図（縮尺1/50）……92
図106　SX-19出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）…93
図107　SX-26遺構実測図（縮尺1/20）……93
図108　古代以降の柱穴・小穴遺構実測図
（縮尺1/50）……94
図109　古代以降の柱穴・小穴出土遺物実測図
（縮尺1/4）……94
図110　灰黄褐色砂質土出土遺物実測図
（縮尺1/4、1/2）……94
図111　撹乱層出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）……95
図112　撹乱層出土遺物実測図(2)
（縮尺1/4、1/2、1/1）……96
図113　撹乱層出土遺物実測図(3)（縮尺1/2）……97
図114　文京遺跡20次調査出土赤色顔料の
蛍光X線分析(1)……99
図115　文京遺跡20次調査出土赤色顔料の
蛍光X線分析(2)……100
図116　文京遺跡20次調査出土赤色顔料の
蛍光X線分析(3)……101
図117　文京遺跡20次調査出土赤色顔料の
蛍光X線分析(4)……102
図118　文京遺跡20次調査遺構の変遷
（縮尺1/400）……108
図119　打製石器石材組成……110
図120　文京遺跡南部の中世の溝
（縮尺1/2,000）……111
図121　1～3トレンチ位置図・実測図
（縮尺1/400、1/40）……142
図122　1～3トレンチ出土遺物実測図
（縮尺1/4、1/2）……143
図123　4・5トレンチ位置図・実測図
（縮尺1/400、1/40）……144
図124　4トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/4）…144
図125　6・7トレンチ位置図・実測図
（縮尺1/400、1/40）……146
図126　6トレンチ出土遺物実測図
（縮尺1/4、1/2）……147
図127　7トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/4）…148
図128　8・9トレンチ位置図・実測図
（縮尺1/400、1/40）……149
図129　8トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/4）…150
図130　9トレンチ出土遺物実測図(1)
（縮尺1/4）……152
図131　9トレンチ出土遺物実測図(2)
（縮尺1/4）……153
図132　9トレンチ出土遺物実測図(3)
（縮尺1/4）……154
図133　9トレンチ出土遺物実測図(4)
（縮尺1/4、1/2）……155
図134　10～12トレンチ位置図・実測図
（縮尺1/400、1/40）……156
図135　10・11トレンチ出土遺物実測図
（縮尺1/4）……157
図136　城北団地南端の東西土層図
（縮尺1/1,000・1/20）……159・160
図137　道後平野の弥生時代中期後葉の土器(1)
（縮尺1/8）……162
図138　道後平野の弥生時代中期後葉の土器(2)
（縮尺1/8）……163
図139　文京遺跡における土器焼成失敗品他の出土地点
（縮尺1/2,000）……168

挿　表　目　次

表1　文京遺跡20次調査出土遺構時代別一覧……8
表2　SC-35出土石器微細剥片一覧……21
表3　文京遺跡20次調査赤色顔料分析試料一覧…98
表4　文京遺跡20次調査樹種同定結果……103
表5　文京遺跡20次調査種実同定試料一覧……105
表6　文京遺跡20次調査種実同定結果……105
表7　文京遺跡20次調査動物遺存体同定結果……107
表8　文京遺跡20次調査出土遺構一覧……113
表9　文京遺跡20次調査出土遺物観察表……126
表10　文京遺跡23次調査出土遺構一覧……141
表11　文京遺跡23次調査出土遺物観察表……165

Ⅰ　遺跡の環境

1　遺跡の位置と既往調査

（1）遺跡の位置（図1）

文京遺跡の所在する道後平野は、四国北西部の高縄半島の南西基部に開けた平野である。平野の南部では、重信川が、石手川・小野川・祇部川などと合流しながら東から西へと流れる。その中で弥生時代の遺跡は、平野周辺部の丘陵裾部や微高地上を中心に営まれ、平野内で10前後のまとまりを形成する。

そのうち、旧石手川が形成した、勝山（城山）と御幸寺山に画された南北約1㎞の扇状地上、東は道後温泉周辺から西に約2㎞の範囲に広がりを有するのが、道後城北遺跡群である。北側では、祝谷の谷部から丘陵部にも遺跡が展開する。文京遺跡は、このような道後城北遺跡群の中央に位置している。

道後城北遺跡群の展開する扇状地は、現在では緩やかに西に傾斜する地形となっている。愛媛大学城北団地内では、標高28～30mである。ただし、弥生時代においては、浅い谷状の東西方向の低地が網の目状に走り、微高地がその間に存在するといった旧地形が、各所の調査成果によって復元されている。　［吉田］

図1　文京遺跡位置図（縮尺1/75,000、枠線は道後城北遺跡群）

（2）遺跡の既往調査成果（図3）

文京遺跡では、1951年頃から遺物が採集され、大学構内では1～3・5～28次にわたる本格・確認調査と試掘・立会調査で、縄文時代前期から近世に及ぶ集落遺跡・生産遺跡であることが判明している。また、松山市埋蔵文化財包蔵地地図にも、「67．文京遺跡（樋又遺跡・元練兵場遺物包含地」として、掲載・周知化されている。

とりわけ、文京町3番構内においては、その西南部を中心に、全国的にも有数の弥生時代中期後葉～後期中葉の集落の存在が判明している。3・7次調査区で大型掘立柱建物が確認され、その西側の12・14・16次調査区を中心に、大規模密集型の弥生集落が展開するのである。

これ以外の時代についても、まず後期を中心とする縄文時代遺跡が、11・27次調査区や、東側の理学部構内の21・24次調査区で確認されている。理学部構内は、さらに縄文時代晩期から弥生時代前期の集落遺跡でもある。古墳時代では、13次調査区に前期の遺跡が存在し、後期には5・12・13・14・16・20次調査区で、集落の広がりが認められる。そして、古代末から中世にかけては、18・25次調査区の低地部で水田層が確認でき、13・20・27次調査区を東西に溝が貫き、一部は近世にも及んでいる。さらに、戦前の練兵場時代の遺構も、特徴的な遺跡として加えることができる。

以上のような展開を見せる文京遺跡も、多くの部分は大学建物建設等に伴い、既に失われてしまっている。これに対し、遺跡範囲確認調査により判明した、弥生時代中期後葉～後期中葉の集落主要部分が残る、14・16次調査区と18・25次調査区の間約5,525㎡と、大型掘立柱建物周辺の法文学部西側駐車場部分約1,270㎡が、グリーンゾーンとして積極的に活用を図っていくことが表明されている。　［吉田］

2　遺跡の区割と基本層序

（1）遺跡の区割（図2）

愛媛大学構内の大半に及ぶ文京遺跡の調査にあたっては、その位置関係を、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系第Ⅳ系に従って、測量・記録し、独自の区割を設定している。1998年に設定した区割は、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系第Ⅳ系の、（X=93900，Y=-66800）を基点として、東から西へ向かって5mおきに、AA・AB・AC…AY・AZ・BA・BB…EN・EO・EP、南から北へ向かって5mおきに、1・2・3・4・5・6…115・116・117・118・119・120とし、両者を組み合わせた5m方眼の調査区画によるものである。さらに必要に応じて、この区画内を1m方眼に分け、南東隅から西に1～5、そして北側列を6～10と、北西隅に到る25区画に細分する。したがって、この1m方眼を示す場合は、「DC27-14」のように呼称することとなる。

なお、城北団地内には、これらの区割および測量の基準として、以下の3級基準点を設置・利用している。

No.1；X=94189.370，Y=-67208.921，H=28.274
No.2；X=94178.099，Y=-67052.098，H=29.342
No.3；X=93971.166，Y=-67057.373，H=29.209
No.5；X=93976.415，Y=-67214.492，H=28.740
［吉田］

（2）遺跡の基本層序

城北団地内の基本層序については、上位からⅠ～Ⅴ層を設定している。その上で、各調査では大区分を基本層序に準拠し、それを構成する細かな土層ごとに枝番号を付けている。基本層序の内容は以下の通り。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。
Ⅱ層：造成以前の灰色系の近世～近代の水田層。
Ⅲ層：弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する黒色～暗褐色系の土層。
Ⅳ層：黄褐色系のシルト～砂質土層で、下部には礫が混じる。縄文時代の遺構・遺物が確認されている。
Ⅴ層：Ⅳ層下の花崗岩を主体とする砂礫ないし礫層。
［吉田］

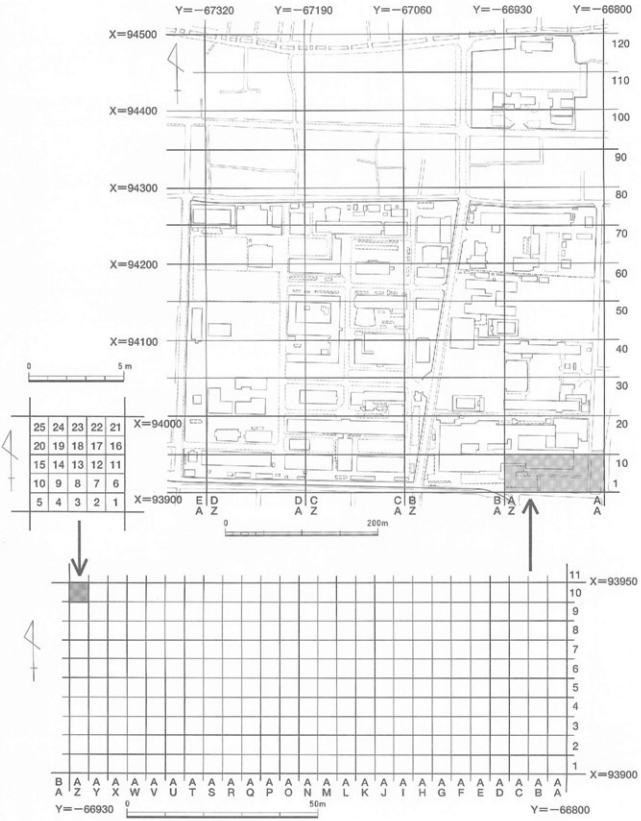


図２　文京遺跡の区割（縮尺１/5,000、１/1,000、１/200）

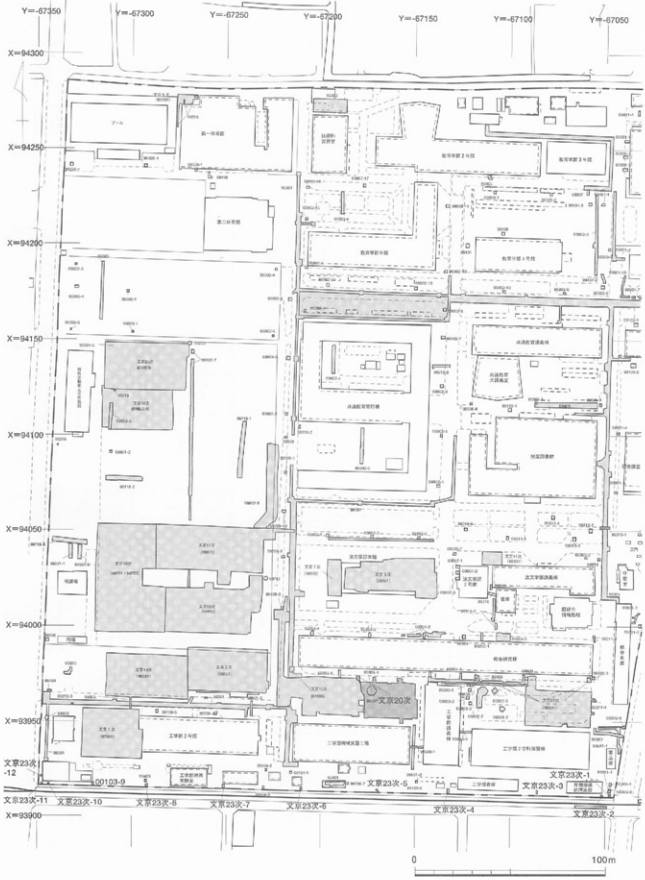


図３　文京遺跡20次・23次調査周辺の既往調査（縮尺１/2,000）

Ⅱ　文京遺跡20次調査

1　調査・整理の体制と経過

（1）調査にいたる経緯

1999（平成11）年度補正予算に伴って、地域共同研究センター東側に隣接して、サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー建物新営が計画された。地域共同研究センター新営にあたっては文京遺跡13次調査として全面調査を行い、相当数の遺構・遺物が出土している。したがって、その東隣の今回の新営地点も、事前に全面調査が必要とされ、平成11年12月15日付の工学部事務長発の事務連絡により、埋蔵文化財調査室に発掘調査の依頼がなされた。これを承けて埋蔵文化財調査室では、施設部との協議により、具体的な発掘計画を立案するとともに、発掘調査に関わる諸手続を進めていった。結果、建物本体部分と電灯新設2箇所を含んだ調査対象面積は588㎡となり、1999年度に文京遺跡20次調査（調査番号：99910）として実施することとなった。　［吉田］

（2）調査の体制

文京遺跡20次調査に関わる1999年度の埋蔵文化財調査委員会および調査体制は、以下の通りである。

［埋蔵文化財調査委員会］

委員長　鮎川恭三（学長）
委　員　藤川研策（法文学部長）
委　員　下條信行（法文学部教授）
委　員　松原弘宣（法文学部教授）
委　員　向井康雄（教育学部長）
委　員　川岡　勉（教育学部教授）
委　員　小松正幸（理学部長）
委　員　前田信治（医学部長）
委　員　有井清益（工学部長）
委　員　西頭徳三（農学部長・～1999. 5. 31）
　　白石雅也（農学部長・1999. 6. 1～）
委　員　久保庭伊佐男（事務局長）
委　員　久保芳廣（総務部長）
委　員　野添文男（経理部長）
委　員　鋳物良雄（施設部長）

［埋蔵文化財調査室］

室　　長　下條信行
調 査 員　田崎博之（法文学部助教授）
　　吉田　広（法文学部講師）
　　三吉秀充（法文学部助手）
専 門 員　松原弘宣
　　村上恭通（法文学部助教授）
　　川岡　勉
整理補助　宮崎直栄（施設部事務補佐員）

以上の体制のもと、施設部第二工営係監督により、実際の調査は吉田・三吉が担当し、山村芳貴（愛媛大学法文学研究科大学院生・現西条市教育委員会）、坂本恒太（愛媛大学法文学部学生・現鹿児島県知覧町ミュージアム知覧学芸員）、武田尊子（愛媛大学法文学部学生・現松山市教育委員会）、丸毛のぞみ（愛媛大学法文学部学生・現今治市教育委員会）、平尾勝洋（愛媛大学法文学部学生）が補佐した。

また発掘調査に関わる事務は、大谷治（施設部企画課長）、氏原修（施設部企画課企画係長）、鈴木優子（施設部事務補佐員）があたった。　［吉田］

（3）調査の経過

発掘調査は、2000年2月14日から表土剥ぎを開始した。Ⅰ・Ⅱ層を重機を用いて掘削し、排土を搬出した後、まず遺物包含層であるⅢ層を切り込む遺構を検出した。調査区南を東西に横断するSD－1～3の溝や、土壙・集石土壙など、古代以降の遺構である。これらの掘り下げを行い、個別の図面・写真等の記録を作成し、Ⅲ層上面の遺構の完掘として、全体写真を撮影した。

その後、遺物包含層であるⅢ層を、平面直角座標Ⅳ系による城北団地区割に従い、1m方眼単位で人力で掘り下げ、遺物を区画毎に取り上げた。Ⅲ層自体は、調査区東部では薄く、西側に厚い堆積であり、とりわけ調査区北西部分は、遺構の重複もあって、Ⅲ層下部をSX－32として掘り下げを行っている。

Ⅲ層掘削後は、Ⅳ層上面で精査を行い、遺構を検出

し、全景撮影を行った。その上で、改めて各遺構毎に掘り下げ、個別の図面・写真等の記録を作成し、全体の完掘写真を撮影した。SC-27・28・35等の竪穴式住居や、土壙・溝であり、弥生時代から古墳時代の遺構である。

この段階で、6月10日(土)に現地説明会を開催し、あいにくの雨天ながら、約50名の参加があった。

その後、土層確認のため重機を用いてⅣ層の掘削を行い、記録を取り、最終的には6月20日にすべての発掘作業を終了し、現場を撤収した。　[吉田]

(4) 整理作業の体制

文京遺跡20次調査の整理作業に関する、2001～2004年度の埋蔵文化財調査委員会・調査室の体制は、以下の通りである。

[埋蔵文化財調査委員会]

委員長　小松正幸（副学長・～2003. 2. 28）
　　小林展章（副学長・2003. 3. 16～2004. 3. 31）
　　（理事・2004. 4. 1～）
委　員　藤川研策（法文学部長・～2003. 3. 31）
　　今泉元司（法文学部長・2003. 4. 1～）
委　員　下條信行（法文学部教授）
委　員　松原弘宣（法文学部教授）
委　員　金藤泰伸（教育学部長・～2004. 3. 31）
　　渡邊弘純（教育学部長・2004. 4. 1～）
委　員　川岡　勉（教育学部教授）
委　員　真鍋　敬（理学部長・～2002. 3. 31）
　　衛澤康信（理学部長・2002. 4. 1～）
委　員　小西正光（医学部長）
委　員　清水　顯（工学部長・～2002. 3. 31）
　　鈴木幸一（工学部長・2002. 4. 1～）
委　員　白石雅也（農学部長）
委　員　塩谷優雄（事務局長・～2003. 3. 31）
　　田村幸男（事務局長・2003. 4. 1～2004. 12. 31）
　　門山　勇（事務局長・2005. 1. 1～）
委　員　大和田和平（総務部長・～2004. 1. 31）
　　山田勝治（総務部長・2004. 2. 1～2004. 3. 31）
　　（経営企画部長・2004. 4. 1～）
委　員　高橋伸一（経理部長・～2003. 3. 31）
　　白石憲二（経理部長・2003. 4. 1～2004. 11. 15）
　　（財務部長・2004. 11. 16～）
委　員　土居昌弘（施設部長・～2004. 3. 31）
　　山地久司（施設部長・2004. 4. 1～2004. 11. 15）
　　（施設基盤部長・2004. 11. 16～）

[埋蔵文化財調査室]

室　　長　下條信行
調 査 員　田崎博之（法文学部教授）
　　吉田　広（法文学部講師・～2002. 9. 30）
　　（法文学部助教授・2002. 10. 1～）
　　三吉秀充（法文学部助手）
専 門 員　松原弘宣
　　村上恭通（法文学部助教授）
　　川岡　勉
整理補助　宮崎直栄（施設部教務補佐員）

以上の体制のもと、整理作業は吉田・三吉の指示により、接合・復元等の作業を、施設部技能補佐員の井出野文江、生鷹千代（～2002. 9. 30）、門田都、松本美和子、丸岡美智子、村上洋子（～2002. 11. 15）が行い、実測・製図等の作業を、施設部技術補佐員の山田誠司（2003年度・現四国中央市教育委員会）と濱田美加（2004年度）が行った。

また整理作業に関わる事務は、秦稔（施設部企画課長・～2003. 3. 31）・堤達行（施設部企画課長・2003. 4. 1～）、稲見俊光（施設部企画課総務係長・～2003. 3. 31）・冨岡文夫（施設部企画課総務係長・2003. 4. 1～）、横本順子（施設部事務補佐員・～2004. 3. 30）・渡邉かおる（施設部事務補佐員・2004. 4. 1～）があたった。　[吉田]

(5) 整理作業の経過

先行調査出土遺物の整理のため、20次調査出土資料の整理はやや遅れ、2001年度に洗浄作業、2002年度に注記・接合・復元と、水洗土壌からの微細遺物の選別作業を行った。その間、基礎的な図面等の整理を終え、概要については、2002年度刊行の『埋蔵文化財調査室年報－1999・2000年度－』に報告したところである。

なお、正式報告書作成に向けた作業は2003年度に開始し、2003・2004年度に遺物の実測を行い、2004年度に製図と写真撮影、報告書執筆・編集を行ったところである。　[吉田]

2　整理の方法

（1）遺構・遺物の登録

20次調査では、城北囲地の基準層序Ⅲ層の上下で、遺構を確認している。確認した大型の遺構のうち、一部欠番を含むが、1～21・71がⅢ層上面で確認した遺構で、22～70がⅢ層途中あるいはⅣ層上面で確認した遺構である。前者がおよそ中近世、後者が弥生から古墳時代の遺構である。この遺構番号に加えて、遺構の種別を、SC：竪穴式住居、SB：掘立柱建物、SD：溝、SK：土壙、SX：その他とする略号を、遺構番号に冠して表した。なお、柱穴あるいは小穴については、SPの略号を冠して、欠番を一部挟むが、101から642の番号を付けて表した。

出土遺物についても、調査時に出土の原位置を記録したものについては、1からのR番号を取上遺物番号として与え、一部欠番を含みながら、113までを数える。出土原位置を記録していない遺物は、土層と調査区割単位あるいは遺構と埋土別の単位での取り上げであり、したがって発掘単位の取り上げである。この取り上げ単位である袋に対して、整理時に1001からの4桁のrを付した番号を登録し、接合他の検討を行った。1001～1084が、Ⅰ層・Ⅱ層・撹乱層、あるいは出土地不明遺物と灰黄褐色砂質土出土遺物。2001～2205が中近世と判断した遺構出土遺物、3001～3439がⅢ層出土遺物（SX-32出土遺物を含む）、そして4001～4294が弥生・古墳時代と判断した遺構出土遺物である。

さらに、報告書に記載すべき記録可能な個体を選別する時点で、1個体（実測図単位）に対して改めて10001からの5桁のR番号（実測遺物番号）を与えた。4桁以下の内訳は、r1000番台に対応するⅠ層他出土遺物が10001～10095、r2000番台に対応する中近世遺構出土が20001～20472、r3000番台に対応するⅢ層出土遺物が30001～30082、そしてr4000番台に対応する弥生・古墳遺構出土が40001～40136である。ただし、5桁の実測遺物番号を付したものでも、本書に掲載していないものが一部存在する。　［吉田］

（2）遺物・記録類の保管

出土したすべての遺物については、文京遺跡20次調査を表すBNK-20と、出土遺構、取上遺物番号（Rあるいはrを冠した4桁までの番号）を注記して、遺物台帳に記録し、遺構等の単位毎に、コンテナに番号を付して収納している。その中から、報告すべき遺物について抽出し、先に述べたような5桁の実測遺物番号を、別色で追加注記している。本報告の挿図番号との対応は、この実測遺物番号に拠っている。これらの遺物は1分の1の実測図を作図し、必要に応じて写真記録をとっている。また、報告書掲載遺物は、本報告挿図単位でコンテナに収納し、コンテナに番号を付して、遺物台帳に記録している。

発掘調査時の記録類には、遺構・土層の観察所見記録・実測図・写真がある。遺構の観察所見記録は、埋土の土質・色調のメモ類で、遺構台帳を作成し、個々の観察記録とした。調査区内のすべての遺構の全体図と、調査区壁の土層断面図を20分の1の縮尺で作成し、主要な遺構については個別に図を作成し、一部には10分の1の縮尺のものもある。これらの実測図には、1から85までの通し番号を付し、遺構図台帳に記録して整理・保管している。

調査の際には、35㎜モノクロ・カラースライド、6×7モノクロ・カラースライドによる写真記録をとっている。こうした写真類については、カットごとに検索用のカードを作成し、写真登録番号を付して、台帳に記録している。カットは、99910-001～150に及ぶ。また各フィルムについてもそれぞれ番号を与え、35㎜モノクロに3桁＋2桁（001-01～）、35㎜カラースライドには3桁（001～）、6×7モノクロ・カラースライドには4桁（0001～）の通しの登録番号を付し、検索用カードと写真台帳に併記している。

以上の方法で記録類と遺物を整理・保管しているが、本書に掲載した遺物については、本文中の遺物観察表に実測遺物番号の項を設けて表記し、報告書から遺物の検索ができるようにしている。　［吉田］

3　調査の概要

調査地点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
　　S. V. B. L. 新営予定地（図３）
調査略号　BNK-20
調査番号　99910
調査面積　588㎡

調査期間　2000年２月14日～６月20日
調査種別　全面調査
整理期間　2001年度～2004年度
調査担当　吉田広・三吉秀充
依頼文書　工学部事務長発事務連絡
　　（平成11年12月15日付）

（１）土層の堆積状況（図４）

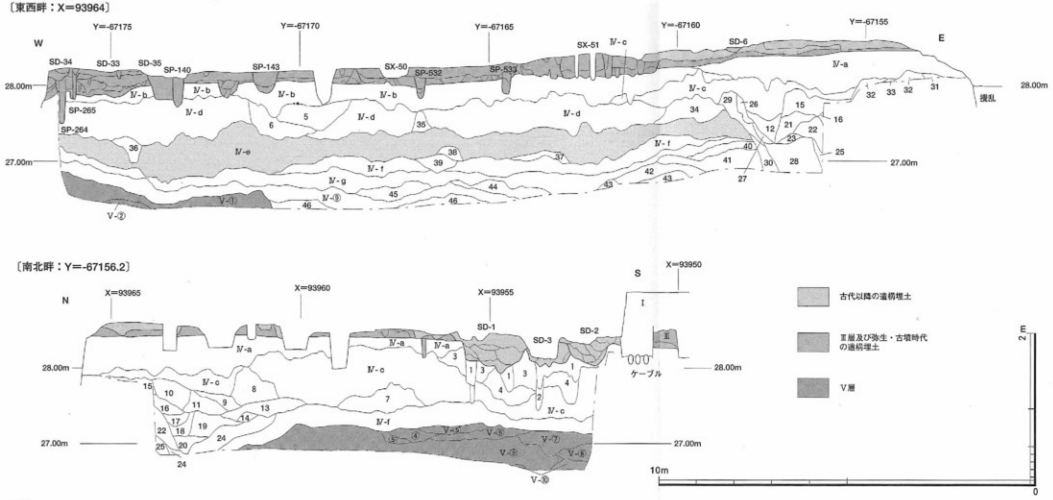
20次調査区においては、Ⅳ層が東から西へと緩やかに傾斜するとともに、遺物包含層である Ⅲ層の堆積も、西側が厚い。また南北には、わずかながらも北側が高く、この地点が西側に延びる微高地上の南側斜面に位置していることがわかる。

Ⅳ層上面以上の調査を終えた後、縄文時代遺跡の有無を確認するため、重機を用いてⅣ層を掘削している。縄文時代に遡る遺構・遺物は出土しなかったが、Ⅳ層以下の堆積状況が確認できた。

Ⅳ層でも上部のⅣ－ａ～ｄ層は、シルト質が強いながらも、３㎜前後までの砂礫をやや含む。それに対してⅣ－ｅ層以下は、砂礫の混じりがなくなる一方で、土層全体の砂質が増す傾向にある。そして、そのような大別間において、砂層や砂礫層を挟んだ顕著な流水性堆積が、調査区北東部に広がっている（Ⅳ－９～30層）。Ⅴ層は、このような流水性堆積のⅣ層を外れた地点で検出でき、Ⅳ層自体の堆積が、Ⅴ層によって形成された起伏に応じていることが示唆される。［吉田］

表１　文京遺跡20次調査出土遺構時代別一覧

遺構	時代・時期						総数
	弥生時代（～古墳時代中期）		古墳時代後期		古代以降		
竪穴式住居	2棟	SC-35・SC-65	5棟	SC-23・SC-24・SC-27・SC-28・SC-29			7棟
掘立柱建物			4棟	SB-67・SB-68・SB-69・SB-70			4棟
溝	6条	SD-33・SD-34・SD-36・SD-37・SD-43・SD-44			8条	SD-1・SD-2・SD-3・SD-4・SD-5・SD-6・SD-61・SD-71	14条
土壙	11基	SK-29・SK-31・SK-39・SK-45・SK-46・SK-47・SK-55・SK-59・SK-60・SK-61・SK-62	2基	SK-25・SK-30	6基	SK-7・SK-9・SK-11・SK-12・SK-17・SK-21	19基
その他	15基	SX-38・SX-40・SX-41・SX-42・SX-49・SX-50・SX-51・SX-52・SX-53・SX-54・SX-56・SX-57・SX-58・SX-63・SX-66			6基	SX-13・SX-14・SX-15・SX-16・SX-19・SX-26	21基
柱穴・小穴	445基	SP-173～188・190～192・194・205～223・225～236・239～442・444・446～481・483～516・518～587・589～597・599～608・610～617・619～634・636～638・640～642	57基	SP-131～133・135～172・189・195～204・224・237・238・443・445	31基	SP-101～130・134	533基
欠番の遺構	SK-8・SK-10・SK-18・72～100、SP-193・482・517・588・598・609・618・635・639 ※ SX-32は土層下部 ※ SK-48はSC-35中央土壙						



Ⅳ層

Ⅳ-a：橙（10YR4/6）シルト質土。シルト質強いが、3mm前後の砂礫多く含む。しまりあり。
Ⅳ-1：にぶい黄（2.5Y6/3）砂質シルト。均質な砂質シルト層。下面に鉄・マンガン分の沈着あり。
Ⅳ-2：暗オリーブ（7.5Y4/3）シルト。
Ⅳ-3：にぶい黄（2.5Y6/4）砂質シルト。2mm前後の砂礫をわずかに含む。
Ⅳ-4：灰黄褐（10YR5/2）砂質土。2mm以下の砂粒を多く含み、しまりやや弱い。
Ⅳ-b：褐（10YR4/4）砂質シルト。砂質強く、しまりやや弱い。直線のしみが所々に混じる。
Ⅳ-5：褐（10YR4/4）砂質シルト。Ⅳ-bに比べ、やや粘性あり。しみ状の汚れあり。
Ⅳ-6：にぶい黄橙（10YR4/3）砂質シルト。砂質強い。しみ状の汚れあり。
Ⅳ-c：橙（10YR4/4）砂質シルト。Ⅳ-bに近いが、3mm前後の砂礫を含み、しまりあり。
Ⅳ-7：にぶい黄橙（10YR7/2）砂質土。万層中でも特に砂質強く、しまり弱い。
Ⅳ-8：灰褐（2.5Y6/2）砂質土。5mm以下の砂礫を多く含む。他は限かく均質な砂質土。
Ⅳ-9：にぶい黄橙（10YR5/4）砂質シルト。Ⅳ-cに比べ、砂粒の混じり少ない。
Ⅳ-10：オリーブ褐（2.5Y4/3）砂礫混土。3mm以下の砂礫を主体に、5cm大までの礫を少し含む。しまりあり。
Ⅳ-11：にぶい黄褐（10YR5/4）砂質シルト。3cm以下の礫をやや多く含む。
Ⅳ-12：黄褐（2.5Y5/4）砂質シルト。シルト質強く、わずかに粘性あり。
Ⅳ-13：にぶい黄橙（10YR5/3）砂質土。2mm以下の砂粒をわずかに多く含む。
Ⅳ-14：灰黄褐（10YR6/2）砂質土。1mm以下の砂粒からなり、しまりやや弱い。
Ⅳ-15：褐灰（10YR5/1）砂質土。1mm以下の砂粒を少し含み、しまりあり。
Ⅳ-16：黄褐（2.5Y5/4）砂質土。3mm以下の砂礫を少し含む。他は均質。
Ⅳ-17：灰黄褐（10YR5/2）砂礫質土。3mm以下の砂礫を多く含み、しまりやや弱い。
Ⅳ-18：暗黄灰（2.5Y5/2）砂質土。2mm以下の砂粒を少し含み、しまり弱い。
Ⅳ-19：褐灰（2.5Y5/1）砂礫質土。3cm前後の砂礫を多く含み、しまりあり。
Ⅳ-20：灰黄（2.5Y6/2）砂礫質土。5cm以下の砂礫を多く含み、しまりやや弱い。
Ⅳ-21：褐灰（10YR6/1）砂。2mm以下の砂粒を主体とし、わずかに微細な褐色シルト粒含む。
Ⅳ-22：灰黄褐（10YR6/2）砂礫。3mm以下の砂礫を主体に、10cm以下の砂礫を多く含む。しまりあり。
Ⅳ-23：灰黄褐（10YR6/2）砂質土。均質な細かい砂質。しまりあり。
Ⅳ-24：褐灰（10YR6/1）砂。1cm以下の砂粒が互層状に堆積。しまり弱い。
Ⅳ-25：灰黄（2.5Y6/2）砂質土。均質な砂質土。
Ⅳ-26：灰黄褐（10YR5/2）砂質土。3mm以下の砂礫を多く含み、しまりあり。
Ⅳ-27：灰黄褐（10YR5/2）砂質土。3mm以下の砂礫を多く含み、5mm大の褐色シルトブロック含む。しまりややあり。
Ⅳ-28：褐灰（10YR6/1）砂質。5mm以下の砂礫からなり、砂質が強く層状に嵌入する。しまり弱い。
Ⅳ-29：にぶい黄褐（10YR5/4）砂質シルト。1mm前後の砂粒やや含む。
Ⅳ-30：にぶい黄（2.5Y6/4）砂質シルト。
Ⅳ-31：褐灰（10YR4/1）砂質土。0.5mm以下の砂粒からなり、しまり弱い。
Ⅳ-32：オリーブ褐（2.5Y4/3）シルト質土。2mm以下の砂粒を含み、シルト質強く、しまりあり。
Ⅳ-33：灰黄褐（10YR4/2）砂礫質土。5cm前後の砂礫を含み、しまりあり。
Ⅳ-d：橙（10YR4/4）砂質シルト。Ⅳ-bより若干シルト質が強く、3mm前後の砂礫を含み、しまりやや弱い。
Ⅳ-34：灰黄褐（10YR5/2）砂質土。0.1mm以下の細かな砂粒からなり、しまり強い。
Ⅳ-35：灰黄褐（10YR5/2）砂質シルト。しみ状の汚れあり。
Ⅳ-36：にぶい黄橙（10YR5/4）砂質シルト。Ⅳ-eよりわずかに粘性あり。
Ⅳ-e：にぶい黄橙（10YR5/4）砂質シルト。砂質強く、しまりやや弱い。砂層が部分的に嵌入し、鉄・マンガン分の沈着が斑状にあり。
Ⅳ-37：灰黄褐（10YR6/2）砂。0.5～1mm大の砂粒からなり、しまりやや弱い。
Ⅳ-38：にぶい黄橙（10YR6/4）砂質土。0.5～1mm大の砂粒を多く含み、しまり弱い。
Ⅳ-39：にぶい黄橙（10YR5/4）砂質シルト。Ⅳ-dに比べ、シルト質弱く、砂質強い。
Ⅳ-f：にぶい黄褐（10YR5/4）砂質シルト。Ⅳ-eとほぼ同じながら、わずかにシルト質強い。
Ⅳ-g：にぶい黄褐（10YR5/4）砂質シルト。砂質なりが、シルト質強く、粘性高い。
Ⅳ-40：褐灰（10YR5/1）砂礫。0.5～2mmの砂粒を主体に、3cm大までの砂礫を多く含む。しまりややあり。
Ⅳ-41：にぶい黄橙（10YR6/3）砂礫。3mm以下の砂礫からなり、わずかにシルト質が混じり、しまりややあり。
Ⅳ-42：黄褐（2.5Y5/4）砂質シルト。2mm以下の砂粒を多く含み、しまりあり。
Ⅳ-43：褐灰（10YR6/1）砂礫。0.5～3mmの砂礫からなり、しまり弱い。
Ⅳ-44：黄灰（2.5Y6/1）砂。0.5～2mmの砂粒からなり、シルト質わずかに含む。
Ⅳ-45：褐灰層（2.5Y5/2）砂礫。1mm以下の砂粒を主体に、3cm大までの砂礫を多く含む。しまりややあり。
Ⅳ-h：にぶい黄褐（10YR5/3）砂質シルト。やや粘性あるが、砂質強く、しまり弱い。
Ⅳ-48：褐灰（10YR6/1）砂。0.2～1mmの砂粒からなる。しまりなし。

Ⅴ層

Ⅴ-①：黄灰（2.5Y4/1）砂礫。0.5mm以下の砂粒を主体に、10cm以下の砂礫を多く含む。しまりあり。
Ⅴ-②：にぶい黄橙（10YR6/3）砂。0.1～0.5mmの砂粒からなり、鉄・マンガン分の沈着あり。しまりなし。
Ⅴ-③：にぶい黄褐（10YR5/3）砂礫質土。1mm以下の砂粒を主体に、3cm以下の砂礫を少し含む。しまりあり。
Ⅴ-④：暗灰黄（2.5Y5/2）砂礫。1mm以下の砂粒を主体に、5cm以下の砂礫を少し含む。しまりあり。
Ⅴ-⑤：にぶい黄褐（10YR5/4）砂。1mmの砂粒からなり、しまり弱い。
Ⅴ-⑥：灰黄（2.5Y6/2）砂質土。1mm以下の砂粒からなり、しまりやや弱い。
Ⅴ-⑦：灰黄褐（10YR5/2）砂質土。2mm以下の砂粒からなり、しまり弱い。
Ⅴ-⑧：灰黄褐（10YR5/2）砂質土。2mm以下の砂粒からなり、3cm以下の砂礫を少し含む。しまり弱い。
Ⅴ-⑨：灰黄褐（10YR5/2）砂礫。1mm前後の砂粒を主体に、10cm以下の砂礫を多く含む。しまりあり。
Ⅴ-⑩：にぶい黄褐（10YR5/3）砂質土。均質な砂粒からなる。

図４　文京遺跡20次調査土層断面図（縮尺１/100・１/50）

図5　弥生・古墳時代遺構配置図（縮尺1/100）

（2）遺構と遺物（表1、図5・65、付図）

20次調査においては、埋土の特徴と層位から、後述するように、出土遺構・遺物を分けることができる。埋土の類型は、上位から以下の通り。

A類型：やや灰色みを帯びた黄灰色から黄褐色の砂質土。

B類型：Ⅲ層に共通する暗褐色砂質土ないしシルト質土で、砂礫や砂粒を比較的多く含む。

C類型：Ⅲ層に共通する暗褐色砂質土ないしシルト質土で、砂礫をほとんど含まない。

①　弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は、Ⅲ層の下・Ⅳ層上面で検出したもので、基本的にC類型の埋土を有する。主要な遺構は以下の通り。

竪穴式住居　2棟：SC-35・65
溝　6条：SD-33・34・36・37・43・44
土壙　11基：SK-20・31・39・45～47・55・59～62
その他の遺構　15基：SX-38・40～42・49～54・56～58・63・66

竪穴式住居SC-35は、径3m前後と小型であるが、床面に台石を据え、周辺から石器微細剥片が顕著に出土し、石器製作を行っていたことが明らかである。また、中央土壙からは赤色顔料も顕著に出土している。それでも出土遺物は決して多くない。また、SC-35以外の遺構からの出土遺物も、さらに少ない。西側の12・14・16次調査地点等とは、対照的な状況である。出土遺物は、弥生土器、石器である。

なお、周辺調査でC類型埋土の遺構は、弥生時代から古墳時代中期の遺構であることが判明しているが、20次調査では古墳時代前期・中期の明確な遺構は存在せず、以下本書では、C類型埋土の遺構を弥生時代遺構として一括する。

②　古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構は、Ⅲ層の下・Ⅳ層上面、あるいはⅢ層中で検出したもので、基本的にB類型の埋土を有する。主要な遺構は以下の通り。

竪穴式住居　5棟：SC-23・24・27～29
掘立柱建物　4棟：SB-67～70
土壙　2基：SK-25・30

竪穴式住居のうち、SC-29は北1区、SC-23・24は北3区の検出で、狭い範囲のため、平面規模等は不明である。残る2棟のSC-27・28は、1辺4m前後の方形と推察されるが、残りは良くない。4棟の掘立柱建物は、1間×1間、あるいは1間×2間以上の建物で、倉庫とみられる。

出土遺物には、須恵器、土師器、鉄器、鉄滓、土玉等があり、弥生土器、石器も一部含む。B類型埋土の遺構は、古墳時代後期の遺構である。

③　Ⅲ層出土の遺物

Ⅲ層は、遺物包含層あるいは遺構埋土上部に相当し、基本的に1m方眼単位で遺物の取り上げを行った。出土遺物には、弥生時代から古墳時代の、弥生土器、石器、土師器、須恵器がある。特に、Ⅲ層上部からは、古墳時代中期の甕と鴻羽口が一緒に出土している。また、調査区西側の一部Ⅲ層下部については、SX-32として掘り下げを行っている。

④　古代以降の遺構・遺物

通常Ⅰ・Ⅱ層下でⅢ層が現れるが、20次調査では、Ⅲ層の上面に流路内堆積層や灰黄褐色砂質土が認められるとともに、A類型埋土の遺構が存在した。これらの主要な遺構は以下の通り。

溝　8条：SD-1～6・64・71
土壙　6基：SK-7・9・11・12・17・21
その他の遺構　6基：SX-13～16・19・26

溝は水路で、12世紀から14世紀を中心とする。一方、その他の遺構のほとんどは、掘り込みを伴う集石遺構で、一部の土壙とともに、近世の墓関連遺構と推定している。

遺物は溝から多く出土しており、古代末から中世の土師器、瓦器、輸入陶磁器、中世陶器、土師質土器、鉄滓等がある。

⑤　撹乱層出土の遺物

主に重機掘削によった撹乱層（Ⅰ・Ⅱ層）については、一部遺物を採集している。その中には、弥生時代から中近世の遺物があるとともに、銃弾や薬莢などの戦前の練兵場時代の遺物がある。なお、一部撹乱は練兵場時代の演習用塹壕の可能性もある。　［吉田］

4　調査の記録

A　弥生時代の遺構と遺物

（1）遺構の分布（図6、図版1）

城北団地基本層序Ⅲ層の下、あるいはⅣ層の上ながらC類型の埋土をもつ遺構は、弥生時代から古墳時代中期の遺構であることが、これまでの調査で判明している。しかし、今回の調査では、明確な古墳時代前・中期の遺構・遺物はほとんど出土してなく、C類型の埋土を有する遺構を、弥生時代の遺構に一括して以下報告する。竪穴式住居2棟（SC-35・65）、溝6条（SD-33・34・36・37・43・44）、土壙11基（SK-20・31・39・45～47・55・59・60～62）、その他の遺構（SX-38・40～42・49～54・56～58・63・66）、そして柱穴・小穴445基である。

調査区中央部のSX-50等は、溜まり状の遺構がほとんどで、それらを除けば、遺構は調査区西部に偏在する。とくに調査区北西部は、後論するⅢ層下部としたSX-32の範囲にほぼ相当し、SD-33等の溝群や柱穴・小穴が集中する。それでも、明確な遺構は、SC-35程度で、他の遺構は出土遺物も少ない。　［吉田］

図6　弥生時代主要遺構配置図（縮尺1/200）

（2）竪穴式住居

① **SC-35**（図7～11、表2、巻頭図版2、図版2～5・15・16）

Ⅰ・Ⅱ層除去後、Ⅲ層を約10cm掘り進め、発掘調査区北西部CW13・14区とCX13・14区で検出。弥生時代のSD-33・36、SP-440を切り、古墳時代後期のSP-140・148・161・165に切られる。住居跡の北東部は、「大正天皇お手植えの松」の植樹（調査番号：99801）と、移植工事（調査番号：99907）の際に攪乱を受け、南西部を残すのみである。Ⅳ層であるにぶい黄色～明黄褐色土を掘り込み、平面プランが、やや楕円形を呈する直径2.9～3.1mの小型竪穴式住居跡。検出面から床面までの深さは約20cm。

[埋土・焼土等]（図版2・3）

埋土掘り下げ過程で、焼土塊や炭化物の集中地点が、住居跡南西部に2箇所見られた。焼土・炭①と焼土・炭②とする。

焼土・炭①は、住居跡南西部に長辺約100cm、最大幅約50cmの不定形状に広がる。1cm大の炭や焼土のブロックが斑点状に広がり、図7の赤実線部分には、大きめの焼土ブロックがまとまって見られる（B-B'土層図①層に対応）。床面から約18cm上部で検出し、約10cm堆積する。焼土・炭①の上面では、弥生土器壺の底部片（11・R102）が出土している。B-B'土層図②層に焼土は含まれないこと、焼土・炭①では石器の細片が全く出土していないことから、焼土・炭①は住居跡廃棄直後、もしくは後世の流入土であると考えられる。

焼土・炭②（A-A'土層図④～⑥層に対応）は、住居跡南部、中央土壙から南にかけて、径約100cmの円形状に広がる。床面で検出したSP-470の上部では、焼土・炭②が広がらず、SP-470埋土からは炭化物がまとまって出土している。現地での観察はできていないが、住居跡廃絶後にSP-470は掘り込まれた可能性が考えられる。

焼土・炭②は、焼土・炭①と異なり、焼土をほとんど含まない。床面ともしくは床面から10cm以内の高さで、屋根材と考えられる炭化した木材（以下「木材」と記す。）が、南北方向に途切れ途切れに残存する。木材は幅4～5cm程度で、残存状況の良好なものは、木材W・木材X・木材Y・木材Zとして取り上げ、樹種同定を行っている。結果、木材Wはツブラジイ、木材X・Y・Zと焼土・炭②中で採取したr4313は、コナラ属アカガシ亜属であることが判明した（詳細はⅡ-5-B参照）。残りの良い木材Yは長さ30cm程度だが、木材Yの北側、SK-48上部で検出した木材も一連のものと考えると、最低でも1mの木材となる。木材は、台石（19・R103）の直上で検出したものもある。さらに数本の木材が、南北方向に整然と並んで見られることから、後世の流り込みではなく、住居が焼失した際に、屋根材が崩れ落ちた状況を示していると考えられる。

A-A'土層図では、木材などの炭化物が、炭化物をあまり含まない⑦層上にのる。⑦層は住居跡南の壁際に見られ、明黄褐色土の小ブロックを含み、しまりがあることなどから、住居使用時にすでに堆積し、踏み固められていたと考えられる。以上の所見から、焼土・炭②は、住居焼失時もしくは、あまり時間を経ない段階で堆積したものと考えられる。

焼土・炭①、焼土・炭②とは別に、住居跡床面中央で、長さ約60cm、幅約20cmにわたって焼土の小ブロック塊が広がる。焼土①として埋土の取り上げを行っている。焼土①は、中央土壙SK-48に接することから、SK-48埋土中で見られる焼土塊と一連のものであり、住居焼失時に形成されたものと考えられる。

[柱穴等]

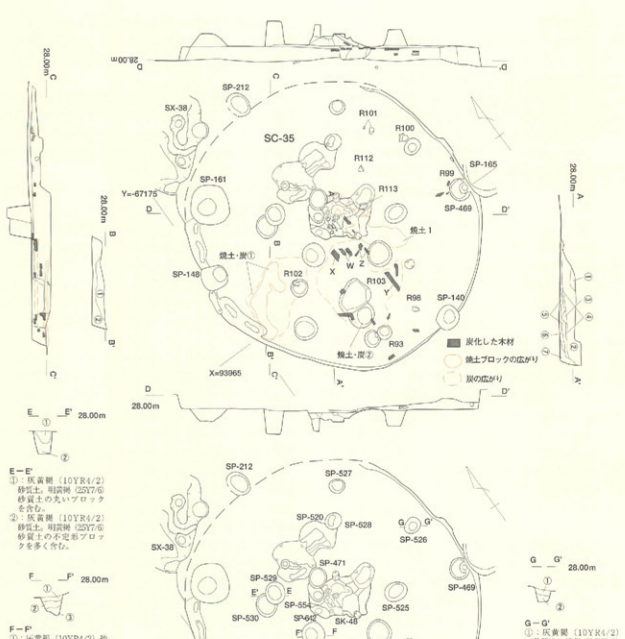
床面では18基の柱穴（SP-469～471・518～531・554）と中央土壙（SK-48）を検出している。検出した柱穴のうち、SP-471とSP-554は、SK-48を切っていることから、SC-35床面検出ではあるものの、後世の掘り込みの可能性が高い。また、SP-523は台石の真下に掘り込まれており、SC-35との関連性は低い。

検出した柱穴は半裁し、埋土を慎重に精査している。しかし、柱痕は未確認であり、主柱穴の確定はできていない。柱穴の配置からすると、中央土壙であるSK-48を挟んだSP-525とSP-529、またはSP-530の2本主柱穴の可能性が考えられる。SP-525は20～25cmの精円形、SP-529・530は径20cmの円形を呈する。床面からの深度はSP-525が約20cm、SP-529・530は約25cmと、床面で検出した柱穴の中では、しっかりしている。

SP-470・471・518・521～531・554の埋土中からは、炭化物の小片が出土している。特にSP-470・523・529・530は炭化物がまとまって出土している。SP-470・523は、埋土掘削中に確認した焼土・炭②の下部近くに位置しており、それらとの関連性が考えられる。

調査時には、床面精査を慎重に実施している。加えて、竪穴式住居を掘り込む基盤層は、にぶい黄色～明黄褐色を呈することから、柱穴の見落としの可能性は低い。主柱穴が本来存在しなかったのか、あるいは存在したと想定するなら、SP-525とSP-529、またはSP-530の2本主柱穴の可能性が考えられる。

柱穴の他に住居跡西側、住居の壁付近で、小さな窪みを4箇所検出したが、浅く不定形であることから、周溝など意図的なものではない。



E－E'
①：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（25Y7/6）砂質土の丸いブロックを含む。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（25Y7/6）砂質土の不定形ブロックを多く含む。

F－F'
①：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土の丸いブロックを少量含む。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土のいびつブロック、1cm大の炭化物を少量含む。
③：にぶい黄褐（10YR4/6）砂質土。明黄褐（2.5YR6/6）粘質土のレンズ状ブロックを多く含む。

G－G'
①：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。浅黄（2.5Y7/3）砂質土の不定形ブロックを含む。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土の不定形ブロックが混じる。

A－A'
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。1mm程度の粒径をやや多く含み、にぶい黄色の1mmブロックを含む。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。1mm黄褐の粒径をわずかに含む。1mm大のにぶい黄色土のブロックを少量含む。しまりあり。炭化物粒を少量含む。
③：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。②層に比べて、にぶい黄色土の混在多く、ブロックの大きさ3mm大とやや大きい。
④：暗褐（10YR3/3）混炭層。炭層が斑的に混じる。粘性あり。粉粒・にぶい黄色土は含まない。
⑤：黒褐（7.5YR3/2）砂質土。5-5②層に対応し、これに比べ粉粒の混合少ない。
⑥：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土が1mm前後のブロックでやや多く混じる。炭化物径をやや含む。しまりあり。③層に比べ粘性あり。
⑦：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色土が1mm前後のブロックで斑状に多数混じる。炭化物粒をわずかに含む。しまりあり。

B－B'
①：黒褐（7.5YR3/2）砂質土を主体としながら、明黄褐（2.5Y7/6）砂質土の丸いブロックを含む。焼土がブロック状に混じる。
②：黒褐（7.5YR3/2）砂質シルト。黒褐（7.5YR3/2）砂質土の丸いブロックを少量含む。焼土は含まない。

図7　SC-35遺構実測図（縮尺1/40）

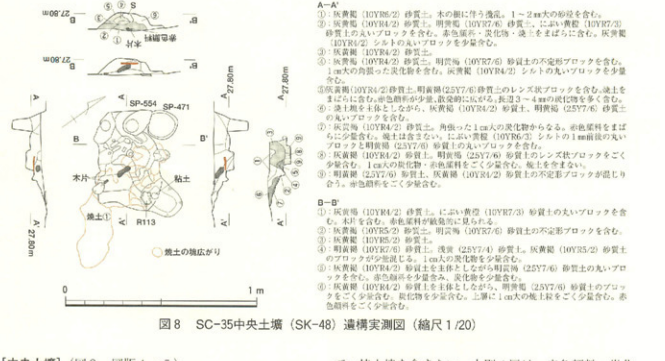


図８　SC-35中央土壙（SK-48）遺構実測図（縮尺１/20）

[中央土壙]（図８、図版４・５）

住居床面中央には、平面プラン40～50㎝の不整長楕円形を呈する中央土壙SK-48が設けられている。断面はすり鉢状で、底面および側面には凹凸が見られる。北西部は柱穴SP-471・554・642に接し、北東部の一部は、木の根によって破壊を受けている。

SK-48における埋土の堆積状況は、攪乱層を除くと大きく４つの単位からなる。A-A'土層図③層とB-B'土層図①層（大別１層）、A-A'土層図④～⑦層（大別２層）、A-A'土層図⑧・⑨層とB-B'土層図②～⑤層（大別３層）、B-B'土層図⑥層（大別４層）である。

大別１層は流入土層。赤色顔料・炭化物を大量に含む。３～５㎜前後の粒状の赤色顔料が、炭化物に混じりながら斑状に広がる。SK-48中央では、径約10㎝の範囲に赤色顔料粒が、斑状ではあるが、集中する。炭化物は、屋根材の焼失に伴うと考えられるが、多くは角のある小片の状態で出土している。埋土中には、焼土塊が少量認められるが、焼土面は見られない。

大別２層は、赤色顔料・焼土塊・炭化物を大量に含む。焼土塊は、土壙北部や南東部（A-A'土層図⑥層）で見られ、焼土塊下部には炭化物混じりの埋土が広がる。大別２層出土の木材ｒ4313、ｒ4368の樹種同定を行った結果、シャシャンボであることが判明した（詳細はⅡ－５－Ｂ参照）。木材が土部から崩れた落ちた状況を示しており、大別２層は住居焼失時に形成されたものであり、シャシャンボも建築部材の一部と考えられる。

大別３層は、炭化物と赤色顔料を含むが、ごく少量で、焼土塊を含まない。大別４層は、赤色顔料・炭化物・焼土粒を少量含んでいる。焼土粒は上層を中心に見られることから、上部層からの混入の可能性がある。大別３・４層は、焼土塊をほとんど含まず、大別１・２層と大きく異なる。焼土塊は、SC-35埋土中にも多数見られ、一連のものと考えるならば、住居が機能していた段階のものとは考えにくい。よって、大別３・４層は、住居焼失以前の堆積層と想定される。

[出土土器]（図９）

SC-35埋土中では、遺物が散発的に出土している。図７A-A'断面を挟んで、東を埋土東半、西を埋土西半として遺物の取り上げを行った。土器、石器、微細遺物、赤色顔料の順に述べる。

弥生土器は、総数約100点の破片が出土した。大半は、埋土の水洗選別で検出した細片である。２・４は埋土中、３は埋土西半、５・７は埋土東半、11（R102他）は焼土・炭①の上面から出土している。８は床面から少し浮いた状態で出土した土器（R112）と床面直上出土の土器（R113）、東半埋土出土土器、焼土・炭②出土土器の接合で、９は床面から少し浮いた状況で出土した土器片（R100・101・112）と、焼土・炭②出土土器の接合である。

床面で検出したSK-48やSP-520・523・526・528・529・530からは約50点に及ぶ弥生土器壺・甕の細片が出土している。特にSK-48出土遺物は、１辺１㎝にも満たない細片が多い。実測図を提示できたのは、SP-528埋土出土の１・６、SP-523埋土出土の10である。

１から11は弥生土器。１は壺口縁端部の剥落片。拡張された口縁端部に凹線文が２条施される。２は甕口

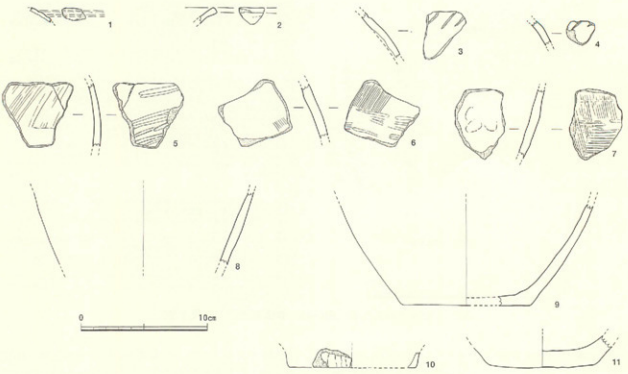


図9　SC-35出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）

縁部。3・4は壺肩部片。ともに「ノ」字状押圧文が施される。5・6は壺胴部で、外面に横方向のヘラミガキが施される。7・8は甕胴部片。7の外面には、タタキ調整の後に縦方向のハケメ調整を行い、内面は指頭圧痕が見られる。胎土中には角閃石を含むことから、他地域からの搬入品である。9～11は壺底部。9・10は平底、11は丸みと厚みをもつ。

7以外の土器の特徴は、弥生時代中期後葉から後期初頭に位置づけられる。7・11は埋土上部からの出土であり、混入品の可能性がある。

以上の他に、SC-35の北東部を一部掘削した「大正天皇お手植えの松」移植に伴う立会調査（調査番号：99907）では、基本層序Ⅲ層から須恵器坏蓋片と、弥生時代中期後葉から後期初頭の甕胴部破片、高坏脚部片が出土している。また、SC-35埋土の上部にあたるCW13・14区とCX13・14区のⅢ層で、古墳時代後期の須恵器（図62-41）・土師器に混じって、弥生土器壺・甕片（図61-8・23）が出土している。

【出土石器】（図10・11）

石器は8点出土している。

16（R99）は住居跡東壁際に沿って、剥離面が直立して出土している。17（R98）は炭化した木材の上にのった状態で出土しており、放り込みである可能性が考えられる。13・14・18は埋土上半、15は埋土西半、19（R103）は住居跡南西部、SK-48の南西部床面直上で出土している。

12はサヌカイト製打製石鏃片である。身上半部の破片であり、鋒を欠損する。細身の三角形鏃であったと考えられる。両面ともに調整剥離が側縁から深く及び、素材面を残さない。13はサヌカイト製の楔形石器。片面に自然面を残し、折損面を2面有する。下縁部には階段状剥離が認められ、また平坦部があり、著しい潰れが観察される。さらに、下縁近くの側縁部にも潰れがあり、打撃方向を転じて使用されたことがわかる。14・15はサヌカイト製の剥片である。14は1面に平坦な剥離面があり、両極から中央に向けて発達した貝殻状裂痕が観察される。両極打法によって生成した剥片と考えられる。16は赤色頁岩の加工痕のある剥片。主要剥離面側に粗い剥離痕がみられる。折損面には主要剥離面側から生ずる貝殻状裂痕が観察される。

17は抉り入り石庖丁の破片で、類例の少ない直背弧刃形を呈する。片側の抉りのみ残存し、残存長4.0cm、残存幅3.95cm、厚さ0.45cmを測る。復元すると長さ約9cm、幅約4.6cm程度の小型品となる。石材は結晶片岩である。両面体部に片理面を残していることから、やや厚めの素材を3枚以上の剥片に分割し、自然面の残らない剥片を用いたと考えられる。周縁には調整剥離の痕跡が残り、この段階に抉り部も作り出されてい

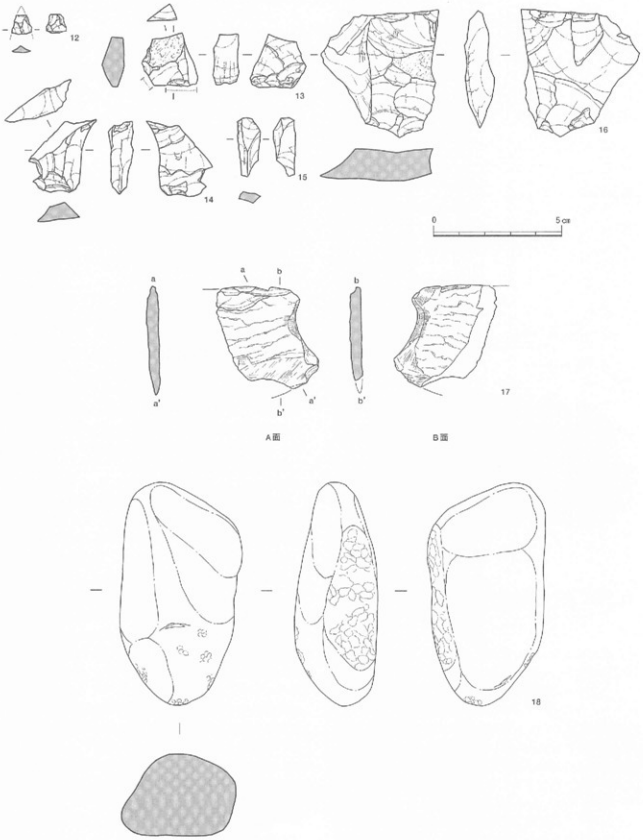


図10　SC-35出土遺物実測図(2)（縮尺 2/3）

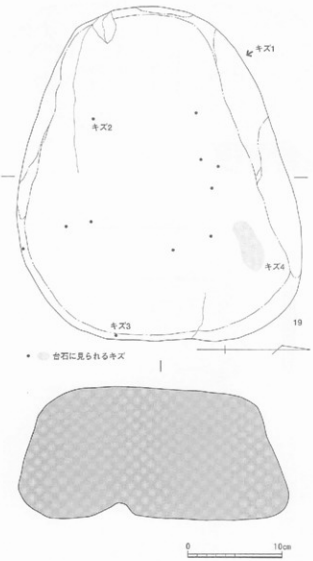


図11　SC-35出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）

る。研磨は刃部、抉り部、背部の一部にみられ、体部には及ばない。刃部は両面から研ぎ出されるが、片側がより上方から研ぎ出され、偏両刃を呈する（以下、研ぎ出しの強い側をA面、その反対をB面とする）。

肉眼観察において、両面の刃部、抉り部、背部が摩滅しており、特に抉り部には光沢が見られた。刃部の摩滅は稲との接触、抉り部の摩滅は紐ずれ、背部の摩滅は手ずれが想定され、金属顕微鏡で観察を行った。その結果、刃部と背部には光沢が検出されなかったが、抉り部にイネ科植物が作用した場合に形成されるBタイプ光沢が見られた。このことから、イネ科植物を材料にした紐をかけて使用したと考えられる。なお、B面に比べ、A面抉り部の光沢形成と摩滅が進んでおり、B面側に指を入れ、A面側で稲穂を押さえることが多かったと想定できる。

18は敲石。先端と側面に敲打痕を認める。裏面は磨石として使用していた可能性もある。砂岩製。

19は花崗岩製の台石である。台石の原材は本来あばた状を残していたと考えられるが、作業面はその中央部と縁辺のところどころに光沢のある平滑面が認められ、この面で研磨が行われていたと考えられる。また、デジタル顕微鏡で観察した結果、平滑面が広がる中央部を取り囲むように微細な溝が確認された。溝は長さ5～10㎜、幅1～2㎜。その断面形は非対称のV字形を呈するものが多い。石器製作の際、打撃を受けて生じたものと推測される。なお、側面ならびに底面にも部分的に平滑面があり、研磨が行われたと考えられる。ただし、作業面のような微細な溝は確認できなかった。

以上の他に、SC-35埋土の上部に当たるⅢ層中からサヌカイト剥片（図62-58）が1点出土している。

[出土微細遺物]

SC-35では、遺構検出段階で炭化物や焼土塊が点在することを確認できたため、焼土・炭層を採取し、土壌水洗を実施した。その結果、炭化物の他に石器の細片が含まれることが判明し、SC-35が石器製作址である可能性が示唆され、改めて遺構内埋土全てに対して、1㎜メッシュの篩を用いた水洗選別を行い、多くの微細遺物を得ることができた。とりわけ、微細剥片が多い。

微細剥片は、SC-35埋土とSK-48、SP-525・528・529・531から出土し、総数は202点。サイズは1辺1～10㎜である。

石材別には、サヌカイト146点、赤色頁岩53点、結晶片岩3点である。この他に、白色を呈する石片が約30点見られたが、石片の観察と、同質の石材から製作された石器が、これまで知られていないことから、石器ではないと判断し、微細剥片から除外した。打製石器の石材としてはサヌカイトと赤色頁岩が挙げられるが、点数のうえではサヌカイトが多く、形状、サイズ、厚みともサヌカイトに多様性がみられる。サヌカイトの微細剥片には1㎜前後の砕片が多く含まれている。顕微鏡で観察した結果、厚みのある微細剥片の中には、その縁辺部に白く潰れた部分を確認することができた。SC-35では、サヌカイト製楔形石器および両極打法に由来すると考えられる剥片が出土しているが、微細剥片もそれらに伴うものが多いとみることができる。つまり、卓越したサヌカイト製の微細剥片は、サヌカイト製石器の製作あるいは使用にともなうものであり、具体的には楔形石器の使用あるいは両極打法により生じたものと評価できる。一方、赤色頁岩の微細

表２　SC-35出土石器微細剝片一覧

	出土場所	遺物番号	サヌカイト	赤色頁岩	結晶片岩	合　計
SC35 埋土・焼土	埋土	r4006・4057	19	3	0	22
	焼埋土	r4307	4	1	0	5
	西半埋土	r4062 ～ 4064	22	0	0	22
	東半埋土	r4059 ～ 4061	34	42	0	76
	焼土・炭③	r4066	15	2	1	18
	焼土①	r4309・4310・4380	22	1	0	23
SC35SK48	A-A' 畔上層	r4313	1	0	0	1
	西部	r4362	1	0	0	1
	北東部	r4312・4314・4357・4363	12	2	0	14
	南西部焼土下埋土	r4374	3	0	0	3
	R113 周辺	r4311	2	0	0	2
SC35 内 SP	SP525	r4337	4	0	0	4
	SP528	r4343・4344	3	0	0	3
	SP529	r4345	2	2	1	5
	SP531	r4350	1	0	1	2
不明		r4384	1	0	0	1
総計			146	53	3	202

剝片は平坦剝離を示しており、砕片はなく、また潰れの認められるものもない。なお、赤色頁岩といっても、16の剝片と比べて、色調も薄く、含有される不純物が多いため、異なる石核・剝片から生じたものと考えられる。

微細剝片は、現場では視認できず、全てが水洗選別による採取であり、出土状況は明確ではない。しかし、埋土の取り上げ単位や出土地点から一定の想定は可能である。微細剝片は、炭化した木材下部や図８B-B'土層図⑧層から出土している。図８B-B'土層図⑥層は、SK-48大別４層にあたり、住居が機能していた段階の堆積と想定している。このことから、細片は、住居焼失以前の遺物であることがわかる。出土地点の分布を見ると、図７A-A'土層図東側埋土中と台石周辺の焼土・炭②周辺からの出土が圧倒的に多い（表２）。先に述べた12の打製石鏃片も台石周辺の焼土・炭②周辺からの出土である。この出土傾向は、赤色頁岩の分布に顕著に表われており、赤色頁岩の剝片・微細剝片のほとんどは、住居東半からの出土である。

SC-35では、サヌカイトの楔形石器、剝片、微細剝片が検出され、とくに微細剝片の中には縁辺部に潰れを残すものや砕片が認められた。微細な濃を有する台石は、サヌカイトの剝片生成や打製石器を整形する作業台であり、以上のことからSC-35が石器製作址であったと評価できる。打製石鏃片が１点出土しており、打製石鏃の製作もしくは打製石鏃の再加工などが行われていたことは確実である。結晶片岩はごく少量であり、磨製石器の製作は行われていなかったと考えられる。

台石と住居壁との間には、わずか50cm強の間隔しかなく、人が座って作業することは不可能である。台石の北東方向も、中央土壙が存在し作業スペースはない。よって、製作風景を復元すると、台石の北西もしくは東側に座って作業を行った可能性が高い。

なお、水洗選別では、SC-35焼土・炭②、焼土①やSK-48埋土を中心として、炭化した種実も47点採取している。一部の種実同定を行った結果、大半はイネであったが、焼土・炭②出土種実中に４点のアワが確認されている（詳細はⅡ-５-Ｂ参照）。焼土・炭②は、住居焼失時に屋根材の崩落によって形成されたものであり、後世に混入した可能性は低い。

[出土赤色顔料]

赤色顔料は、SC-35埋土中、SK-48、SP-518・523・528・530・554から出土している。出土量は、SK-48が最も多く、その他は微量の出土に留まる。SC-35埋土中には、「大正天皇お手植えの松」の根による侵食が一部で見られることから、SK-48埋土以外は、当初から赤色顔料が含まれていたとするには、慎重を要する。なお、出土土器・石器中には、肉眼観察では赤色顔料の付着は見られない。

赤色顔料は、近畿大学南武志氏による分析の結果、ベンガラであることが明らかになっている（詳細はⅡ-５-A参照）。赤色顔料は、SK-48大別１・２層の木材片の下部を中心として出土していることから、屋根材の一部にベンガラが付着していた可能性が考えられる。またごく少量ではあるが、SK-48大別３・４層にも見られることから、住居が機能している際に、すでに赤色顔料が存在していたことも想定される。

以上の遺構・遺物に関する検討の結果、埋土に砂礫を含まないこと、出土遺物の特徴から、弥生時代中期後葉から後期前葉の石器製作址と位置づけられる。

［三吉・山田・村上・兒玉］

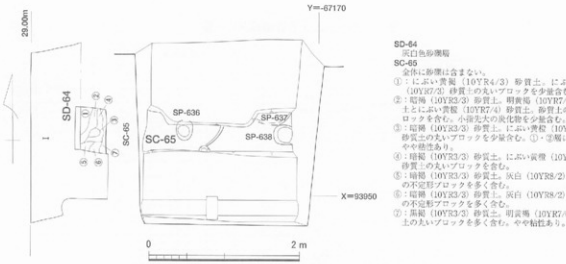


図12　SC-65（南区）遺構実測図　（縮尺１/50）

② **SC-65**（図12、図版11-１）

SC-65は、CW11区（南区）において、SD-64完掘後検出した。埋土は全体に砂礫を含まない。遺構の南と北は、Ⅰ層により撹乱を受け、東西は調査区外へと続き、遺構全体の形状については不明である。流路遺構の可能性も考えられるが、SC-65完掘後、床面でSP-636・637・638を検出しており、竪穴式住居と考えた。ただし、いずれの柱穴からも柱痕は確認できていない。SP-637は深さ約５cm、SP-636は約25cm、SP-638は約40cmを測ることから、主柱穴の可能性としてはSP-636もしくはSP-638が考えられる。出土遺物はない。

［三吉］

（３）溝

① **SD-33**（図13・15・16、図版６・17-１～３）

調査区西辺近くで、Ⅲ層下部ないし遺構埋土群としたSX-32の下で検出した溝。X＝93964以北では、南北から北で約20度西に振るが、それ以南はほぼ南北。CW12・13区の撹乱を挟んで、調査区を南北に縦断する。SX-41を切り、SC-35に切られる。

調査区北壁部分では、幅約230cm、東側Ⅳ層検出面から深さ約20cmを測る。ただし、北壁付近の西側の立ち上がりは不明瞭で、溝西側でのⅣ層検出面自体、東側より10cm程度低い。また、北壁から約２m以南は、溝幅100cm前後、最小70cmにまで減じ、深さも10～20cmで推移する。そして、X＝93964～93961の間は、おそらくSD-34に連なる落ち込みが西側に接し、SD-33の西側立ち上がりがかなり不明瞭となっている。なお、底のレベルは、標高27.75～27.9mの間で一様でなく、傾斜をもち水流を伴ったような痕跡はない。埋土も、暗褐色を中心とした砂質土で砂礫を含まず、水流の痕跡は認められない。

SD-33出土として取り上げた遺物は、細片も含めて50点以下と少ない。また、ほとんどはCX・CW区の北部出土である。土器はいずれも弥生土器で３点を図化した。１は、CW13-16区の溝西肩上部でまとまって出土した破片（R92）に、周辺上部Ⅲ層出土片が接合した。壺の底部片で軽い上げ底を呈する。外面は、やや幅の広い横ミガキ、内面は縦から斜のハケ目調整を施す。中期中葉に遡る可能性が高い。２・３はともに甕頸部。内外面に横ナデ調整を施し、内面に明瞭な稜をもつ。２の外面には煤付着。中期中葉から後葉。４～６は石器。４は断面が半円形の敲石。握部が三角形状に面をなし、反対側は敲打痕をよく残す。砂岩製。５は結晶片岩の剥片。６は、CW13-11区の溝底に貼り付くように出土した結晶片岩片（R91）。表面に敲打痕や研磨痕が確認でき、石庖丁製作時の破損品とみられる。なお後述するが、SX-32出土として提示する図63-１・２・４・５は、SD-33埋土上部に本来含まれていた可能性が高い。

以上から、SD-33の時期を、弥生時代中期中葉に求めることができる。

［吉田・山田］

② **SD-34**（図13、図版６）

調査区北西部の西壁際、CX13・14区で検出した、南東部から北西部に続く長さ約２mの溝状の落ち込み。13次調査のSD-95に対応するが、これと完全には一致しない。13次調査SD-95が幅36～50cm・深さ８～10cmで断面U字形であるのに対し、20次調査SD-34は、最大で幅100cm弱、深さ最大で約30cmを測る。土層確認によれば、北側が深さ６cm程度でテラス状を呈し、その南で１段深まり、深さ約10cmとなり、さらに南端では、断面U字形に深まりを形成している。13次調査SD-95と20次調査SD-34は、北側の立ち上がりが平面

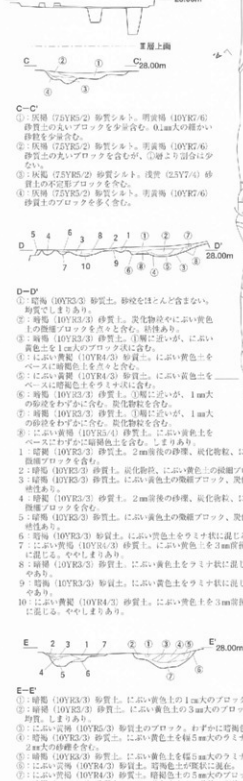


図13　SD－33北部・34・37・SX－63遺構実測図（縮尺1/50）

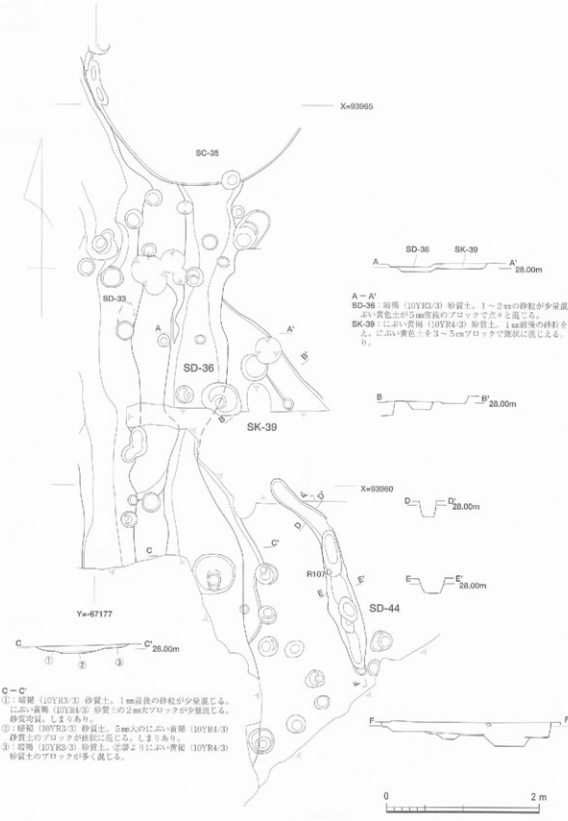


図14　SD-36・44・SK-39遺構実測図（縮尺1/50）

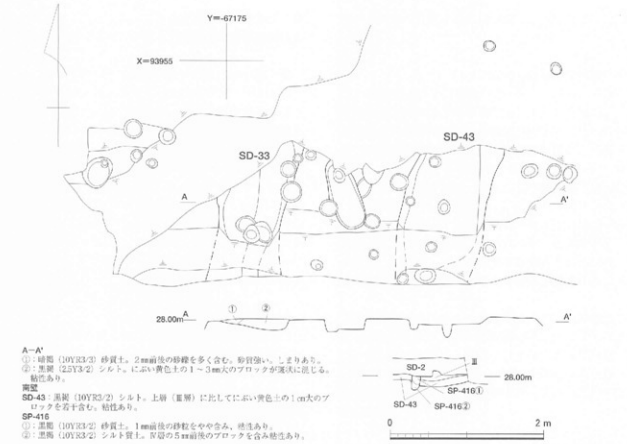


図15　SD-33南端・43遺構実測図（縮尺1/50）

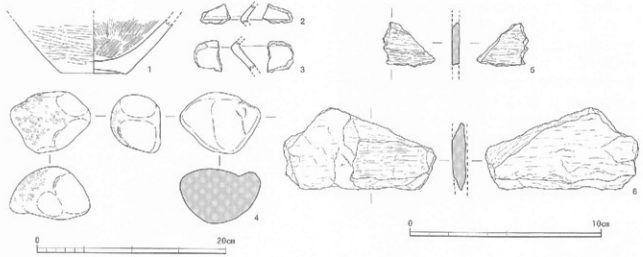


図16　SD-33出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）

的に連続し、20次調査側で、南側に落ち込み幅を拡大したものと考えられる。なお、その拡大が南東SD-33付近にも及び、SD-33西側肩が不明瞭になったと推定される。また、その南側のSD-37へと連なる可能性も想定されよう。埋土は砂礫を含まない灰褐色の砂質シルトで、流水痕も見られない。

出土遺物は細片少量のみで、弥生土器甕の体部片が認められる。なお、SD-34上部Ⅲ層で、磨羽口と土師器甕が出土しているが、SD-34検出面より20cm以上上位であり、それらがSD-34に包摂される可能性は低い

（図59）。したがって、SD-34は弥生時代の遺構と判断する。　［吉田］

③　**SD-37**（図13・図版7－1）

CX12・13区で、SD-33の西側に平行して検出した溝。一部東側に浅い2段状となり、底は柱穴状の凹凸が顕著だが、基本的に逆台形状の横断面形で、深さは10～15cm。南側は撹乱で切られ、北側も浅い撹乱で切られ、南北約1.5mの長さのみである。ただし、北側では、SD-33西側の立ち上がりが不明瞭になり、またSD-34延長部にもあたる。Ⅳ層検出レベル自体低く、あるいはSD-33・34・37が交錯していたのかもしれない。そうすると、SD-37が北に延びていた、あるいはSD-34に遠なる可能性も想定される。埋土は、暗褐色からにぶい黄褐色の砂質土で、砂粒を顕著には含まない。

出土遺物は、弥生土器細片が2点のみで、甕体部片らしい。ただし、SX-32出土として図示する図63-2は、SD-37上部で出土しており、本来SD-37に伴った可能性が高い。中期中葉から後葉の壺口縁部片である。埋土の状況からも、弥生時代の遺構である可能性が高い。　［吉田］

④　**SD-36**（図14・17、図版6－2・7－1）

CW12・13区において、SD-33の東に平行してほぼ南北方向に検出した。北はSC-35に、南は撹乱に切られ、SK-39を切る。SD-33がX＝93954以南でも続いていたのに対し、SD-36はX＝93954以南では確認できない。検出長は、約8.5m。CW13区においては、一部2段状の部分もあるが、幅70～80cm・深さ10cm前後の逆台形状の横断面を呈する。CW12区では、東側にテラス状に拡張し、幅1mを超えるが、深さは10cm前後で変わらない。底面の傾斜も認められない。埋土は暗褐色の砂質土で、流水の痕跡はない。

出土遺物は、弥生土器細片が10点程度で、図化できたのは1点のみで、甕の頸部片（1）。軽く内湾する口縁部で、内外面横ナデ調整。道後城北地区に特徴的な中期後葉の甕とみられる。したがって、SD-36は弥生時代中期後葉に、年代を求められる。［吉田・山田］

⑤　**SD-44**（図14・18、図版7－1・17－4）

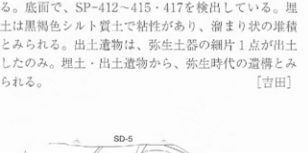
CW12区で検出した、およそ北北西－南南東方向の不整な溝状の落ち込み。幅が20～30cmと狭く、柱穴の連続とも見えたが、深さ15～20cmと明確な掘り込みが連続するため、一連の溝と判断した。なお一部では柱穴状に深さ30cmを超える箇所もある。埋土は暗褐色砂質土で、やや粘性がある。出土遺物は、肩部で出土した1以外は、弥生土器の細片3点のみ。1（R107）は弥生土器高坏あるいは台付鉢の口縁部。口縁部を内外にやや拡張して強く横ナデし、内傾する上面は凹線状を呈す。また外面は横方向に丁寧なミガキ仕上げ。中期中葉に位置づけられる。　［吉田・山田］

⑥　**SD-43**（図15、図版7－1）

CW11区の調査区南壁際で、SD-33の東約1.5mにはぼ平行して検出した。南北長約1.8m・東西幅約1.1mの溝状の落ち込み。SP-410・416に切られる。深さ10cm前後の逆台形状の横断面を呈すが、南壁際では皿状の横断面形となり、落ち込みの南端が近いと推測される。底面で、SP-412～415・417を検出している。埋土は黒褐色シルト質土で粘性があり、溜まり状の堆積とみられる。出土遺物は、弥生土器の細片1点が出土したのみ。埋土・出土遺物から、弥生時代の遺構とみられる。　［吉田］

図17　SD-36出土遺物実測図（縮尺1／4）

図18　SD-44出土遺物実測図（縮尺1／4）



SK-20
①：黒褐（10YR3/2）砂質土。1～2mm大の砂粒をわずかに含む。やや粘性あり。
②：黒褐（10YR3/2）砂質土。褐色（7.5YR4/6）粘土をまばらに含む。
SP-120
①：にぶい黄褐（10YR5/4）砂礫層。1～6mm大の砂礫を多く含む。粘性がなく、炭化物も含まない。砂礫は均質に混じる。
②：にぶい黄褐（10YR5/3）砂質粘。4×3cmの明黄褐（10YR7/6）砂質シルトのレンズ状ブロックを含む。1～2mmの砂粒を含む。①ほどではないが、砂礫を多く含む。約5cm大の炭化物塊を少量含む。
③：褐灰（7.5YR3/4）砂質シルト。2mm前後の砂礫を少量含む。粒土ははぼ均質。粘性ははとんどない。

図19　SK-20遺構実測図（縮尺1／50）

（4）土壙

① **SK-20**（図19）

SK-20は、CS13-5・10区に位置する小型の土壙。北西－南東の長軸約1.2m・短軸約0.8m、深さは約10cm。西側をSD-5に切られ、南側でSP-120に切られる。埋土は黒褐色の砂質土で、粘土をまばらに含む。少ない出土遺物はいずれも弥生土器で、外面に縦ミガキのある壺胴部下半部片がある。　［吉田］

② **SK-31**（図45）

北1区南部のCX・CY15区で検出。SC-29とSK-30に切られ、SP-223・237との関係については不明。埋土は灰褐色砂質土。明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックを多く含む。出土遺物はない。　［三吉］

③ **SK-39**（図14）

CW13区に所在する土壙。西側をSD-36とSP-319に切られ、南側を撹乱により切られるため、現状で北西－南東方向を斜辺とする、約1.5×1.5mの直角二等辺三角形状の平面を呈する。深さは10cm前後であるが、底面でごく浅い溝状の落ち込みと、SP-323・324を検出している。埋土は、にぶい黄褐色砂質土で、Ⅳ層ブロックが斑状に混在する。出土遺物は、弥生土器壺片が1点のみ。SD-36との切り合い関係および埋土の状況から、弥生時代の遺構である。　［吉田］

④ **SK-45**（図20）

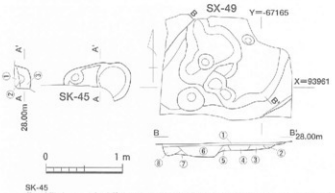
調査区中央CV13区で検出。主軸を東西方向にもち、長辺約90cm・幅約50cmの隅丸の長方形を呈する。南西部を欠失する。遺構中央部にテラス部をもち、東西両端には落ち込み部をもつ。出土遺物はない。埋土の特徴から古墳時代中期以前と考えられる。　［三吉］

⑤ **SK-46**（図21）

調査区中央CU・CV12区で検出。主軸を北西－南東方向にもち、長辺約1m、幅約55cmの隅丸の長方形状を呈する。SP-511・512を切る。遺物は、遺構西側埋土から弥生土器甕片が1点出土しているのみ。埋土の特徴などから古墳時代中期以前。　［三吉］

⑥ **SK-47**（図22）

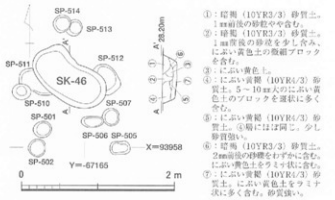
調査区中央部CV12区で検出。撹乱によって南北が欠失し、平面プランは不明。残存部の中央は落ち込みをもち、南西部にテラス部をもつ。SP-235・491に切られる。埋土中からは、土師器もしくは弥生土器の小片2点が出土している。遺構埋土の特徴などから、古墳時代中期以前の土壙と考えられる。　［三吉］



SK-45
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の微細ブロックを少量含む。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。①程よりにぶい黄色土の微細ブロックの混合やや多く含む。1mm程度の砂粒を含む。
③：にぶい黄褐（10YR5/3）砂質土。にぶい黄色土を基本に暗褐色砂質土の5mm大のブロックを点々と含む。

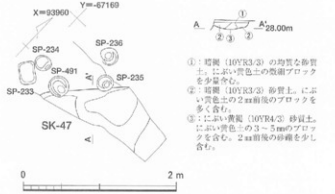
SK-49
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。砂質均質でしまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の微細ブロックをラミナ状に含む。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の5～10mm大のブロックを含む。
④：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の5mm前後のブロックを含む。やや粘性あり。
⑤：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の1cm大のブロックを含む。しまりあり。
⑥：にぶい黄褐（10YR5/3）砂質土。にぶい黄色土の1～3mm大のブロックを多く含む。暗褐色土の小ブロックが斑状に混じる。
⑦：暗褐（10YR3/4）砂質土。にぶい黄色土を3cm大のブロックで含む。
⑧：暗褐（10YR3/3）砂質土。暗褐色粉質土に、にぶい黄色土の2mm前後のブロックが混じる。わずかに粘性あり。

図20　SK-45・SX-49遺構実測図　（縮尺1/50）



①：暗褐（10YR2/3）砂質土。1mm前後の粉粒やや含む。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。1mm厚後の砂粒を少し含み、にぶい黄色土の微細ブロックを含む。
③：にぶい黄色土。
④：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。5～10mm大のにぶい黄色土のブロックを斑状に多く含む。
⑤：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。④層にほぼ同じ、少し砂質強い。
⑥：暗褐（10YR3/3）砂質土。2mm前後の砂粒をわずかに含む。にぶい黄色土をラミナ状に含む。
⑦：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色土をラミナ状に多く含む。砂質強い。

図21　SK-46遺構実測図　（縮尺1/50）



①：暗褐（10YR3/3）の均質な砂質土。にぶい黄色土の微細ブロックを少量含む。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の2mm前後のブロックを多く含む。
③：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色土の3～5mmのブロックを含む。2mm前後の砂礫を少し含む。

図22　SK-47遺構実測図　（縮尺1/50）

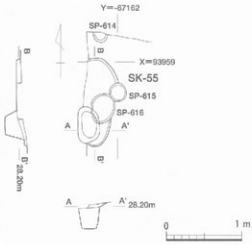


図23　SK-55遺構実測図（縮尺１/50）

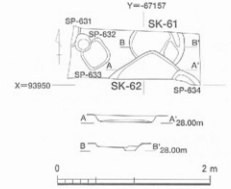


図25　SK-61・62遺構実測図（縮尺１/50）

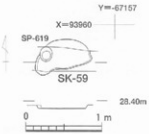


図24　SK-59遺構実測図（縮尺１/50）

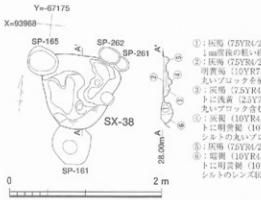


図26　SX-38遺構実測図（縮尺１/50）

⑦　**SK-55**（図23）

調査区中央部CU12区で検出。西側は撹乱によって欠失。残存部の形状は、南北方向に主軸をもち、同端は丸みを帯びる。遺構南部に窪みをもつ。埋土については詳細不明。出土遺物はない。SK-55を掘り込むSP-615・616の埋土が砂礫が含まれないことから、SK-55も古墳時代中期以前の遺構と考えられる。　［三吉］

⑧　**SK-59**（図24）

調査区南東部CT12区で検出。長辺約70㎝、幅約30㎝。深さ約４㎝。SP-619に切られる。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、弥生土器小片が１点出土している。埋土に砂礫は混じらず、古墳時代中期以前。［三吉］

⑨　**SK-60**（図36）

調査区南東部CT12区で検出。長辺約50㎝、幅は最大で約25㎝の長楕円形。SP-620に切られる。埋土は灰黄褐色砂質土。出土遺物はない。埋土は砂礫が混じらず、古墳時代中期以前の遺構である。　［三吉］

⑩　**SK-61**（図25）

調査区南東部CT11区で検出。北側は撹乱を受けるが、径70㎝前後の円形状の土壙に復元できる。SK-62に切られる。埋土は灰黄褐色砂質土で、にぶい黄橙色砂質土の丸いブロックを含む。西側埋土から弥生土器片が２点出土している。出土遺物ならびに埋土の特徴から、古墳時代中期以前と考えられる。　［三吉］

⑪　**SK-62**（図25）

調査区南東部のCT11区検出。南側に撹乱を受けるが、１辺70㎝強の方形状の土壙か。SP-634に切られ、SK-61を切る。埋土は灰黄褐色砂質土で、明黄褐色砂質土の丸いブロックを含む。埋土西側から弥生土器片が１点出土している。出土遺物と、砂礫を含まない埋土の特徴から、古墳時代中期以前。　［三吉］

（５）その他の遺構

①　**SX-38**（図26、図版７-２）

調査区北西部CW14区で検出。南側は、「大正天皇お手植えの松」移植に伴う立会調査（調査番号：99907）時の掘削で欠失する。１辺約１ｍの隅丸の不定形三角形状を呈すると考えられる。東部と西部には、小規模な窪みが多数見られる。北東に隣接するSX-41との切り合い関係については不明瞭。SP-145・161・261・262に切られる。出土遺物はない。遺構の性格については不明である。埋土中に砂礫が混入しない点、

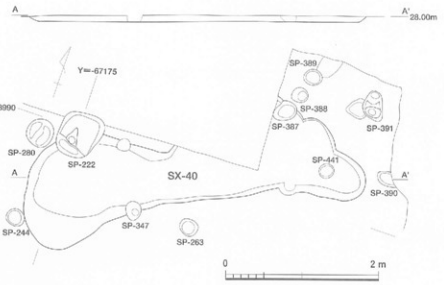


図27　SX-40遺構実測図（縮尺1/50）

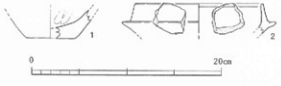


図28　SX-40出土遺物実測図（縮尺1/4）

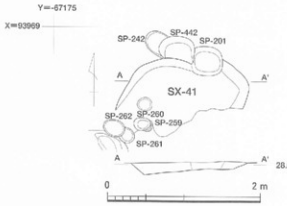


図29　SX-41遺構実測図（縮尺1/50）

古墳時代後期の遺構であるSP-145・161に切られることなどから、古墳時代中期以前の遺構。　［三吉］

② **SX-40**（図27・28、図版7－2）

調査区北西部CW14・15、CX14区で検出。一部は調査区外へと続く。北東から南西方向に延びる。長辺約4m、最大幅約80cm。深さは最大で約9cmと浅い窪地状を呈する。SP-114・347に切られる。SP-387との関係は不明。SX-40完掘後にSP-441を検出。埋土は、にぶい黄褐色砂質土で、明黄褐色砂質土の丸いブロックを少量含む。

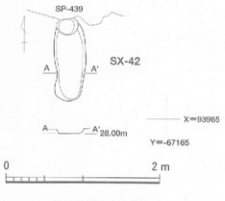


図30　SX-42遺構実測図（縮尺1/50）

遺構埋土中からは弥生土器、土師器、須恵器の小片が少量出土している。1は弥生土器壺の底部。復元底径は5.2cmを測る。外面は顕著に被熱し磨滅、内面は指頭圧痕を残す。2は須恵器坏身。口縁内端部に沈線状の窪みがある。時期は6世紀後半。古墳時代後期に位置づけられるSP-144に切られることや埋土の特徴などから、2は混入品の可能性が高い。［三吉・山田］

③ **SX-41**（図29）

調査区北西部CW14区で検出。南東部は、「大正天皇お手植えの松」移植に伴う立会調査（調査番号：99907）時の掘削で欠失する。1辺約1.5m・深さは最大で約9cm。南西部に位置するSX-38との切り合いは不明瞭。SP-201・261・262に切られ、SP-442を切る。遺物の出土はない。埋土は、にぶい黄褐色砂質土で、明黄褐色砂質土と浅黄色砂質土の丸いブロックを含む。古墳時代後期のSP-201に切られることと、埋土の特徴から古墳時代中期以前の遺構と考えられる。　［三吉］

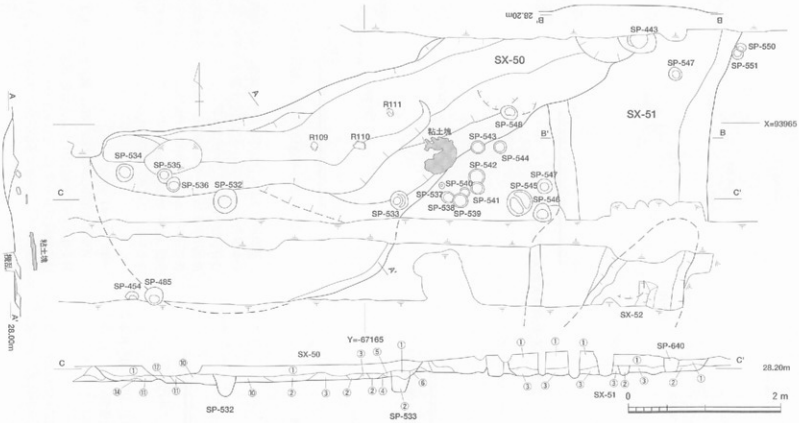


図31　SX-50・51遺構実測図（縮尺1/50）

SX-50
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。やや粘性あり。5㎜大のにぶい黄色土のブロックを含む。
②：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色土をベースに暗褐色土が混じる。しまりあり。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。5㎜大のにぶい黄色土のブロックを含む。粘質強く、上層に混い。
④：暗褐（10YR3/3）砂質土。3cm大のにぶい黄色土のブロックを含み、しまりあり。
⑤：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の微細ブロックを多く斑状に含む。炭化物粒を含む。
⑥：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土をラミナ状に少し含む。砂質が強く、上層に混い。炭化物粒をわずかに含む。
⑦：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土をラミナ状に少し含む。砂質強い。しまりあり。
⑧：暗褐（10YR3/3）砂質土。均質。しまり強い。
⑨：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色土の3cm大のブロックを含む。しまりあり。
⑩：暗褐（10YR3/3）砂質土。均質。しまり強い。
⑪：暗褐（10YR3/3）砂質土。5㎜大の暗褐色土とにぶい黄色土のブロックを斑状に含む。
⑫：暗褐（10YR3/3）砂質土。1cm大のにぶい黄色土のブロックを含む。しまりあり。
⑬：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色土をラミナ状に含む。しまりあり。
⑭：暗褐（10YR3/3）砂質土。1cm大のにぶい黄色土のブロックを少し含む。5㎜大の炭化物粒を多く含む。やや粘性あり。

SX-51
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。1㎜未満の粉炭を少し含む。しまり強い。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。5㎜前後のブロックが多く混じる。しまりあり。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。5～10㎜大の暗褐色土、にぶい黄色土のブロックを含む。1㎜前後の粉粒を少し含む。粘性ややあり。

SP-533
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。2㎜前後の粉粒が混じる。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。3㎜程の2㎜大のブロックが斑状に混じる。しまりあり。

SP-640
暗褐（10YR3/3）砂質土。3㎜程の2㎜大のブロックが斑状に混じる。他は均質。しまりあり。

④ **SX-42**（図30）

調査区中央CV11区で検出。長辺約１ｍ、幅約40㎝、深さ最大で約５㎝。北端にはSP-439が掘り込まれる。弥生土器の甕片が出土し、隣接するSX-50出土土器と接合している（図32-１）。砂礫を含まない埋土の特徴から古墳時代中期以前の遺構と考えられる。［三吉］

⑤ **SX-49**（図20）

調査区中央部CU・CV13区で検出。撹乱によって北東部と南西部が欠失し、形状は不明。遺構底面には大小の窪みが見られる。埋土中からは縄文土器片と、土師器もしくは弥生土器片が各１点出土している。埋土中には明黄褐色土が混じることから、基本層序Ⅳ層を掘り込む遺構と考えられるが、性格については不明である。埋土に砂礫を含まないことから、古墳時代中期以前の遺構と考えられる。［三吉］

⑥ **SX-50**（図31・32、図版17-５・６）

調査区中央部CU13・14区、CV13・14区で検出。主軸を北東－南西部にもち、緩長く延びる落ち込み状遺構。北東部は撹乱によって欠失するが、残存部における長辺約３ｍ、最大部で幅約1.3ｍを測る。SK-12、SP-443・543に切られる。SX-51とも切り合い関係にあるが、その境は不明瞭である。SX-50完掘後に、SP-532・533・534・535・536を検出。埋土は基本的に暗褐色砂質土で、やや砂質が強いが、部分的に粘性を呈する箇所も見られる。土層断面図では、標高28.10ｍ付近に水平面が見られるが、人工的な整地面を示す状況ではない。底面から10～20㎝以上浮いた状態で、遺物が散発的に出土している。弥生土器片など約10点で、図化できたのは２点。１（R109・110）は、隣接するSX-42出土土器と接合関係にあり、弥生土器の甕。上げ底で、中期中葉から後葉。２は花崗岩製の敲石。全体的に風化しているが、一部に敲打痕が認められる。

SX-50埋土中には、明黄褐色土を含むことから、基本層序Ⅳ層を掘り込む遺構である事は確かであるものの、不整形を呈する平面プランなど、遺構の性格については不明である。埋土の特徴から、古墳時代中期以前の遺構である。

なお、Ⅲ層掘り下げ過程において、SX-50遺構西部、底面から約20cm浮いた位置で、明黄褐色粘土塊を検出した。明黄褐色粘土塊を検出したのは、SX-50の検出以前であること、さらにSX-50上層埋土とⅢ層埋土との境が不明瞭であったことから、いずれに帰属するかは不明となってしまった。しかしながら、明黄褐色粘土塊周辺には、古墳時代後期の埋土の特徴である砂礫を多く含んだ土が見られないことから、古墳時代中期以前のものである可能性が高い。［三吉・山田］

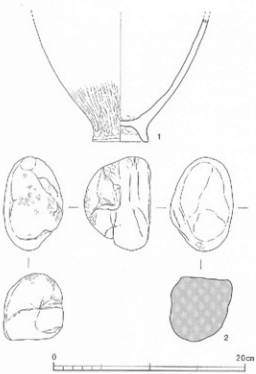
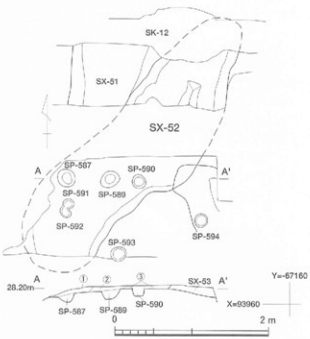


図32　SX-50出土遺物実測図（縮尺１/４）



①：暗褐（10YR3/3）砂質土。１～３㎜の砂粒を少し含む。にぶい黄色土を多く含む。砂質強い。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。砂粒はほとんど含まない。にぶい黄色土の微細粒を多く含む。粉質強く、しまりあり。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の１cm前後のブロックを含む。砂質強い。しまりあり。
SP-587：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の１cm大のブロックを多く含む。しまりあり。
SP-589：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土がラミナ状に混じる。砂質強い。
SP-590：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の２mm前後のブロックを含む。しまりあり。粘性やや有り。

図33　SX-52遺構実測図（縮尺１/50）

⑦ **SX-51**（図31）

調査区中央部CU13・14区で検出。主軸を南北方向にもつ。南北ともに撹乱によって欠失するが、残存部から南北に細長く延びる落ち込み状遺構と考えられる。東西幅は、最大部で約2.6mを測る。SX-50・52と切り合い関係にあるが、その境は不明瞭。SP-443に切られる。SX-51完掘後にSP-549を検出。SX-50同様に、標高28.20m付近で水平面が見られるが、調査時の所見では、人工的な整地面を示す状況は窺えなかった。出土遺物はない。遺構の性格は不明であるが、埋土中に大量の砂礫が含まれないことなどから、古墳時代中期以前の遺構と考えられる。［三吉］

⑧ **SX-52**（図33）

調査区中央部CU13区で検出。遺構中央部と南西部を撹乱によって欠失するが、主軸を北東－南西方向にもつ、長辺約4m・幅約1.2mの掘り込み状遺構と考えられる。SX-51・53と切り合い関係にあるが、その境は不明瞭である。底面には凹凸があり、SP-587・589・590・591・592も検出した。遺物は、埋土中から弥生土器片が1点出土しているのみである。遺構埋土の特徴などから、古墳時代後期まで下るとは考えられない。［三吉］

⑨ **SX-53**（図34）

調査区中央部CT12・13区、CU12・13区で検出。主軸を北西－南東にもつ。長辺約3.3m、幅約1.3m、最深部で深さ約7cmを測る落ち込み状遺構。遺構中央部と北東部を撹乱により欠失する。SX-52・56と切り合い関係にあるが、その境は不明瞭である。底面でSP-594・595を検出。出土遺物はなく、遺構の性格不明。埋土の特徴から古墳時代中期以前に位置づけられる。［三吉］

⑩ **SX-54**（図35）

調査区中央部CT13区で検出。SP-574に切られる。底面でSP-575・596・597を検出。主軸を北東－南西方向にもち、南北を撹乱によって欠失する。幅は最大部で約2mを測る。遺構北東部底面には、径60～70cmの窪みと、径約40cmの半円形の窪みが見られる。これらは、土層断面図に見られる遺構埋土の堆積状況から、柱穴などの可能性は低い。特に窪みを中心に埋土が堆積していく状況が見られることから、木の根などに伴う落ち込みの可能性も考えられる。出土遺物はない。埋土中に砂礫を多く含まないことから古墳時代中期以前の遺構と考えられる。［三吉］

⑪ **SX-56**（図36）

調査区南東部CT・CU12区で検出。主軸を北西－南北にもち、長辺約2.5m・幅約1.5mの長方形状を呈する。深さは最大で約15cm。遺構の立ち上がりは直線的でなく、緩やかである。SX-57・58と接するが、切り合い関係は不明瞭。埋土には、人工的な埋め戻し状況は見られず、各層にはⅣ層である明黄褐色土のブロックが混じる。出土遺物はない。遺構の性格は不明であるが、旧地形の落ち込みや木の根に伴う落ち込み等が考えられる。時期は、埋土に砂礫が混じらないことから、古墳時代中期以前のものと考えられる。［三吉］

⑫ **SX-57**（図36・37）

調査区南東部CT・CU12区で検出。SP-608に切られる。SX-56に接するが、切り合い関係は曖昧。南西部端は撹乱によって欠失する。長辺約1m、幅約80cmの方形状を呈する。深さは最大で約10cm。遺構の立ち上がりは直線的でなく、曖昧である。埋土の堆積に人為的な状況は認められない。遺物は出土しない。埋土に砂礫を含まないこと、SX-58底面で検出したSP-628からは弥生土器の小片が2点出土していることなどから、古墳時代中期以前の遺構と考えられる。［三吉］

⑬ **SX-58**（図36）

調査区南東部CT12区で検出。長辺1.4m弱、短辺約0.8m、幅約1mの台形状を呈する。深さは、最大で約10cm。SX-57と接する。完掘後、SP-627・628を検出。埋土の堆積に人為的な状況は認められない。出土遺物はない。埋土に砂礫を含まないこと、SX-58底面で検出したSP-628からは弥生土器の小片が2点出土していることなどから、古墳時代中期以前の遺構と考えられる。［三吉］

⑭ **SX-63**（図13）

調査区北西隅CX14区で検出。SD-33と接する。完掘面で数基の柱穴を検出。西側の13次調査区へと続く。南北幅約1.7m。残存深度は、最大で10cm程度。出土遺物はない。［三吉］

⑮ **SX-66**（図45）

北1区南部CX・CY15区で検出。SK-30、SP-223・224に切られる。調査段階では、SK-30③層として位置づけていたが、切り合い関係の再検討を行った結果、SX-66として分離した。壁面のみでの検出で、平面形については不明。出土遺物はない。埋土には砂礫を含まないことから、古墳時代中期以前の遺構と考えられる。［三吉］

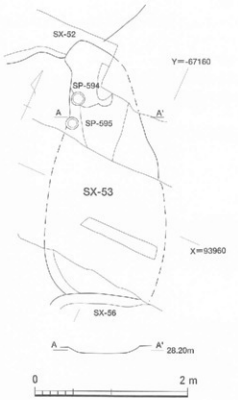
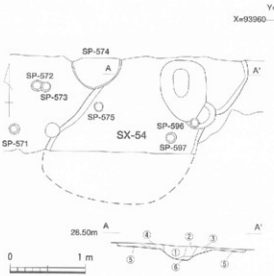
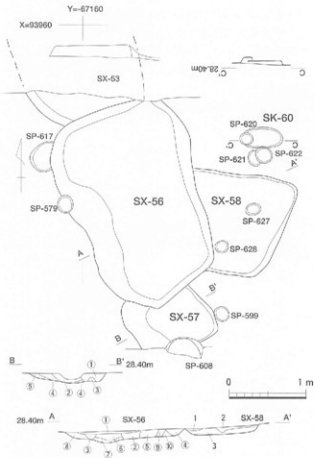


図34　SX-53遺構実測図（縮尺1/50）



①：暗褐（10YR3/3）砂質土。2～3mm前後の粒径をやや多く含む。にぶい黄色の褐色ブロックを少量含む。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。2～3mmの粒径をやや多く含む。にぶい黄色の褐色ブロックを少量含む。
③：褐灰（10YR5/3）砂質土。5mm前後のにぶい黄色のブロックを多量含む。
④：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。5mm前後のにぶい黄色土のブロックを多く含む。1cm前後の粒径を少し含む。砂質強い。
⑤：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。にぶい黄色土を主体とした砂質土に暗褐色土の縞模様が少量混ざる。

図35　SX-54遺構実測図（縮尺1/50）



A－A'
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。明黄褐（10YR7/6）砂質土の丸いブロックを含む。1～2mm大の粉炭を含む。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（10YR7/6）砂質土の不定形ブロックを含む。
③：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。にぶい黄橙（10YR7/4）砂質土の丸いブロックを含む。
④：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（10YR7/6）砂質土の丸いブロック。
⑤：明黄褐（10YR7/6）砂質土の不定形ブロックが主体。灰黄褐（10YR4/2）砂質土の丸いブロックを含む。
⑥：明黄褐（10YR7/6）砂質土の不定形ブロックが主体。灰黄褐（10YR7/2）砂質土の不定形ブロックを含む。
⑦：にぶい黄褐（10YR5/3）砂質土。明黄褐（10YR7/6）砂質土の混合が多い。
⑧：①層に同じ。
⑨：黒褐（10YR3/2）砂質土。明黄褐（10YR7/6）砂質土のレンズ状ブロックを含む。
⑩：①層に同じ。

B－B'
1：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（10YR7/6）砂質土の不定形ブロックを含む。
2：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（10YR7/6）砂質土の丸いブロックを含む。
3：明黄褐（10YR7/6）砂質土の不定形ブロックに灰黄褐（10YR4/2）砂質土の丸いブロックを含む。

D－D'
①：灰黄褐（10YR6/2）砂質土中に明黄褐（10YR7/6）砂質土の丸いブロックを含む。
②：明黄褐（10YR7/6）砂質土の不定形ブロックと灰黄褐（10YR6/2）砂質土の不定形ブロックが混ざる。
③：①層と同じ。
④：②層と同じ。ただ①に比してマサや焼土あり。
⑤：③層と同じ。1cm大の炭化物を含む。
⑥：明黄褐（10YR7/6）砂質土の丸いブロックと灰黄褐（10YR6/2）砂質土の不定形ブロックを含む。

図36　SX-56～58・SK-60遺構実測図（縮尺1/50）

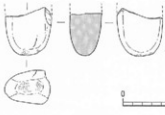


図37　SX-57出土遺物実測図（縮尺1/4）

（6）柱穴・小穴（図38・39、図版17-7・8）

C類型埋土の柱穴・小穴は多く、根等の攪乱も含む。詳細は表8に譲り、明確な掘り方や柱痕をもつ例、図化した出土遺物のある例等について触れる。［吉田］

［SP-177］

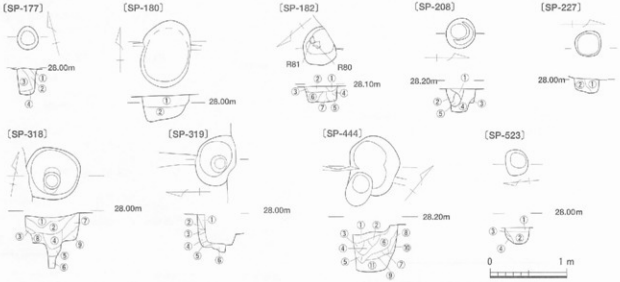
約20×25cmの楕円形、深さ約27cm。［吉田］

［SP-180］

約50×65cmの楕円形、深さ約25cm。遺物は弥生土器細片1点のみ。［吉田］

［SP-182］

1辺約35cmの隅丸三角形状で、深さ約17cm。1（R81）は弥生土器壺の底部。［吉田・山田］



SP-177
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。均質。わずかににぶい黄色土の微細ブロックが混じる。
②：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色砂質土の3～5mm大のブロックが斑状に混じる。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。①層に比べ若干にぶい黄色土の混じり多い。
④：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色土の5mm以下のブロックを斑状に混在。

SP-180
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。均質で粒は細かい。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/4）砂質土。3mm大のにぶい黄色土のブロックが斑状に混じる。しまり弱い。

SP-182
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色土の2cm大ブロックを主としてその間に暗褐色土が混在。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。明黄褐（10YR3/3）土の1cm以下のブロックを含み、炭化物を含む。しまりあり。
③：オリーブ褐（2.5Y4/6）シルト。にぶい黄色土のブロック、暗褐色土が少量混じる。
④：黄褐（2.5Y5/4）シルト。にぶい黄色土のブロック、暗褐色土が少量混じる。
⑤：暗褐（10YR3/3）砂質土。明黄褐（10YR3/3）砂質土の1cm大のブロックが混じる。
⑥：暗褐（10YR3/4）砂質土。にぶい黄色砂質土が3mm以上のブロック状に混じる。しまりあり。
⑦：褐（10YR4/4）シルト。にぶい黄色砂質土に斑状にわずかに暗褐色土を含む。

SP-208
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。2mm大のにぶい黄色砂質土のブロックが斑状に混じる。
②：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。1mm大のにぶい黄色砂質土が斑状に多く混じる。1mm前後の砂粒がわずかに混じる。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色砂質土がわずかに混在。
④：暗褐（10YR3/3）砂質土。5mm大のにぶい黄色土の微細ブロックが点々と混じる。
⑤：にぶい黄色砂質土のブロック。

SP-227
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の微細ブロックをわずかに含む。やや粘性あり。
②：褐（10YR4/4）砂質土。にぶい黄色土と暗褐色土が2cm大のブロックで混じる。

SP-318
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄褐（10YR5/3）砂質土の2～5mm大のブロックが斑状に多く混じる。1mm大の炭化物粒あり。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。1mm大のにぶい黄褐（10YR5/3）砂質土のブロックが点在。やや粘性あり。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。均質。にぶい黄褐（10YR5/3）砂質土のブロックは含まない。
④：②層にほとんど同じ。ややにぶい黄褐（10YR5/3）砂質土のブロックは少ない。
⑤：黄褐（10YR5/6）シルトのブロック。
⑥：褐（10YR4/4）砂質土を主体に、粘性のある暗褐（10YR3/3）土がラミナ状に混じる。
⑦：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色土が5mm前後のブロックで斑状に混在。しまりあり。
⑧：⑦層に同じ。
⑨：黄褐（10YR5/6）シルトのブロック。わずかに暗褐色土が斑状に混じる。

SP-319
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土を5mm前後の斑状に混在。やや粘性あり。炭化物粒を少量含む。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の5mm前後のブロックを多く含む。炭化物粒を含む。粘性あり。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の1～2mm大のブロックを多く含む。しまりあり。
④：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土を5mm前後のブロックで少量含む。粘性あり。
⑤：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土を5mm前後のブロックでラミナ状に少量含む。
⑥：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土の5mm以下の微細ブロックをラミナ状に点々と含む。炭化物粒を含む。粘性あり。

SP-444
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。1mm未満の砂粒が少し混じる。にぶい黄色土を5mm未満の粒状に含む。炭化物粒を含む。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。1mm未満の砂粒が少し混じる。1cm大のにぶい黄色土ブロックを少し含む。しまりあり。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。5mm大のにぶい黄色土ブロックを多く含む。
④：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色土をラミナ状に含み、砂質がやや強い。
⑤：にぶい黄色土のブロック。
⑥：暗褐（10YR3/3）砂質土。1mm未満の砂粒が少し混じる。にぶい黄色土が5mm未満のブロック状に混じる。炭化物の微細粒も含む。
⑦：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色土をラミナ状に含み、砂質がやや強い。
⑧：暗褐（10YR3/3）砂質土。にぶい黄色土が1cm大の斑状に混じる。
⑨：褐（10YR4/4）砂質土。暗褐色土を斑状に含む。
⑩：褐（10YR4/6）砂質土。基盤層の掘りすぎか。わずかに暗褐色土を含む。
⑪：詳細不明。掘り過ぎか。

SP-523
①：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（10YR7/6）砂質土の丸いブロックが混じる。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（10YR7/6）砂質土の丸いブロックを含む。①層にくらべてきめが細かい。柱痕か。
③：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土の1cm大ブロックを少量含む。ブロックの大きさは①・②層に比べて大きい。
④：灰黄褐（10YR4/2）砂質土のブロックと明黄褐（10YR7/6）砂質土のブロックが混じり合う。

図38　弥生時代の柱穴・小穴遺構実測図（縮尺1/50）

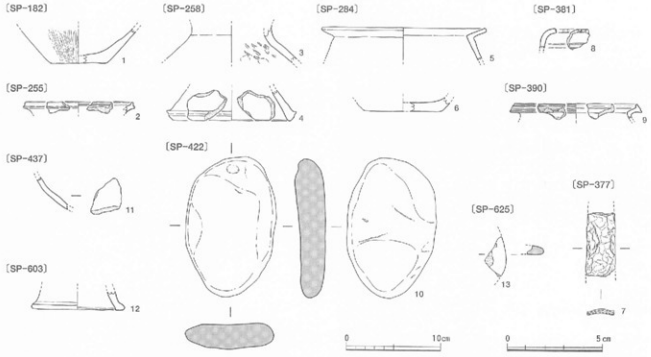


図39　弥生時代の柱穴・小穴出土遺物実測図（縮尺1/4）

〔SP-208〕
径約30cm、深さ約14cmに、さらに径約20cm・深約10cmの下段がある。弥生土器細片5点が出土。［吉田］

〔SP-227〕
径約25cmの隅丸方形状、深さ約12cm。［吉田］

〔SP-255〕
径約20cm、深さ約10cm。弥生土器片が2点出土し、2を図化した。甕口縁部で、端部を上方に拡張し、凹線文1条が巡る。［三吉・山田］

〔SP-258〕
径約15cm・深さ約14cm。弥生土器が2点出土。3は壺上胴部片。4は高坏か台付鉢の脚端部。内外面横ナデ。中期中葉か。［三吉・山田］

〔SP-284〕
径約18cm・深さ約23cm。弥生土器2点が出土。5は甕口縁部で、内面横ナデ。6は壺底部。［三吉・山田］

〔SP-318〕
径約60cm・深さ約30cm、柱痕当部は径約18cm・深さ約25cmを測り、周囲をよく固めている。［吉田］

〔SP-319〕
約50×60cmの楕円形、深さ約43cm、底面に径約18cm・深さ約8cmの小穴。遺物は弥生土器甕1点。［三吉］

〔SP-377〕
約23×30cmの長楕円形。最深部で深さ約25cm。弥生土器か土師器の細片1点と7が出土。7は刃部が湾曲し、鉇とみられる（図版17-7）。［三吉・山田］

〔SP-381〕
長さ約90cm・幅約35cm・深さ約6cmの溝状の小穴。東端に径約25cm・深さ約15cmの小穴が伴う。8の弥生土器甕の口縁部片が出土。如意形口縁で端部を刻み、2条のヘラ描き沈線を施す。前期。［吉田・山田］

〔SP-390〕
深さ約21cm。9の弥生土器甕口縁部が出土。口縁を上下に拡張し、3条の凹線文を施す。［三吉・山田］

〔SP-422〕
長さ50cm以上、幅20cm前後の溝状。深さ約15cm。遺物は10の砂岩製磨石のみ（図版17-8）。［吉田・山田］

〔SP-437〕
径約20cm・深さ約19cm。11の弥生土器壺頸部のみ出土。［三吉・山田］

〔SP-444〕
約55×65cmの楕円形、深さ約50cmを測る。［吉田］

〔SP-523〕
SC-35台石下で検出し、SC-35に先行する。径25cm前後の不整円形で、深さ約13cm。［三吉］

〔SP-603〕
径約13cm・深さ約19cm。出土遺物は、12の弥生土器高坏か台付鉢脚部のみ。［三吉・山田］

〔SP-625〕
径約20cm、深さ約40cm。弥生土器片1点の他、13の円盤状土製品が出土している。［三吉・山田］

B　古墳時代の遺構と遺物

（1）遺構の分布（図40、図版1）

城北団地基本層序Ⅲ層の下ないし中、あるいは盲層の上ながらB類型の埋土をもち、古墳時代後期の遺構として報告するのは、竪穴式住居5棟（SC-23・24・27・28・29）、掘立柱建物4棟（SB-67・68・69・70）、土壙2基（SK-25・30）、そして柱穴・小穴57基である。

弥生時代にも増して、調査区北西部に偏在する傾向が強い。竪穴式住居SC-27・28はやや南寄りに位置するが、掘立柱建物はいずれも、13次調査区にまたがり、柱穴もほとんどが、北西部に集まっている。なお、SC-29とSK-30は北1区、SC-23・24、SK-25は北3区の検出である。　［吉田］

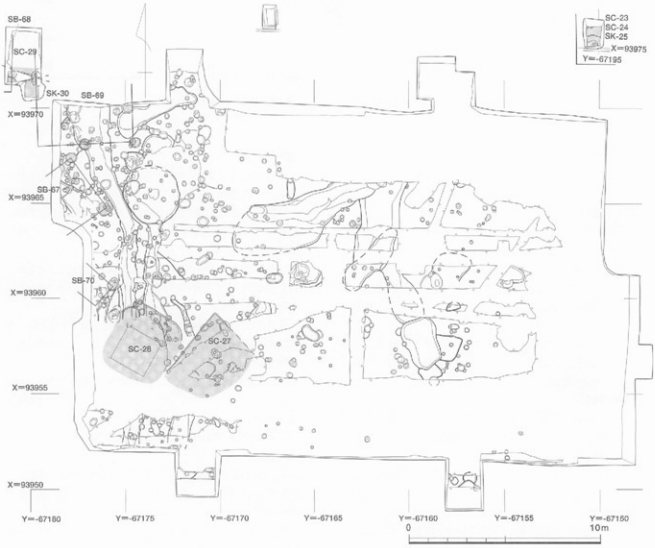
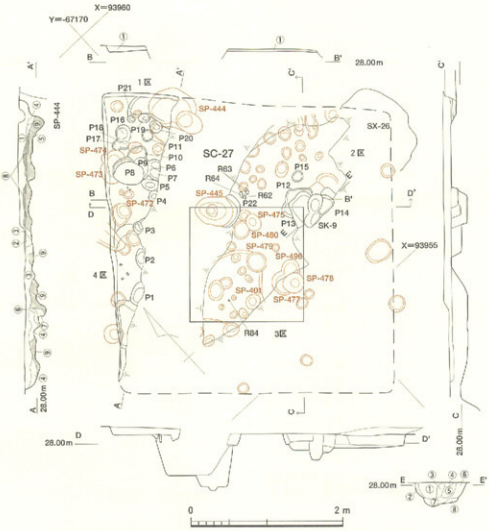


図40　古墳時代主要遺構配置図（縮尺1/200）



A–A'・B–B'

①：黒（7.5YR4/4）土。粗い粘性をもち、しまりあり。2～4㎜程度の砂礫を多く含む。土器片が若干含まれる。住居跡埋土。

②：暗褐（7.5YR3/3）土。色調的には①部よりやや明いが、土中に2～4㎜大の粒礫を含むなど類違っている。また、炭化物もわずかであるが含まれている。

③：明黄褐（2.5Y7/6）砂質土を主体とし、わずかに黒（7.5YR4/4）土が混じる。①層と比べて砂礫を含まない。住居の地床面と考えられる。

④：褐（7.5YR4/6）土。土中に2～3㎜程度の粒礫を多く含む。弱い粘性をもつ。若干の炭化物も見られる。周溝埋土と考えられる。

⑤：灰（7.5YR4/4）土が主体となり、明黄褐（2.5YR7/6）土が混じる。③層に比べてやんとなる黒色土に粒礫が混じる点でも二層と区別できる。粒礫は①層ほど多並ではない。住居の造成土と考えられる。

⑥：①層に酒落黒土及び遺定この窪みとでて見られるのみ。

⑦：明黄褐（2.5YR7/6）土が主体となり、褐色（7.5YR4/4）土が混じる。

⑧：暗赤褐（5YR3/4）土。にぶい黄色土が混じり込む。浅土には土器片・炭化物が含まれる。周溝の部ち込み に部分的に見られる。

⑨：淡黄褐（2.5YR7/6）粉質土に黒褐土が含まれる。

⑩：明黄褐（2.5YR7/6）土と灰（7.5YR4/6）土が混じる。⑤層と⑧層の中間的な層。ブロック状に見られる。

E–E'

①：暗褐（7.5YR3/4）土。2～4㎜程度の砂礫を多く含む。わずかに粘性をもつ。炭化物を少量含む。

②：暗褐（7.5YR3/4）砂質土。5㎜程度のブロック状に黄褐（10YR5/6）土が混じる。

③：暗褐（10YR3/4）土が主体で、暗褐（7.5YR3/4）土が混じる。2～4㎜程度の砂礫を含む。

④：暗褐（10YR3/4）砂質土。2～3㎜程度の粒礫を含む。

⑤：暗褐（7.5YR3/4）砂質土と黄褐（10YR5/8）砂質土が混じり合う。

⑥：暗褐（7.5YR3/4）砂質土。黄褐（10YR5/8）砂質土がブロック状に混じる。②層と比べて、黄褐色土の混合は少ない。2～3㎜径の粒礫はわずかに含むのみ。

⑦：暗褐（10YR3/4）砂質土と黄褐（10YR5/8）砂質土が混じる。きめが細かく2㎜以上の粒礫はほとんど含まない。

⑧：暗褐（10YR3/4）土と黄褐（10YR5/8）土が混じる点では②層と類似しているが、2㎜程度の粒礫がやや目立ち、わずかに粘性をもつことから②層と分離ができる。

図41　SC-27遺構実測図（縮尺1/50）

（2）竪穴式住居

① **SC-27**（図41・42、図版８・９・18-１～３）

CV11・12区およびCW11・12区に位置する竪穴式住居跡。最初、CW12区において、北東－南西方向に約４ｍ延びる、竪穴式住居の一辺とその北隅を確認した。しかし、ほぼそれに平行するような練兵場時代の塹壕による攪乱と、SD-１～３による南側の削平により、南東側への遺構の広がりを確認できる範囲は狭い。

住居跡土層については、北西辺のすぐ内側、塹壕攪乱の壁で確認した（A-A'土層図）。埋土（①層）は、北隅部周辺において10cm前後の厚さで確認できたが、南側では確認できず、塹壕攪乱を挟んだ南東側でも、５cm以下の厚さを辛うじて確認できたに留まる。２～４mm大の砂礫を多く含む褐色土である。対して南側は、SD-１による削平で埋土を失い、ほぼ上層埋土と同じ土質ながら、一段深い位置にまで褐色土が堆積し、一部には、炭化物を含む。竪穴式住居内周溝の埋土である（②～⑦層）。北隅部付近でも、落ち込み中に、周溝埋土の一部が認められる。それ以外の北隅部は周溝が巡らず、代わって砂礫を含まない明黄褐色砂質土が薄く認められる（⑧層）。貼床層である。以下は、住居造成時の土層である（⑨層）。

一部に周溝をもつが、それ以外には床面で若干の柱穴・小穴を検出した。また、住居以前の遺構探索において、この竪穴式住居の範囲内からも若干の柱穴・小穴等を検出しており、これらの一部に、本来SC-27に伴ったものも存在する可能性がある。しかし、それらを含めても、主柱穴となり得るのは、P12のみ。その位置と残存する床面の広がり、そして残存する北西辺と北隅から、１辺４ｍ弱の方形で、四本主柱穴の竪穴式住居と復元した。

出土遺物のうち、図化したのは21点。うち、１・２・11・15が床造成土出土、４・５がP16出土、９・19がP17出土であり、他は埋土出土。20（R84）はほぼ床直上からの出土。

１～５は弥生土器。１は壺口縁部片で、端部を上下に少し拡張し、稜の弱い２条の凹線文を施す。中期後葉。２は壺底部片。外面に縦方向のミガキをわずかに確認できる。３は甕の口縁部片で、頸部の屈曲は滑らか。４は鉢の上半部で、丸みをもった体部から頸部で滑らかに屈曲する。５は鉢の底部片。凸状に厚く、外面に縦方向のミガキ。いずれも後期中葉。

６～15は須恵器。６は坏蓋の体部。稜が明瞭で口径も14cm以下と小さい。６世紀前葉。７は坏蓋口縁部。内端面は明瞭な段をもつ。６世紀前半。８は坏蓋口縁部。稜部は屈曲点のみとなり、口径も約12cmと小型。６世紀後半。９は坏身。口縁端部を欠失するが、立ち上がりは比較的高く、外面回転ヘラケズリの範囲も広

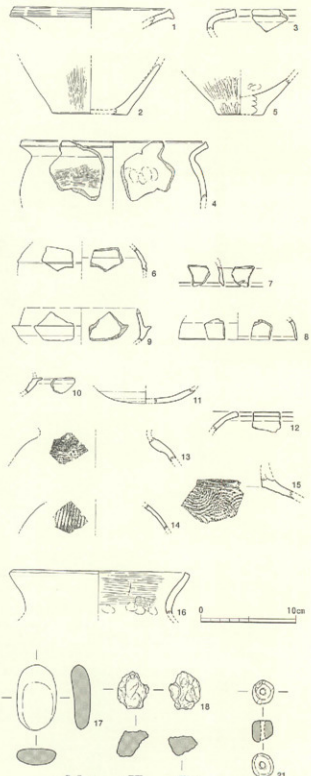


図42　SC-27出土遺物実測図（縮尺１/４、１/２、１/１）

く、6世紀前葉に遡る。10は坏身の受け部のみ。6世紀後葉。11は坏身底部で、残存する範囲は、回転ヘラケズリが施されている。12は鉢口縁部片か。口縁は外面に変換点をもって外反し、端部は面をなす。内面に自然釉を被る。13は壺上胴部片。外面に横方向の平行タタキが見られ、自然釉が被る。14は小型甕の上胴部片。外面縦方向の平行タタキが残る。15は甕胴部。胴部の上に頸部を接合したことが、剝離面から窺える。外面に自然釉。16は土師器甕口縁部。口縁はやや内湾し、端部は面をもつ。内面に粗い横方向のハケ目調整。胎土は粗い。6世紀。

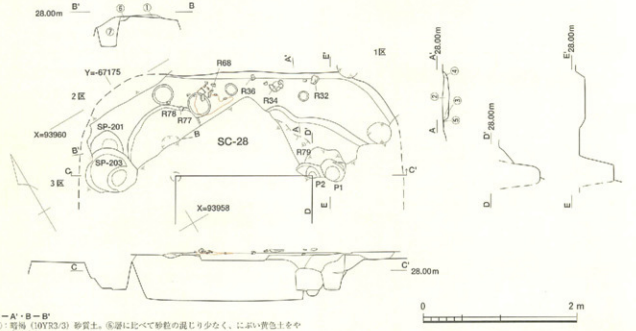
17は磨石。片面が若干凹むが、全面よく磨き上げられている。あるいは土器のミガキ調整に用いられたものか。18～20はいずれも鉄滓である。21は土玉。径5～7㎜・厚さ4～5㎜の不整円筒形を呈し、ほぼ中央に径1.5㎜前後の孔が開く。

なお、図化できなかったが、P17からは6世紀後葉の須恵器坏蓋、P18からは須恵器坏天井部が出土している。さらにこの他に、比較的多くの炭化物小片や、サヌカイトおよび結晶片岩の小片、骨小片や種実を、埋土の水洗選別で得ている。一部は同定分析を依頼し、イネ炭化果実1点の出土が確認されている（詳細はⅡ－5－C参照）。

出土遺物は、埋土出土遺物に6世紀代の幅があり、床造成土出土の15が6世紀中頃を示すとすれば、住居の時期を6世紀中頃から後半に求められる可能性が最も高くなろう。床面での出土遺物がないために、細かい時期比定は難しい。　［吉田・山田］

② **SC-28**（図43・44、図版8・9・18-4～8）

CX12・13区およびCW12・13区に位置し、大半を撹乱で消失しているが、北東辺部分を辛うじて残す、平面隅丸方形の竪穴式住居。北東辺の長さは、約4.2m。埋土もごくわずかに確認できた程度で、ほぼ検出面が床面に相当する。北西壁際の中央やや西寄りに古墳時代後期の土師器甕片（5・R68）を伴う焼土混土層が広がり、住居内の火床がこの位置にあったことを窺え、竈が作りつけられていた可能性もある。一方、北西壁際の中央やや東寄りでは、須恵器坏身（8・R32）や高坏片（9・R36）、土師器甕底部（4・R34）が床面近くで出土している。これらの下層には、造成時に周溝状に掘削した痕跡が認められる。住居主柱穴は、P2がその1基と見られるが、他は撹乱によって一切不明。柱間1.8mの4本主柱穴に復元した。



A－A'・B－B'
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。⑥部に比べて砂粒の混じり少なく、にぶい黄色土をやや多く含む。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。3㎜前後の砂礫を多く含む。炭化物粒を含む。にぶい黄色土の微細ブロックをわずかに含む。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。⑦層に比べて砂礫の混在少なく、にぶい黄色土の微細ブロックを多く含む。
④：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。黄褐色土が多く混じる。砂粒をほとんど含まない。粘性あり。
⑤：暗褐（10YR3/3）砂質土。1～2㎜の砂粒がわずかに混じる。しまりあり。
⑥：暗褐（10YR3/3）砂質土。⑦層に比べてにぶい黄色土ブロックがラミナ状に混じる。砂粒少ない。
⑦：暗褐（10YR3/3）砂質土。SP-203埋土。3㎜大のにぶい黄色土のブロックが混じる。3㎜前後の砂礫を多く含む。

P1：暗褐（10YR3/3）砂質土。3㎜前後の砂礫を多く含む。5㎜大の炭化物を含む。3㎜前後のにぶい黄色土のブロックを含む。しまりあり。P2を切る。
P2：暗褐（10YR3/3）砂質土。2㎜前後の砂礫多く含む。P1に比べて砂粒の大きさは小さい。5㎜大の炭化物粒を含む。3㎜大のにぶい黄色土のブロックを含む。P1よりきめが細かく、砂性が強い。P1に切られる。

図43　SC-28遺構実測図（縮尺1/50）

出土遺物のうち図化できたのは、11点。1はR77、2は焼土周辺埋土、3はR79、4はR34、5はR68、6はA-A'畔東埋土、7・10はA-A'畔とB-B'畔間の埋土、8はR32にⅢ層出土が接合、9はR36、11はB-B'畔南埋土の出土である。

1～3は弥生土器である。1は壺の底部片で、全体的に磨滅している。やや凹み底で後期とみられる。2は甕の口縁部片。口縁部が比較的立ち、口縁下端が横ナデによりわずかに突出する。後期後半。3は高坏あるいは器台の脚部。外面に縦方向のミガキ、内面は板ナデ。後期。4・5は土師器。4は壺の底部で丸底。内外面ハケ目調整だが、底部外面平滑に対し、内面は指頭圧痕を多く残し、丸底部を外壁により成形した可能性が高い。他の6世紀代の甕に比べて器壁が薄いものの、内面にケズリはみられない。6世紀前半に位置づけておきたい。外面には煤が付着する。5は内湾する甕口縁部。6世紀前半。6～9は須恵器。6は坏蓋。わずかに稜を残す。6世紀中頃。7・8は坏身。7の外面回転ヘラケズリの範囲はやや広く、口縁部の立ち上がりも直立に近い。8は外底面3/5程度を回転ヘラケズリする。いずれも6世紀中頃。9は高坏。坏底部と脚部が残存する。脚部は外面にカキメ調整を施し、3方向に方形透かしを施す長脚2段と推測できる。10・11は石器。10は砂岩製の敲石。先端から側面にかけて、敲打痕を確認できる。11はサヌカイトの剥片。側面には自然面を残す。

なお、図化できなかったが、北西壁際の中央やや西寄りの焼土混土層を中心とした周辺埋土を採取し、水洗後選別を行ったところ、スカイブルーのガラス微細片1点を得ている。ガラス内には小さな気泡を多数確認することができる（図版18-8）。色調からして、西方の12・14・16次調査区で多く出土しているガラス小玉が、微細破片となり古墳時代遺構埋土に紛れ込んだものと推定される。他にも埋土の水洗選別では、骨小片や種実、さらには比較的多くの炭化物小片やサヌカイトおよび結晶片岩の微細剥片を得ている。このうち、炭化種実の同定分析を依頼したところ、ヤマモモ炭化核片3点の存在が明らかになるとともに（詳細はⅡ-5-C参照）、埋土出土炭化材が針葉樹との同定結果も得ている（詳細はⅡ-5-A参照）。

出土遺物には、6世紀前半を示す土師器甕と、6世紀中頃の須恵器がある。前者は火床付近と見られる焼土混土層から出土しており、後者は、床面に近いところではありながら、若干なりとも出土位置が高い。したがって、土師器甕の示す6世紀前半を、住居の機能時期としておきたい。すると、近接して検出したSC-27とSC-28の関係は、6世紀前半の可能性が高いSC-28から、6世紀中頃から後半のSC-27へと推移したことが予測されることになる。　［吉田・山田］

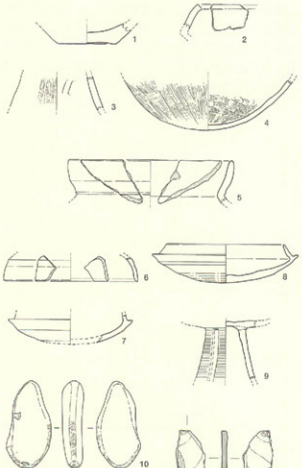


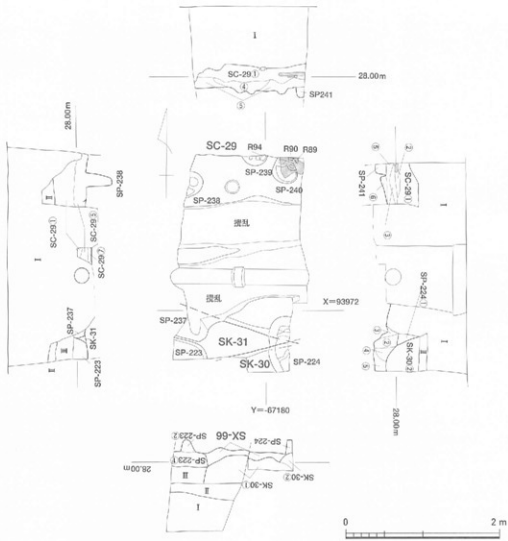
図44　SC-28出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）

③　**SC-29**（図45・46、図版10-2～4・19-1～3）

北1区においては、Ⅰ・Ⅱ層除去後、城北団地基本層序のⅢ層が広がりを確認できた。Ⅲ層上面の精査を行ったが、遺構ラインを確認できなかったため、Ⅲ層を掘り下げながら遺構検出に努めた。

Ⅲ層の掘り下げ中に、北1区南側で、北西から南東に直線的に延びる遺構ラインが明確になったことから、SC-29として認識した。さらに調査区東西壁の土層で埋土が確認でき、Ⅲ層として掘り下げた部分がSC-29の埋土であることも確認できた。平面形状については不明である。

SC-29埋土①層は、竪穴式住居廃絶後の堆積層であり、②～⑦層は床面造成土と考えられる。SC-29を遺構とした認識した時点で、すでに床面造成土を掘り下



SC-29
①：灰褐（10YR4/2）砂質土。1～2mm大の砂粒を多く含む。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土とにぶい黄橙（10YR8/4）砂質土のよいブロックが疎らに混じる。
②：にぶい黄褐（10YR5/3）砂質土。粘質をほとんど含まない。遺構3層と境土を含む。壁の一部か。
③：にぶい黄褐（10YR5/3）砂質土。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土とにぶい黄橙（10YR8/4）砂質土のよいブロックが多く混じる。砂礫を含まない。
④：にぶい黄褐（10YR5/3）砂質土。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土のよいブロックが多く混じる。砂礫は含まない。
⑤：①層と⑪層に同じるが、明黄褐（2.5Y7/6）砂質土のブロックが大きく帯びず、レンズ状に近い。
⑥：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土のブロックはレンズ状・帯状を呈する。
⑦：明黄褐（2.5Y 7/6）砂質土を主体としながら、にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土のよいブロックが少量混じる。

SK-30
①：灰褐（7.5YR4/2）砂質土。2～3mm大の砂粒を多く含む。
②：灰褐（7.5YR4/2）砂質土。にぶい黄橙（10YR6/4）砂質土のよいブロックが少量混じる。2～3mm大の砂粒を多く含む。

SK-31
灰褐（7.5YR4/2）砂質土。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土のレンズ状ブロックを多く含む。

SK-66
にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。やや粘性を帯びる。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土のレンズ状ブロックが多く混じる。

SP-223
①：灰褐（7.5YR4/2）砂質土。炉礫を含まない。にぶい黄橙（10YR6/4）砂質土の丸いブロックを少量含む。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質土を主体としながら、明黄褐（2.5Y7/6）砂質土のよいブロックが多く混じる。

SP-241
灰黄褐（10YR5/2）砂質シルト。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土の丸いブロックがごく少量混じる。砂礫を含まない。

図45　北1区遺構実測図（縮尺1/50）

げている段階であったため、埋土と床面造成土とで遺物の取り上げを分離することができなかった。

遺構最下面でSP-238～241等を確認している。柱痕が見られるものはない。SP-241は北1区北東隅でわずかに検出したのみで、調査区外へと続く。

調査区北東部の壁際では、炭化物や焼土に混じって、R89やR90（6）等の土師器甕が出土している。北1区北東隅付近が竈の一部であった可能性が考えられ、6が竪穴式住居の使用年代を示すものと考える。なお、焼土については採取・水洗選別を行ったが、炭化物片を少量得たのみである。

遺物は、散発的な出土状況である。埋土中として取

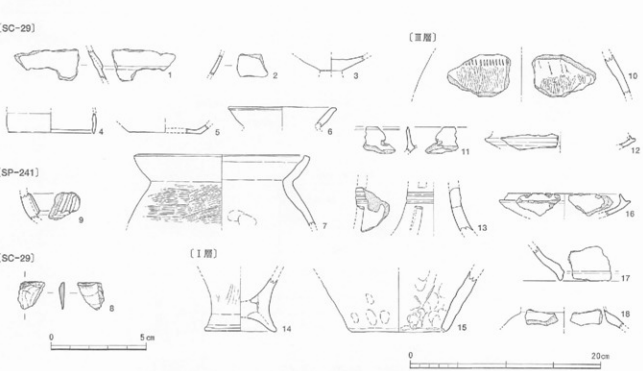


図46　北１区出土遺物実測図（縮尺１/４、１/２）

り上げた遺物は、弥生土器や土師器片が50点前後。１～３は弥生土器。１は前期中葉の壺胴部片。粘土帯接合部を利用した段を有す。２は鉢の胴部と考えられる。外面は細かな横方向のミガキを施し、赤彩する。３は高坏接合部。４は須恵器坏蓋の口縁部。復元口径9.3㎝と小型。体部稜直下の凹線状部が残り、口縁内端面には微弱な沈線が巡る。５世紀後半から末。５は土師器坏底部。古代以降で、混在である。６・７は土師器の甕。６は口縁部を横ナデし、端部に面をもつ。７はやや内湾気味の口縁部で、内端部が横ナデにより凹線状となる。胴部は横方向の粗いハケ目調整。ともに５世紀代に遡ると考えられる。８はサヌカイトの剥片。薄い剥片ながら、側縁に連続する微細な剥離が認められる。

SC-29完掘面で検出したSP-238・240・241でも弥生土器・土師器片が少量出土している。図化できたのはSP-241出土の９である。弥生土器壺の頸部片。貼付突帯上に、「ノ」字状の押圧を密に施す。中期後葉から後期の大型壺。図化していないが、R89は古墳時代中期以降の土師器片で、６や埋土上部出土の７（R94）と同時期のものと考えられる。

Ⅲ層として取り上げた遺物には、弥生土器・土師器・須恵器の小片が多数ある。前述のようにⅢ層出土遺物の多くは、本来SC-29埋土からの出土とすべき資料が多数含まれている。SC-29の時期の検討材料として、主要なものを抽出して図化している。10は弥生土器壺の胴部片。外面は爪形文を施した後に縦方向のミガキ、内面も縦方向のミガキ。11～13は須恵器。11は比較的立ち上がりの高い坏身。口縁内端部に段をもつ。５世紀後半。12は赤焼けの坏身。６世紀後半。13は高坏の脚部。長脚２段で、上下の方形透かしの一端とその間の沈線２条を確認できる。６世紀中頃から後半。Ⅲ層中には古墳時代後期に下るものがみられるが、SC-29埋土には砂礫をほとんど含まず、C類型埋土に一致する。13次調査での古墳時代後期以前の埋土とも共通し、さらに竈に伴うと考えられる７などから、SC-29は５世紀後半と考えられる。

なお、北１区のⅠ層出土遺物からも５点を図化した。14は弥生土器甕の底部で上げ底状。弥生時代中期中葉から後葉。15は土師器で、焼成前穿孔の壺底部。底部端面は、焼成時に接地していたとみられ、黒化層が表面に表れている。雲母の微細粒を多く含む。古墳時代前期（図版19－５）。16～18は須恵器。16は坏身口縁部。６世紀後半。17は脚端部。18は短頸壺の肩部で、口縁部は薄くなる。　［三吉・山田・濱田］

（３）掘立柱建物

①　SB-67（図47・48、図版19－６）

調査区南西部のCX12・13区に位置する。20次調査SP-135・137、13次調査SP-458・467からなり、梁間１間（梁間長1.48m）、桁行１間（桁行長3.46m）を測る掘立柱建物。13次調査ではSB-44として報告している。

SP-135は、調査区西壁に沿った径約50㎝の半円形の柱穴。深さ約40㎝。立柱痕は確認できていない。

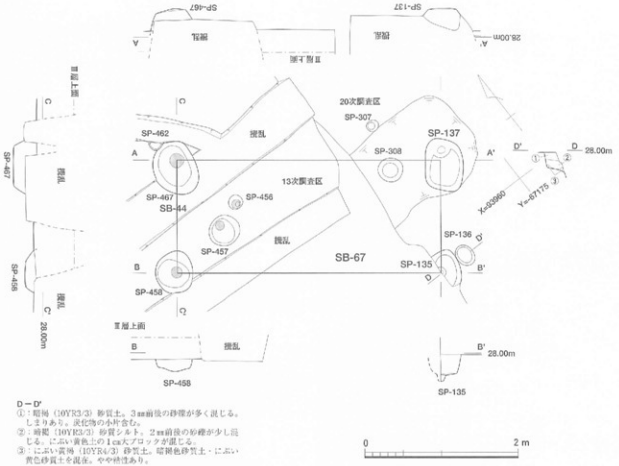


図47　SB-67遺構実測図（縮尺1/50）

SP-137は、長径約70㎝、短径約50㎝の長楕円形を呈する。深さ約25㎝。立柱痕は確認できていない。埋土は暗褐色砂質土を主体とする。13次調査SP-458は、径49～53㎝の円形。深さ約15㎝。径約15㎝の立柱痕跡を確認している。13次調査SP-467は、長径約73㎝・短径約55㎝の長楕円形を呈する。深さ約28㎝。径約18㎝の立柱痕跡を確認している。

SP-135の埋土からは、弥生土器もしくは土師器の小片が約10点出土しており、2点を図化した。1は須恵器坏身の口縁部片。6世紀後葉～末葉。2は土師器甕の口縁部片で、内外面を横ナデする。SP-137の埋土からは、弥生土器もしくは土師器の小片15点、須恵器蓋坏、甕片が各1点出土している。13次調査SP-458では、①層から弥生土器と土師器の胴部細片～小片9点、③層から弥生土器もしくは土師器の胴部細片6点などが出土。その他に弥生時代中期の凹線文を施す壺の口縁部、土師器もしくは弥生土器の胴部小片2点が出土している。13次調査SP-467では、①層から土師器もしくは弥生土器の胴部細片～小片8点が出土している。

出土遺物と、砂礫が多く混じる埋土の特徴から、古墳時代後期の遺構と考えられる。　［三宮・山田］

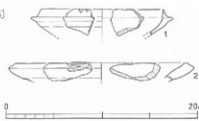
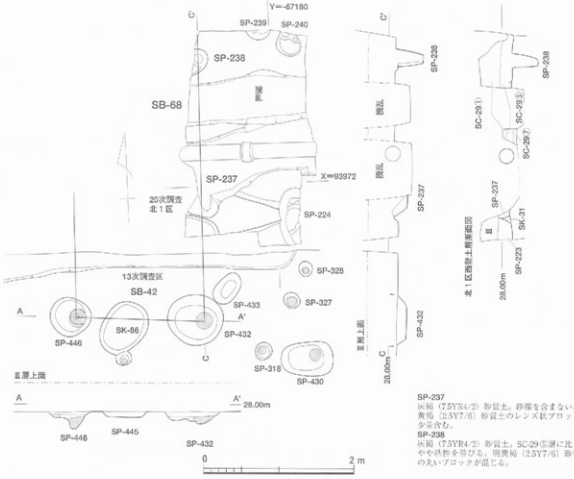


図48　SB-67出土遺物実測図（縮尺1/4）

② **SB-68**（図49）

20次調査北1区と13次調査区北東部CY15区で検出。20次調査SP-237・238、13次調査SP-432・446からなり、梁間1間（梁間長1.7m）、桁行2間（桁行長3.4m）以上からなる掘立柱建物と考えられる。20次調査SP-237・238は、ともにSC-29完掘面で検出した。13次調査SB-42に該当する。

SP-237は調査区内南西部西壁に掛して確認。深さ約20㎝。埋土は灰褐色砂質土で、砂礫を含まず、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックを少量含む。出土遺物はない。SP-238は西壁沿いで柱穴の約半分を検出し



SP-237
灰褐（7.5YR4/2）砂質土。粘質を含まない。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土のレンズ状ブロックを少量含む。
SP-238
灰褐（7.5YR4/2）砂質土。SC-29①層に比してやや粘性を帯びる。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土のあいブロックが混じる。

図49　SB-68遺構実測図（縮尺1/50）

た。深さ約35cmと、しっかりしている。埋土は灰褐色砂質土で、SC-29⑤層に比してやや粘性を帯びる。明黄褐色砂質土の丸いブロックが混じる。13次調査SP-432は径67～87cm、深さ約17cm、径約21cmの立柱痕跡を確認している。13次調査SP-446は径51～55cm、深さ約22cm、径約22cmの立柱痕跡を確認している。

SP-237は出土遺物がない。SP-238埋土からは、縄文土器片1点、弥生土器の小片2点が出土している。13次調査SP-432からは、弥生土器・土師器・須恵器片が出土している。須恵器は、6世紀代に降る坏天井部片が出土している。13次調査SP-446からは、弥生土器・土師器・須恵器片が出土している。須恵器は胴部片であり、詳細な時期決定は困難である。

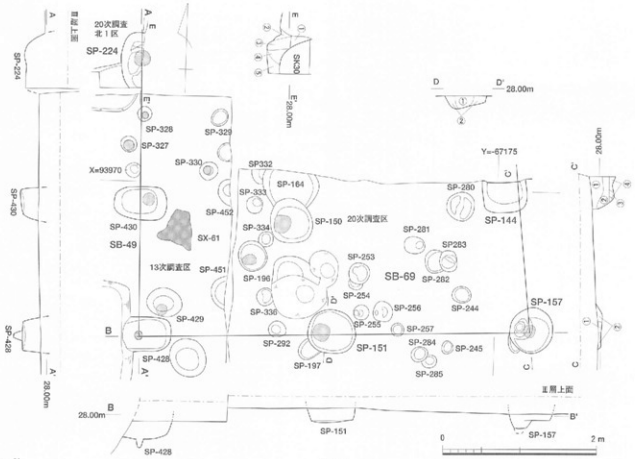
以上の出土遺物の検討と、SP-432・446の埋土に砂礫が多く混じることなどから、SB-68は古墳時代後期に位置づけられる。　［三吉］

③　SB-69（図50・51、図版19-7）

調査区北西隅のCX14・15区で検出。20次調査SP-144・151・157・224、13次調査SP-428・430からなる。梁間2間（梁間長5.1m）、桁行2間以上（桁行長3.6m以上）の掘立柱建物である。13次調査SB-49に対応する。

SP-144は調査区北壁沿いで検出。1辺約60cmの隅丸方形の柱穴。深さ約30cm。SP-151は径60～64cmの円形掘り方をもつ。深さ約20cm。径約25cmの立柱痕を検出している。SP-198を切る。SP-157は径50～55cmの円形の掘り方をもつ。深さ約7cm。径約15cmの立柱痕を検出している。埋土中には砂礫を多く含む。SP-224は北1区東壁沿いで検出。柱穴東側は調査区外へ続く。深さ約30cm。径約15cmの立柱痕を検出している。13次調査SP-428は残存長約63cm、幅約45cm、深さ約24cmの隅丸方形の掘り方。柱の抜き取り痕が確認されている。13次調査SP-430は、長さ約63cm、幅約43cm、深さ約20cmの規模。径約16cmの立柱痕跡が確認されている。

出土遺物は、SP-144から、弥生土器・土師器・須恵器片が約40点出土している。図化したのは、1～3の須恵器3点。1は小甕で、短頸壺の蓋。口縁端部を尖り気味に収める。焼成はあまい。2は坏身の体部片。



C－C'
SP-144
①：灰黄褐（10YR5/2）砂質土。1～2mmの白色砂粒が多く混じる。炭化物が少量混じる。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。①層に比して砂粒はほとんど認められない。1cm前後の不定形炭化物が少量混じる。
③：灰黄褐（10YR5/2）砂質シルト。砂礫を含まない。にぶい黄橙（10YR7/4）砂質土の不定形ブロックが少量混じる。
④：灰黄褐（10YR6/2）砂質シルト。砂礫を含まない。にぶい黄橙（10YR7/4）砂質土が50%の割合で含まれる。
SP-157
①：にぶい黄橙（10YR4/3）砂質シルト。1mm前後の砂粒が混じる。②層に比してやや軟生あり。
②：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。2～3mm前後の砂礫を含む。

D－D'
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。1mm前後の白色砂粒を含む。1cm前後の角張った炭化物を含む。
②：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。にぶい黄橙（10YR6/4）砂質土の丸いブロックが少量混じる。2～3mm大の砂礫、1cm前後の不定形炭化物を含む。

E－E'
①：灰褐（7.5YR4/2）砂質土。1～2mmの砂粒を含む。
②：灰褐（7.5YR4/2）砂質シルト。砂礫にはほとんど含まない。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土の丸いブロックをごく少量含む。
③：灰褐（7.5YR4/2）砂質シルト。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土のブロックが多く混じる。②層に比して粘性弱い。
④：灰褐（7.5YR4/2）砂質土。にぶい黄橙（10YR6/4）砂質土のブロックを混じえ、②層に比して粘性弱い。
⑤：灰褐（7.5YR4/2）砂質土と明黄褐（2.5Y7/6）砂質シルトが不定形のブロック状に混じる。

図50　SB-69遺構実測図（縮尺1/50）

外面回転ヘラケズリの範囲が辛うじて残る。3は鉢の胴部片。残存部の外面下半には回転ヘラケズリが及ぶ。SP-151からは、①・②層から弥生土器・土師器・須恵器の小片が50点近く出土している。図化したのは4・5の2点。ともに須恵器坏身。4は口縁部。6世紀末から7世紀初頭。5は口縁部と底部を欠く。外面回転ヘラケズリの範囲はやや狭い。SP-151埋土の水洗選別では、炭化物小片と骨？小片を得ている。SP-157では、埋土から20点弱の弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土している。図化したのは1点。6の土師器壺の口縁部である。SP-224では埋土中から土師器もしくは弥生土器の小片が約10点出土している。13次調査SP-428では、①層から須恵器胴部片、土師器もしくは弥生土器片が約20点、埋土中から須恵器坏蓋

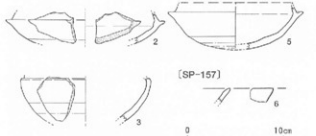
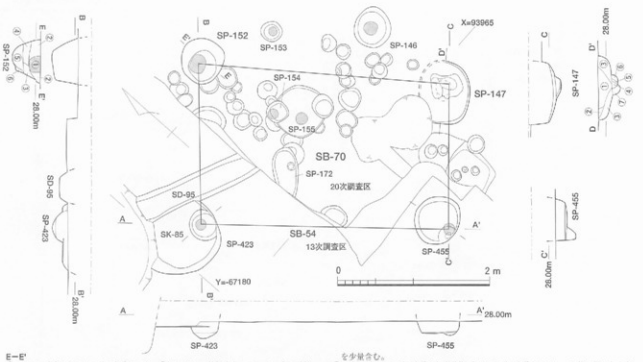


図51　SB-69出土遺物実測図（縮尺1/4）



E–E'
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。②地に比して粘性あり。1～2㎜大の砂粒を含む。
②：にぶい黄褐（10YR7/4）、明黄褐（10YR7/6）砂質シルトの5㎝大のレンズ状ブロックがまばらに混じる。3～5㎜大の砂礫が多く混じる。
③：にぶい黄褐（10YR5/3）砂質シルト。明黄褐（2.5Y7/6）砂質シルトのレンズ状ブロックが多く混じる。1㎜前後の砂礫が少量混じる。
④：にぶい黄褐（10YR4/3）粘質シルト。1㎜前後の砂礫を含む。
⑤：暗褐（10YR3/3）砂質シルト。明黄褐（2.5Y7/6）シルトのレンズ状ブロックが多く混じる。
⑥：暗褐（10YR3/3）シルト。明黄褐（2.5Y7/6）シルトのレンズ状ブロックを多く含む。

D–D'
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。3～4㎜前後の砂礫を多く含む。しまりあり。炭化物を少量含む。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土と明黄褐（10YR6/6）砂質土がブロック状に混じりあう。暗褐色土には2㎜程度の砂礫が少量混じる。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。2㎜前後の砂礫と2～3㎝程度の明黄褐（10YR6/6）土をブロック状に含む。④～⑥層は柱抜き取り痕の可能性あり。
④：暗褐（10YR3/4）砂質土。1～2㎜程度の砂粒を少量含む。にぶい黄色土のブロックを含まない。
⑤：暗褐（10YR3/3）砂質土。明黄褐（10YR3/6）砂質土が混じる。砂礫はほとんど含まない。
⑥：暗褐（10YR3/3）土に明黄褐（10YR3/6）砂質土が混じる。1～2㎜大の砂粒を含む。
⑦：暗褐（10YR3/3）砂質土。明黄褐（10YR3/6）土をブロック状に多く含む。1～2㎜大の砂粒を少量含む。柱抜き取り痕の可能性あり。

図52　SB–70遺構実測図　（縮尺1/50）

天井部片、悪もしくは壺片3点、土師器もしくは弥生土器の胴部細片8点が出土している。13次調査SP–430では、①層から土師器もしくは弥生土器片5点、②層から須恵器の坏部片、土師器もしくは弥生土器の小片3点、埋土中から須恵器坏身片や土師器もしくは弥生土器片が10数点出土している。

以上、出土遺物や埋土の特徴から、古墳時代後期の掘立柱建物と考えられる。　［三吉・山田］

④　**SB–70**（図52・53、図版19–8）

調査区北西部のCX13・14区で検出。20次調査SP–147・152、13次調査SP–423・455からなる。梁間1間（2.1m）×桁行1間（3.32m）の掘立柱建物である。13次調査SB–54に対応する。

SP–147は約70×80㎝の楕円形の掘り方をもつ。深さは約30㎝。柱の抜き取り痕は2つ確認でき、1つは径約20㎝を測る。SP–152は、径55～60㎝の円形。深さ約38㎝。径約20㎝の立柱痕跡を確認している。SP–199を切る。13次調査SP–423は径36㎝前後、深さ約22㎝の略円形の掘り方をもつ。径約16㎝の立柱痕跡を検出している。13次調査SP–455は径58～65㎝、深さ約25㎝の長楕円形の掘り方をもつ。径約15㎝の立柱痕跡を確認している。

出土遺物は、SP–147埋土から、須恵器蓋坏片3点、

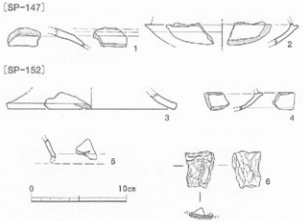


図53　SB–70出土遺物実測図　（縮尺1/4、1/2）

甕胴部片３点、土師器もしくは弥生土器の小片約30点が出土している。図化したのは１・２の須恵器２点。１は坏蓋の天井部片。回転ヘラケズリが見られる。２は坏身体部。立ち上がりを欠く。外面回転ヘラケズリの範囲は広いが、受け部は小さく、６世紀後半以降。SP-152では、②・⑤層から弥生土器もしくは土師器、須恵器の破片が20点前後出土している。図化できたのは、３～６の４点。５が②層出土で、他は⑤層出土。３は弥生土器高坏の脚部片。４・５は須恵器。４は坏身で、小さな受け部が残存する。６世紀後半。５は短脚高坏の脚部片。６は不明鉄製品。鍛造の板状品で、緩やかな曲面をなすらしい。13次調査SP-423では、①層から土師器もしくは弥生土器の胴部細片が２点出土している。13次調査SP-455では、立柱痕跡と掘り方埋土から土師器もしくは弥生土器の細片が５点出土している。

砂礫を含む埋土の特徴及び出土遺物から、古墳時代後期の掘立柱建物と考えられる。　［三吉・山田］

（４）土壙

①　SK-30（図45）

北１区CX・CY15区で検出した土壙。Ⅲ層掘り下げ中の精査により確認。調査区南東隅と東壁に見られる。形状については不明である。SP-224を切る。南側に隣接する13次調査では、関連する遺構が見られないことから土壙と考えた。

埋土中から弥生土器・土師器片などが10点強出土している。その中に、小片ではあるが須恵器坏蓋の口縁端部片が１点見られる。内面はあまい段をなすことから、６世紀前半に位置づけられる。前述のように、Ⅲ層出土遺物は、本来SK-30の埋土として扱う必要がある。Ⅲ層中出土遺物は、周辺の遺構との帰属問題があるが、約30点ある。その多くが弥生土器・土師器の小片である。時期がわかるものは、凹線文が施された壺の口縁部片１点のみである。弥生時代中期後葉と考えられる。なお、埋土の一部を採取・水洗選別したが、炭化物をわずかに得たのみである。

SK-30の埋土は砂礫を多く含んでいる。これらの特徴は古墳時代後期の遺構埋土の特徴である。よってSK-30も古墳時代後期以降に位置づけられる。［三吉］

（５）柱穴・小穴（図54～56、図版20-１～４）

Ｂ類型埋土の柱穴・小穴は57基あり、調査区内の北西部に集中する。いずれも古墳時代後期の遺構であると判断できる。詳細は表８に譲るが、以下、先に触れた掘立柱建物を構成する柱穴を除いて、明確な掘り方や柱痕をもつもの、大型のもの、あるいは図化できる遺物の出土をみたものについて述べる。　［吉田］

［SP-136］

約24×28cmの楕円形を呈し、深さは約14cm。①・②層が柱抜き取り後の流入土と見られる。出土遺物は、土師器甕片１点のみ。　［吉田］

［SP-138］

１辺50～60cmの扇形状の平面で、深さは約８cmと浅い。①層には砂礫・炭化物を多く含む。弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土している。　［吉田］

［SP-139］

１辺約30cmの隅丸方形の掘り方で、深さ約14cm。①層が柱部分に相当する。弥生土器ないし土師器の細片が３点出土している。　［吉田］

［SP-141］

径約35cmの不整円形で、深さ約10cm。①層は砂礫・炭化物を多く含み、柱部分にあたる。弥生土器ないし土師器の細片が出土している。　［吉田］

［SP-142］

径35cm前後、深さ約22cmを測る。土師器・須恵器片が出土し、２点が図化できた。１は須恵器坏身の底部。２は土師器甕の頸部片で、内外面に横ナデ調整を確認できる。５～６世紀。　［吉田・山田］

［SP-143］

復元径約60cm、深さ約30cmと大型。埋土上部の①層は、炭化物粒・焼土塊を含む。図化した以外に、弥生土器・土師器細片が約20点出土。３は須恵器坏蓋の口縁部片。内端面はかすかに稜をもつ。４は鉄滓、砂粒をかなり巻き込み、現重量12.7ｇ。　［吉田・山田］

［SP-145］

約35×40cmの楕円形で、深さ約14cm。西側に偏って、径約18cmの柱痕（①層）が認められる。出土遺物は、弥生土器甕片１点と土師器細片２点。　［吉田］

［SP-146］

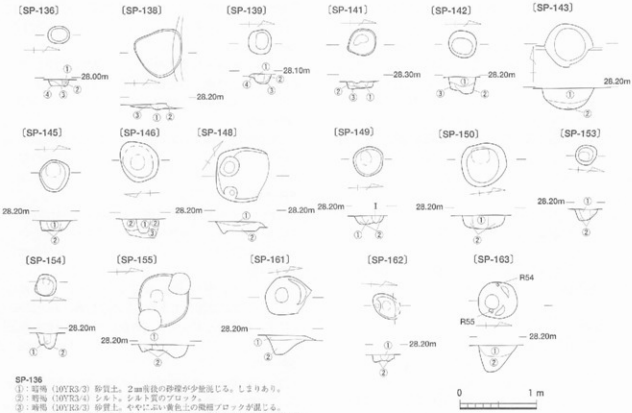
径約50cmの掘り方で、深さ約24cm。径約18cm柱痕（①層）がある。弥生土器・土師器・須恵器片が20点弱出土し、３点を図化した。５・６は弥生土器。５は壺口縁部片。凹線文２条が残る。６は壺底部。７は須恵器坏蓋口縁部。天井部と口縁部との境には明瞭な稜をもち、口縁端部内面には段をもつ。５世紀末から６世紀初頭。　［三吉・山田］

［SP-148］

約70×70cm以上の隅丸方形状とみられる。深さ約13cm。①・②層から約30点の弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土し、３点の須恵器を図化した（図版20-１）。８は坏身底部片。切り離し時の凸状部を明瞭に残し、回転ヘラケズリも狭い。９は坏蓋口縁部。端部は丸く収める。10は短頸壺の口縁部。　［三吉・山田］

［SP-149］

径約40cmの円形の掘り方で、深さ約20cm。やや西に



SP-136
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。2mm前後の砂礫が少量混じる。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/4）シルト。シルト質のブロック。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。ややにぶい黄色土の微細ブロックが混じる。
④：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。2cm大のにぶい黄色土のブロックが混じる。

SP-138
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。3mm前後の砂礫、炭化物を多く含む。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。1mm前後の砂粒が少量混じる。
③：砂質土の1cm大のブロックを含む。しまりあり。

SP-139
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。2mm前後の砂礫を多く含む。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。2mm前後の砂礫が少量混じる。にぶい黄色砂質土のブロックが混じる。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。1cm大のにぶい黄色砂質土のブロックが点々と混じる。
④：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色砂質土のブロックの混在多い。1mm前後の砂粒をわずかに含む。

SP-141
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。3mm前後の砂礫を多く含む。炭化物粒を多く含む。しまりあり。明黄褐色土の微細ブロックを少量含む。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。①層にほぼ同じ。にぶい黄色砂質土は含まない。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。2mm前後の砂礫をやや含む。にぶい黄色土の1cm大のブロックを多く含む。粘性ややあり。

SP-142
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。3mm大の砂礫・炭化物が多く混じる。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質シルト。2cm大のにぶい黄色砂質土のブロックが斑状に混じる。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。②層にほぼ同じだが、2mm前後の砂礫が少し混じる。

SP-143
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。3mm前後の砂礫を大量に含む。炭化物粒・焼土塊を含む。しまりあり。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。1mm前後の砂粒がやや混じる。2cm大のにぶい黄色土をレンズ状に含む。炭化物粒を少量含む。

SP-145
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。1mm前後の白色砂粒を含む。
②：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。明黄褐（10YR7/6）砂質シルトの不定形ブロックが少量混じる。1cm前後の不定形炭化物が少量混じる。砂粒を含む。

SP-146
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。1mm前後の白色粒を含む。②層に比して粘性あり。
②：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。にぶい黄橙（10YR7/4）砂質土の不定形ブロックが少量混じる。1cm前後の不定形炭化物が少量混じる。1mm前後の白色砂粒が多く混じる。
③：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。2～3mm大の砂礫が多く混じる。

SP-148
①：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。1～2mm大の砂粒が混じる。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。浅黄（2.5Y7/4）砂質土の丸いブロックが少量混じる。2～3mm大の砂礫を含む。

SP-149
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。1mm前後の白色砂粒を少量含む。柱痕。
②：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。にぶい黄橙（10YR7/4）砂質シルトの丸いブロックを含む。1～2mm大の砂粒を含む。

SP-150
①：黒褐（7.5YR3/2）砂質シルト。1mm前後の白色砂粒を含む。1cm前後の不定形炭化物を少量含む。
②：灰褐（7.5YR4/2）砂質シルト。にぶい黄橙（7.5YR4/2）砂質土の丸いブロックを少量含む。1mm前後の白色砂粒を多く含む。

SP-153
①：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。1mm前後の白色粒を含む。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。にぶい黄橙（10YR7/4）砂質土の丸いブロックが少量混じる。1mm前後の砂粒、1cm前後の不定形炭化物を含む。

SP-154
①：黒褐（10YR3/2）砂質シルト。1mm前後の砂粒が混じる。
②：黒褐（10YR/3/2）砂質シルト。①層に比して砂粒の割合が多い。1cm大の不定形炭化物が混じる。

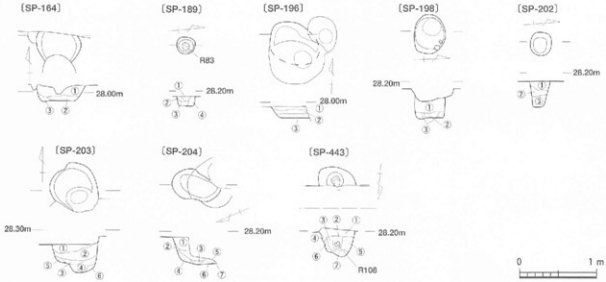
SP-155
①：灰褐（10YR4/2）砂質シルト。1mm前後の砂粒が混じる。
②：灰褐（10YR4/2）砂質シルト。にぶい黄橙（10YR7/4）砂質シルトの1cm大の丸いブロックが混じる。

SP-161
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。2～3mm大の砂礫が多く混じる。
②：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。粘性がやや強い。1～2mm大の砂粒を多く含む。2cm大の角張った炭化物を含む。

SP-162
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。柱痕。
②：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。1～2mm大の砂粒を含む。

SP-163
①：にぶい黄褐（10YR4/3）シルト。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土のレンズ状ブロックが多く混じる。1mm前後の砂粒と、小指先大の不定形ブロックが混じる。
②：にぶい黄褐（10YR4/3）シルト。明黄褐（2.5Y7/6）シルトの丸いブロックが混じる。

図54　古墳時代の柱穴・小穴遺構実測図(1)（縮尺1/50）



SP-164
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。1～2㎜大の砂粒が多く混じる。小指先大の炭化物を少量含む。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。1㎜未満の砂粒を含む。①層に比して砂粒の割合少ない。
③：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。明黄褐（10YR7/6）砂質シルトのブロックが混じる。②層に比して砂性が強い。1～2㎜大の砂粒が混じる。小指先大の炭化物が混じる。

SP-189
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。3㎜前後の砂礫をやや含む。炭化物を含む。しまり弱い。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。①層に同じながら、砂礫の割合少ない。
③：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。にぶい黄色砂質土が2㎜大のブロック状に混在。
④：暗褐（10YR3/3）砂質土。1㎝大のにぶい黄色土のブロックが混在する。③層に比べて少ない。

SP-196
①：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。明黄褐（2.5Y7/6）砂質シルトの親指先大の丸いブロックが混じる。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。2㎜前後の砂礫を含む。
③：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。1㎜前後の砂粒が混じる。②層に比して少量。

SP-198
①：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質シルト。1～2㎜大の砂粒を含む。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土の小指先大の丸いブロックが混じる。
②：③層とほぼ同じだが砂礫少ない。柱痕。
③：にぶい黄褐（10YR4/3）シルト。明黄褐（2.5Y7/6）シルトの丸いブロックが多く混じる。

SP-202
①：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土の丸いブロックが混じる。1～2㎜大の砂粒を含む。
②：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。明黄褐（2.5Y7/6）砂質土の丸いブロックを少量含む。①層に比して砂粒は少ない。
③：灰黄褐（10YR4/2）砂質シルト。浅黄（2.5Y7/4）砂質シルトの丸いブロックを含む。②層に比べて砂粒は少ない。1㎝の不定形炭化物を少量含む。

SP-203
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。3㎜前後の砂礫を多く含み、しまりあり。炭化物と焼土の微細ブロックを多く含む。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。1㎜大のにぶい黄色土のブロックが混じる。
③：暗褐（10YR3/3）砂質土。2～3㎜大の砂礫を少し含む。①・②層に比べ、2㎝大のにぶい黄色土のブロックの混在多い。砂質強い。
④：暗褐（10YR3/3）砂質土。2㎜前後の砂礫がわずかに混じる。にぶい黄色砂質土が2㎝大に斑状に混じる。
⑤：暗褐（10YR3/3）砂質土。砂粒をほとんど含まず、3～5㎜大のブロックを含む。
⑥：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。5㎝大のにぶい黄色土のブロック中にⅢ層が混在。

SP-204
①：暗褐（10YR3/3）砂質土。3㎜前後の砂礫を多く含む。しまりあり。炭化物粒と1㎝大のにぶい黄色土の小ブロックを含む。
②：暗褐（10YR3/3）砂質土。1㎜前後の砂粒をわずかに含む。ややシルト質。
③：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。レンズ状ににぶい黄色土のブロックが堆積。やや粘性あり。
④：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。3㎝大のにぶい黄色土のブロックが斑状に混在。
⑤：④層に同じ。
⑥：にぶい黄色土のブロック。
⑦：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。やや粘性あり。

SP-443
①：黒褐（10YR3/2）砂質土。1～2㎜大の砂粒を多く含む。明黄褐（10YR7/6）砂質土の丸いブロックを少量含む。
②：黒褐（10YR3/2）砂質土。1㎜前後の砂粒を少量含む。柱（杭）の抜取り痕。
③：黒褐（10YR3/2）砂質土。明黄褐（10YR7/6）砂質土の丸いブロックを少量含む。
④：明黄褐（10YR7/6）砂質土の不定形ブロックを主体としながら、灰黄褐（10YR4/2）砂質土の丸いブロックを少量含む。
⑤：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。明黄褐（10YR7/6）砂質土の丸いブロックを少量含む。2～3㎜大の砂礫を含む。
⑥：明黄褐（10YR7/6）砂質土の不定形ブロックを主体としながら、灰黄褐（10YR4/2）砂質土の丸いブロックを含む。
⑦：灰黄褐（10YR4/2）砂質土を主体としながら、ごく少量の明黄褐（10YR7/6）砂質土の丸いブロックを含む。

図55　古墳時代の柱穴・小穴遺構実測図(2)（縮尺1/50）

偏って径約15㎝の柱痕がある（①層）。10点弱の弥生土器・土師器・須恵器片が出土し、6世紀代の須恵器蓋坏底部もしくは天井部片がある。　［三吉・山田］

［SP-150］

径約60㎝の掘り方で、深さ約18㎝。黒褐色シルトの柱痕部（①層）は径約23㎝。西に偏る。出土遺物は比較的多く、弥生土器・土師器壺・甕片や須恵器蓋坏・甕胴部細片約50点に及ぶ。図化したのは2点。11は須恵器坏身の体部片。強く内傾して立ち上がる。12は一部を欠損するが、断面円形の棒状土錘。先端に径約0.7㎝の孔が開く（図版20-2）。　［三吉・山田］

［SP-153］

径25～28㎝不整円形の掘り方で、深さは約14㎝。径約13㎝の柱痕（①層）が確認できている。②層から弥生土器甕片が1点出土している。　［三吉］

［SP-154］

1辺約30㎝隅丸方形で、深さ約20㎝。径約13㎝の柱痕（①層）が、西側に偏ってある。13は須恵器甕胴部片。外面はタタキ後カキメ調整、内面には青海波文が残る。図化した以外に、弥生土器ないし土師器片3点

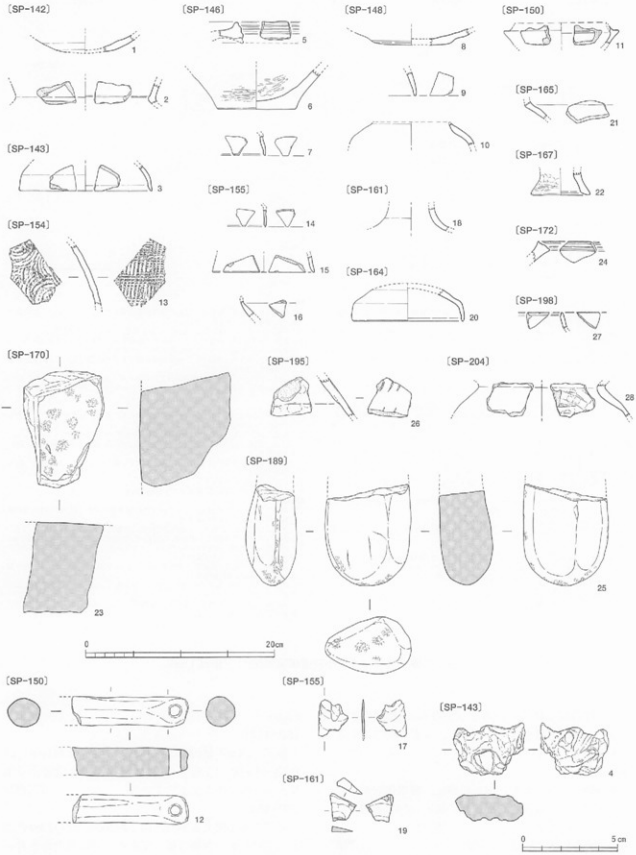


図56　古墳時代の柱穴・小穴出土遺物（縮尺1/4、1/2）

と、須恵器鉢の口縁部小片がある。　[三吉・山田]

[SP-155]

径65～70cmの円形で、深さ約17cmを測る。径約15cmの柱痕（①層）が、底の最も浅くなった中央部に残る。埋土中から弥生土器・土師器・須恵器片が約30点出土し、4点を図化した。14～16は須恵器。14は坏蓋の口縁部破片。天井部と口縁部の境は凹線状で、口縁内端部に段をもつ。6世紀前半。15は短頸壺の蓋口縁部。16は短頸壺。口縁端部は欠損する。17はサヌカイト剝片。厚さが1cm以下と薄い。　[三吉・山田]

[SP-161]

径約50cmに復元でき、深さ約25cm。①・②層から弥生土器・土師器・須恵器の小片約20点が出土している。18は須恵器高坏の脚部片。19はサヌカイトの剝片。側面に自然面を残す。19はSC-35埋土からの混入の可能性も考えられる。図化した以外の遺物を含めて、7世紀代に下る遺物は見られない。　[三吉・山田]

[SP-162]

径30cm前後の不整円形で、深さ約10cm。径約12cmの柱痕（①層）がある。遺物はない。　[三吉]

[SP-163]

径約45cm、深さ約35cm。①・②層から弥生土器・土師器の細片が10点弱出土している。　[三吉]

[SP-164]

径約70cmの隅丸方形で、深さ約35cm。①・②層から約50点の弥生土器・土師器・須恵器の小破片が出土。須恵器には古墳時代後期の高坏脚部片がある。図化したのは20の須恵器坏蓋。6世紀後半。　[三吉・山田]

[SP-165]

1辺45～65cmの隅丸長方形の掘り方で、深さは約10cm。弥生土器・土師器片が約10点出土し、21を図化した。土師器壺の肩部である。　[三吉・山田]

[SP-167]

1辺約20cmの隅丸方形、深さ約19cm。出土遺物は22の弥生土器1点のみ。上げ底の甕底部側縁が剝離した破片。端部に被熱痕がある。　[三吉・山田]

[SP-170]

約15×20cmの楕円形の掘り方をもち、深さ約8cm。出土遺物は23のみ。1面が残るのみの砂岩製の台石。使用面は、敲打痕が全面に残るが、平滑に磨かれている（図版20-3）。　[三吉・山田]

[SP-172]

幅約43cm、深さ約6cm。24は弥生土器壺の口縁部片で、口縁端部に凹線文が巡る。凹線文は上下の2条がやや深い凹線だが、その間の凹凸は微弱。後期前葉。図化したもの以外に弥生土器壺・甕片が3点ある。焼土を含んだ埋土を水洗選別したところ、炭化物小片やサヌカイト小片を得、種実1点はイネ炭化果実との同定がされている（詳細はⅡ-5-C参照）。[三吉・山田]

[SP-189]

約20×25cmの楕円形で、深さ約13cm。①～③層は、柱抜き取り後の流入土。弥生土器細片3点が出土し、柱穴検出面で25（R83）の砂岩製敲石が出土している。25は残存長10.7cm・最大厚5.4cm。先端を中心に、側面まで敲打痕が確認できる（図版20-4）。[吉田・山田]

[SP-195]

径約30cm、深さ約23cm。弥生土器・土師器の壺・甕片が約10点出土し、26を図化した。弥生土器壺の上胴部片で、「ノ字状押圧文が2段巡る。　[三吉・山田]

[SP-196]

約50×70cmの長楕円形に復元でき、深さは約15cm。埋土はいずれも水平堆積である。①～③層から弥生土器・土師器の細片が10点出土している。　[三吉]

[SP-198]

約40×50cmの長楕円形で、深さ約30cm。埋土最下部に復元径約20cmの柱痕（②層）が確認できる。約20点の弥生土器・土師器片が出土しているが、図化できたのは27の須恵器のみ。坏身口縁部で、口縁内端部に段をもつ。6世紀前半。　[三吉・山田]

[SP-202]

径38～48cm、深さ約33cm。埋土はほぼ水平な堆積。遺物は出土していない。　[三吉]

[SP-203]

復元約60～70cmの不整円形の掘り方で、深さ約40cm。南東隅部がさらに柱穴状に落ち込む。弥生土器ないし土師器片が約30点出土している。　[吉田]

[SP-204]

復元約40×70cmの不整楕円形を呈し、深さは約35cm。弥生土器ないし土師器片約10点が出土し、28が図化できた。土師器甕の胴部片である。　[吉田・山田]

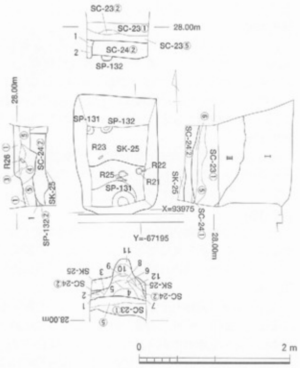
[SP-443]

径約50cmのやや隅丸方形状、深さ約36cmを測る。径約12cmの柱抜き取り痕があり、その流入土（②層）から、10cm強の円礫（R108）が出土している。[三吉]

（6）北3区の遺構と遺物（図57・58、図版20-5～7）

北3区は、本体調査区の西北西約16m、DA・DB16区に位置する調査区。電灯基礎設置に伴うもので、掘削範囲は約1.0×1.3m、完掘底面で約0.7×1.0mでしかない。したがって、掘削途中で明確に遺構を区分することは難しく、焼土層の広がりなどを一部で確認した程度で、他は完掘後、土層の精査によって遺構の峻別を行った。

まず、地表下約1.0mまでは城北団地基本層序Ⅰ・Ⅱ層であり、以下標高28.05m以下が攪乱を受けていない土層となる。小礫をわずかに、炭化物をまばらに



Ⅱ層：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。5～10㎜大の小礫を少量含む。粘性がややある。きめが細かい。

SC-23

①：黒褐（10YR3/2）砂質土。北東と南東隅に黒褐（7.5YR3/1）砂質土が混じる。2～3㎜大の小礫をわずか含み、5～10㎜大の炭化物をまばらに含む。ややしまりがある。

②：黒褐（10YR2/3）砂質土。3～5㎜大の小礫をわずか含む。1㎝大の炭化物を少量含み、1.5㎝大ほどの焼土が混じる。①層よりもしまりあり。

③：黒褐（7.5YR3/2）砂質土。礫をほとんど含まず、5㎜大の炭化物を多く含む。1㎝大の焼土を多く含む。

④：黒褐（7.5YR3/2）砂質土。礫をほとんど含まず、③層よりきめが細かい。5～10㎜大の炭化物を多く含む。

⑤：黒褐（10YR2/3）砂質土。3～5㎜大の小礫が若干見られるが、礫はほとんど含まない。1～2㎝大の焼土を多く含む。1㎝大の炭化物をやや多く含む。きめが細かく、しまりあり。黒褐（7.5YR3/1）砂質土が、北東・南西・南東隅に混じる。

⑥：黒褐（10YR2/2）砂質土。やや粘性がある。礫はほとんど含まない。5㎜大の炭化物を多く含む。1㎝大の焼土をやや多く含む。

SC-24

①：黒褐（10YR3/2）砂質土。やや粘性がある。暗褐（7.5YR3/4）砂質土がまだらに混じる。礫はほとんど含まない。

②：黒褐（10YR3/2）砂質土。やや粘性がある。礫はほとんど含まない。5～10㎜大の炭化物を多く含む。1～2㎝大の焼土をやや多く含む。きめは細かい。

SK-25

黒褐（7.5YR2/2）砂質土。粘性があり、下部ほど粘性を増す。礫はほとんど含まない。3㎝大の暗褐（7.5YR3/4）砂質土をブロック状に含み、西側ではまばらに含む。きめは細かい。

SP-131

1：黒褐（10YR2/3）砂質土。粘性が高い。礫をほとんど含まない。15㎜大の暗褐（7.5YR3/4）砂質土をブロック状に含む。きめは細かい。

2：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。しまりはない。やや粘性のある黒褐（10YR2/2）砂質土を、5㎝大のブロック状に含む。礫はほとんど含まない。

3：黒褐（10YR2/3）砂質土。粘性がやや高い。礫をほとんど含まず、きめ細かい。

4：極暗褐（7.5YR2/3）砂質土。粘性がやや高い。礫をほとんど含まず、きめ細かい。灰黄褐（10YR4/2）砂質土を5㎝大のブロック状に含む。暗褐（7.5YR3/4）砂質土がまばらに混じる。

5：やや粘性のある黒褐色（10YR3/2）砂質土と、暗褐（10YR3/4）砂質土がまだらに混じる。礫はほとんど含まず、5㎜大の炭化物をやや多く含む。

6：黒褐（10YR3/2）砂質土。粘性がやや高い。礫をほとんど含まず、きめ細かい。1㎝大ほどの炭化物をわずかに含む。

7：やや粘性のある黒褐（10YR3/2）砂質土と、暗褐（10YR3/4）砂質土がまだらに混じる。礫はほとんど含まず、5㎜大の炭化物をやや多く含む。

8：黒褐（10YR3/2）砂質土。粘性がやや高い。礫をほとんど含まず、きめ細かい。暗褐（7.5YR3/4）砂質土がまばらに混じる。

9：黒褐（7.5YR3/2）砂質土。粘性が高い。礫をほとんど含まず、きめ細かい。

10：黒褐（7.5YR3/2）砂質土。粘性が高い。礫を含まず、きめ細かい。5㎜大ほどの焼土をわずかに含む。1㎝大の暗褐色（7.5YR3/4）砂質土がまばらに混じる。

11：黒褐（7.5YR3/2）砂質土。粘性が高い。2～3㎝大の暗褐（7.5YR3/4）砂質土をブロック状に含む。礫をほとんど含まず、きめ細かい。

12：黒褐（7.5YR2/2）砂質土。粘性が高い。黒褐（7.5YR3/2）砂質土と暗褐（7.5YR3/4）砂質土がまだらに混じる。礫はほとんど含まない。1㎝大の炭化物をわずかに含む。

SP-132

極暗褐（7.5YR2/3）砂質土。粘性がややある。礫を含まず、きめが細かい。5㎜大の炭化物をわずかに含む。3㎝大の暗褐（7.5YR3/4）砂質土をブロック状に含む。

SP-133

1：黒褐（7.5YR3/2）砂質土。粘性がやや高い。礫をほとんど含まず、きめ細かい。1㎝大の炭化物をわずかに含む。

2：黒褐（7.5YR3/1）砂質土。粘性ややある。礫をほとんど含まず、きめ細かい。1㎝大の炭化物をわずかに含む。5㎜大の焼土をわずかに含む。

図57　北３区遺構実測図（縮尺１/50）

含む黒褐色砂質土が15㎝前後堆積し（①層）、以下には炭化物・焼土を多く含む土層が10㎝前後堆積している（⑤層）。下部の炭化物・焼土混層は面をなすこともあり、床面近くに堆積した土層とみられる。一部、土層（⑥層）が落ち込むものの、標高27.8mで底面はほぼ水平となり、これを床面と判断し、SC-23とした。壁面の精査から、この床面から掘り込まれた柱穴・小穴として、SP-131・133を確認できる。

標高27.8m以下、北壁で20㎝弱の厚さで、黒褐色砂質土が堆積する。やや粘性があり、礫はほとんど含まず、きめが細かい。炭化物・焼土をやや多く含む層である（②層）。底は標高約27.60mで水平な面をなし、これが床面と判断し、SC-24とした。床面からは、北壁際でSP-132が掘り込まれ、南側で10㎝前後の落ち込みが認められ、SK-25とした。埋土は、粘性のある黒褐色砂質土である。

SC-23出土遺物は、SC-23下部の炭化物・焼土混層を中心に出土しており、取り上げ時には、一部SC-24出土としたものも含む。１～６を図化した。いずれも、SC-23下部の炭化物・焼土混層出土で、５（R26）が調査区西壁③層出土。１は弥生土器底部。小型で外方にしっかり踏ん張り、鉢と推定される。２・３は須恵器。２は坏蓋口縁部。６世紀後半。３は小型の脚部。内外面に自然釉が被る。４・５は土師器甕。４（R25）は頸胴部の屈曲が緩やかで、外に縦方向のハケ目が一部残る。外面はよく被熱する。６世紀代か。５は甕口縁部。口径23㎝と大型。頸部の屈曲はやや緩やか。かなり火熱を受けている。６世紀代。６（R23）は鉄器、刀子状の鎌とみられ、緩やかな関部をもつ。この他に、図化できなかったが、R21は土師器甕胴部、R22はウシ臼歯片。さらに、焼土層からは、水洗選別により骨小片や炭化物小片が比較的多く出土しており、イネ炭化果実片の同定結果を得ている（詳細はⅡ－５－Ｃ・Ｄ参照）。

４・５など、やや６世紀代でも前半に遡る可能性のある遺物もあるが、後述する下部のSK-25出土遺物が確実に６世紀後半まで下がることから、SC-23も６世紀後半に下がることになる。

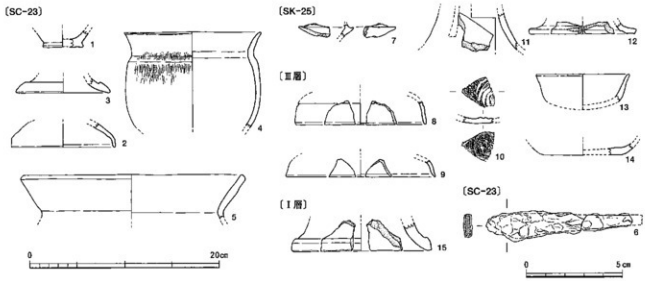


図58　北３区出土遺物実測図（縮尺１/４、１/２）

SC-24出土遺物で図化できるものはなかったが、土師器甕胴部細片がある。また、床面からは骨小片を水洗選別により得ている。

SK-25出土遺物からは１点を図化した。７は須恵器坏身の受け部片。立ち上がりを欠くが、あまり上方には延びないと推測でき、６世紀後半。他に須恵器甕胴部などが出土している。また、骨あるいは貝の小片、炭化物小片を水洗選別により得ている。

他、遺構では、SP-131から土師器の細片と炭化物小片が出土している。

８～14は北３区Ⅲ層出土として取り上げた遺物。SC-23の焼土層以上にあたり、SC-23埋土にほぼ相当するが、一部中世の遺物も混じる。８～13は須恵器。８・９は坏蓋。８は天井部から口縁部への転換部に、凹線がめぐる。６世紀中頃。９はやや大型で低平。６世紀後半。10は坏身底部片。内面に青海波文がみられる。11は高坏脚部。長脚２段の下段部とみられ、方形透かしの一端を確認できる。12は高坏脚端部。13は小型坏身。口縁部が外反する。14は中世土師器の坏底部で、回転糸切り痕が見られる。

15はⅠ層出土遺物。須恵器の脚端部である。

［吉田・山田・濱田］

C　Ⅲ層の調査と出土遺物

（1）遺物の出土状況

後論するSD－1等の、城北団地基本層序であるⅢ層上面で検出した遺構の調査を終えた後、Ⅲ層を城北団地区割に従い、1ｍ方眼単位で掘り下げを行った。Ⅲ層の堆積に比例して、調査区東部で遺物の出土は少なく、中部から西部でやや多くの遺物が出土した。とりわけ、調査区北西端部で多く、CX14－3・4区のⅢ層上部では、土師器甕（37）と輪羽口（38）が重なるように出土してもいる（図59、図版11－3・4）。

また、Ⅲ層掘削段階で、調査区北西部においては、西側に落ちる南北方向の落ち方ラインが明確に現れた。しかし、その西方では遺構の切り合い関係を同じレベルでは検出できず、このラインから西側を、Ⅲ層下部あるいは判別不能の遺構埋土群として、遺構検出のできるレベルまでの間を、SX－32として掘り下げることとした。遺物の取り上げは、Ⅲ層同様1ｍ方眼単位である。結果的には、約10cm程度の深さをSX－32として掘り下げたことになり、先記した南北方向の落ち方ラインは、SD－33の東側立ち上がりであることが判

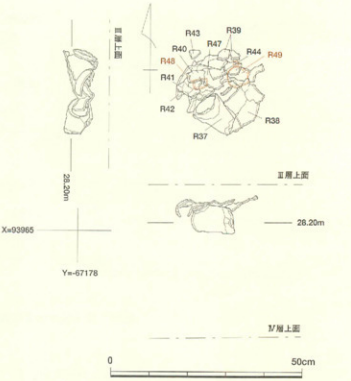


図59　CX14区Ⅲ層内遺物出土状況（縮尺1/10）

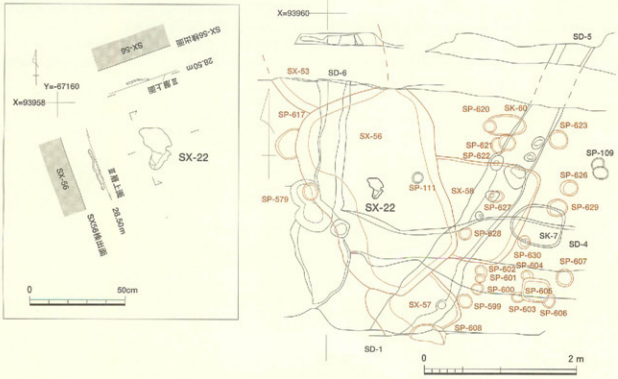


図60　SX－22位置図（縮尺1/50、1/20）

明した。出土遺物については、細片が多く、量も少ない。基本的に弥生土器に限られ、須恵器は全く認められない。

他方、南東部のCT12区でⅢ層掘削中に、鉄分塊を検出した。鉄分塊は平面半月形を呈し、厚さは1㎝前後で、東側がやや高くなる。表面には気泡状の凹凸が見られる（図版11－5・6）。当初、何らかの鉄器生産に関わる遺物・遺構の可能性を考えてSX－22とし、掘り込みラインの確認を目的として周辺の精査を行った。しかし、掘り込み面・ラインなどは確認できなかった。その後、Ⅲ層を約15cm掘り下げたが、炭化物や焼土なども見られず、Ⅲ層中に鉄分塊と関連する遺構は存在しないと判断し、鉄分塊SX－22を取り上げた。Ⅳ層上面における遺構検出の際、SX－22下部にあたる地点で精査を行ったところ、SX－56を検出した（図60）。ただし、SX－56は、旧地形の落ち込みや木の根に伴う落ち込みの可能性が考えられ、人工的な掘り込みによるものではない。またSX－56埋土観察では、木の根などの影響を受けたと考えられる層序の乱れが見られる。

SX－22とSX－56との関係については、SX－22検出時の詳細な観察からして、SX－56の掘り方が、SX－22検出レベルまで上がる可能性は低い。このことは、SX－56の遺構立ち上がりが明瞭でなく、緩やかなことからも裏付けられる。以上の点から、SX－22とSX－56との直接的な関連性はないものと考える。

SX－22の表面は金属質で、凹凸が著しく、一見、鉄滓に類似した外観を呈する。表面には10箇所程度、円孔が認められるが、その孔は深く、管状になると思われる。ソフトX線を照射して観察した結果、それら以外にも多くの円孔が認められた。断面は表面が金属質に硬化しているものの、その下層はきめの細かい粒子で明黄褐色を呈している。

これは一般的には沼沢地で鉄バクテリアやマンガンが沈殿して生成されるものであり、アシやヨシといった植物の茎を核として成長した褐鉄鉱であると考えられる。

周辺には、12世紀段階に埋没するSD－4～6がⅢ層上面に展開し、SD－5・6は、北東から南西の方向に展開する。SX－22は北東側が優張、南西側が劣弧を呈し、流水が北東から南西にのびる状況が窺える。SX－22上面にもSD－4～6と相前後する時期の溝が展開していた可能性が考えられ、それに伴う褐鉄鉱と考えられる。　［吉田・三吉・村上］

（2）出土遺物

①　Ⅲ層出土遺物（図61・62、図版21・22）

Ⅲ層出土として取り上げた遺物は、コンテナ約5箱分に及ぶ。これらから、63点を図化した。

1・2は縄文土器の浅鉢口縁部。1は直線的に外方へ開き、内面には段を有する。内外面横ナデ調整の後、縦方向のミガキ。胎土中には角閃石を含み、搬入品の可能性も考えられる。32も浅鉢口縁部。端部を外側に三角形状に肥厚させる。胎土は1にほぼ同じで、赤色塗彩の可能性がある。

3～36は弥生土器。3～7は端部に凹線文を施す壺口縁部で、いずれも中期後葉。3は復元口径22.0㎝を測る大型。口縁端部には稜の強い5条の凹線文が巡る。4は磨滅で消えかけているが、3条の凹線文を確認できる。5は3条の凹線文を施し、凹線文の始点と終点の重なりが残る。6は頸部まで残存し、口縁部には稜の強い3条の凹線文が巡り、浮文の剥落を確認できる。頸部内面には同じ高さで連続する指頭圧痕が残る。7も頸部まで残り、口縁端部に3条の凹線文が巡る。頸部内面にはシボリ痕がある。

8～10も壺口縁部であるが、凹線文は認められない。8・9はいずれも短く外反する口縁部で、内外面横ナデ調整。9は口縁端部に強い横ナデを施し、端部が凹線状に窪む。後期前葉。10はやや長頸。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。後期前葉。

11は壺の頸部。外面に2条の断面三角形の突帯を貼り付ける。中期中葉。12は壺の頸部から上胴部。横ナデを施す頸部とハケ目を残す上胴部の境に、米粒状の刺突文を1列施す。中期後葉。13も壺の頸部から上胴部。頸部外面に断面三角形状の突帯を貼り付ける。中期中葉。14～16は壺の胴部片。14は外面縦方向のハケ目調整の後、クシ描きの波状文＋直線文＋波状文を施す。時期は施文から、中期中葉と比定できる。15は、外面ハケ目の後、「ノ」字状押圧文を施す。中期後葉。16も壺胴部。外面下半部に縦方向のミガキ、胴部最大径部分に横方向のミガキを加える。内面は斜め方向の粗いハケ目調整。色調は白っぽく、やや胎土も異なる。中期中葉から後葉。

17～22は壺底部でいずれも平底。17は外面に幅広の横方向のミガキを施す。18は底部側面付近に横方向のミガキ、その上を縦方向のミガキ。19は焼成があまく、磨滅が著しい。20はやや急に立ち上がるが、底径16.0㎝と大型で壺とした。外面は縦方向のミガキ、内面には指頭圧痕が残る。21は、外面に縦方向のミガキと横ナデによる調整を施す。22は、外面は斜め方向のミガキ。底部が薄く、立ち上がりもやや急で、甕の可能性もある。

23～31は甕。23は口縁部から胴部が残る。口縁部は内外面とも横ナデによる調整。中期後葉。24も口頸部で、口縁端部にハケ目調整がみられる。25は甕の胴部片。胴部外面に「ノ」字状押圧文を施す。外面は全体的

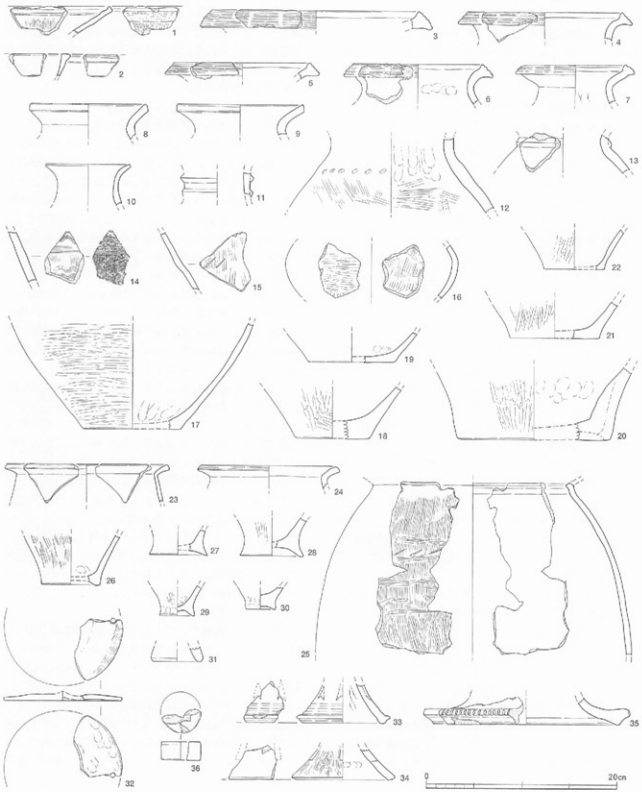


図61　III層出土遺物実測図(1)（縮尺 1 / 4 ）

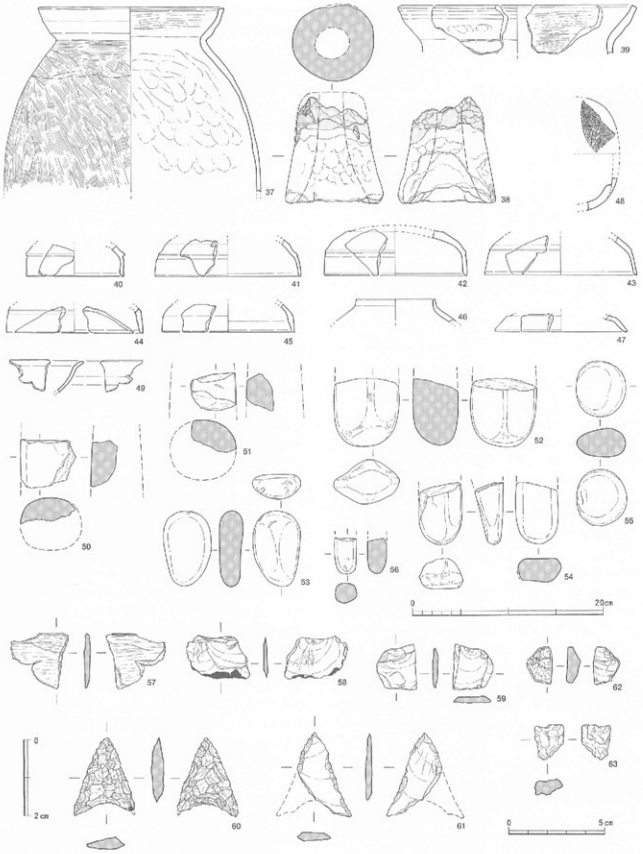


図62　Ⅲ層出土遺物実測図2)（縮尺1/4、1/2、1/1）

図63　SX−32出土遺物実測図（縮尺1/4）

に縦方向のハケ目調整の後、上半に数段に分けて散発的に横方向のミガキを加え、下半は縦方向のミガキを密に重ねる。内面は縦方向のケズリ後、斜め方向のナデにより、ケズリの痕跡は大部分が消されている。頸部には内外面に強い横ナデが施されている。26～31は底部で、いずれも上げ底。26は外面をハケ目調整。28は外面に若干の縦方向のミガキが確認できる。29・30は小型で、ミニチュアの可能性もある。31は上げ底の高台状部のみ。

32は壺の蓋か。復元径は12.4㎝。外縁付近に焼成前の円孔が残る。外面外周はハケ目が見られ、内面はユビオサエ痕が残る。胎土はやや粗い。

33・34は高坏脚部。33は貫通しない矢羽透かしを施し、脚裾部に3条、端部に1条の凹線文を施す。中期後葉。34は方形透かしが2箇所残る。外面は縦方向のミガキ、内面横ナデ。35は台付鉢の脚端部か。外面は横ナデを施し、端部を刻む。36は小型ながら中実タイプの支脚か。

37～39は土師器あるいは土製品。37・38は、図59に示すように、CX14−3・4区のⅢ層上部から、重なるように出土した。なお、37・38出土に伴い、周辺の土壌を採取し水洗選別を行ったが、微細遺物として骨片や炭化物、結晶片岩等の小片は得たが、鉄滓や鉄小片は得られていない。37は土師器甕上半部。口縁は、内湾しながら外方へ開く。口縁部内外面は横方向のハケ目調整の後、横ナデ。胴部は外面ハケ目調整で、内面がナデによる調整、指頭圧痕をよく残す。なお、胴部外面の頸部から4㎝程以下に煤が付着している。古墳時代中期後葉と考えられる。38は輪羽口。外面に指頭圧痕を顕著に残す。内面は底部付近に指頭圧痕を残すが、上半部は平滑で、心棒に粘土を巻きつけて製作したと考えられる。上半部は被熱により灰色から青灰色に変色し、一部では赤変して表面がガラス状に熔融している箇所もある。39も土師器甕の口縁部で、復元口径24.0㎝と大型である。やや内湾しながら外方へ長く開き、端部は明確な面をもつ。内外面を横方向のハケ目調整し、外面は横ナデを加える。古墳時代後期。

40～48は須恵器。40～45は坏蓋口縁部。40は外面の稜の突出が明瞭で、口縁内端部に段をもつ。5世紀末から6世紀初頭。41も40ほどではないが、外面の稜が明瞭で、口縁内端部に段をもつ。外面回転ヘラケズリの範囲も広い。6世紀前葉。42・43は、外面の稜がややあまいが、口縁内端部に段をもつ。6世紀前半。44は口縁内端部の段は残るが、外面の稜は凹線化している。6世紀前半から中頃。45は外面稜が緩やかな屈曲の転換部として残る程度で、口縁内端部の段もない。6世紀中頃。46は短頸壺の口縁部。47は鼈付壺の脚部か。外面屈曲部は凹線状に窪む。48は横瓶の胴部片。成形時の円盤閉塞を確認できる。

49は土師器椀の端反り口縁部。9世紀代。

50～62は石器。50・51は伐採斧。ともに円柱状体部の一部が残るのみ。50は断面やや扁円形で、表面の仕上げが粗い。淺黄色の砂岩製。51は断面円形に近く、表面も丁寧に仕上げられている。石材は灰白色の火成岩質。52～56は磨石。52は横断面菱形。敲石としても使用されており、各面に敲打痕が若干残る。砂岩製。53は3面を使用し、端面には一部敲打痕が残る。砂岩製。54も3面を使用し、端面に一部敲打痕が残る。砂岩製。55は扁円板状で、2面を使用する。砂岩製。56は円柱状の磨石。細い砂岩製。57は結晶片岩の剥片。58・59はサヌカイトの剥片。58は側面に自然面が残り、残核の可能性も考えられる。59は1面に打瘤を確認できる。60・61はサヌカイト製の凹基無茎式打製石鏃。60はほぼ完形で、長2.05㎝・幅1.55㎝を測る。中央まで調整が及び、厚みもある。61は、片側かえりを欠損する。微細剥離は側辺に限られ、中央部には素材獲得時の痕跡をよく残し、横断面も扁平。CU14−2区で出土し、下部ではSX−51を検出している。62は瑪瑙の残核。1面には自然面が残るが、他はリング・フィッシャーが顕著。16次調査で、穿孔の一端が認められる同様の石材が出土しており、玉作素材の可能性が高い。

63は鉄滓。現重量4.7g。

なお、CU13−24・25区のSX−50の上面Ⅲ層から粘土の塊が出土している（図31、図版10−1）。粘土は、

明黄褐色粘質土。砂礫は一切含まない。厚さ最大で5cm程の粘土が、40×50cmの範囲に、「C」字状に広がる。粘土の周りに、遺物・遺構らしきものはないが、周辺のⅢ層中に砂礫をほとんど含まず、古墳時代後期以前のものと考えられる。　［三吉・山田］

②　SX-32出土遺物（図63）

調査区北西部のⅢ層下部をSX-32としたが、出土遺物は少ない。その中から5点が図化できた。下部の遺構との対応については、1・3が、CX13区のSD-33の西側に連なる落ち込み部分、2はSD-37、4・5がSD-33北部にあたり、本来それぞれの遺構に伴った可能性が考えられる。

1～4は弥生土器。1は壺の頸部片である。頸部に断面三角形状の突帯を貼り付け、内面には横方向のミガキがある。中期中葉。2は甕口縁部片で、頸部の屈曲が鋭い。中期中葉から後葉。3は甕底部片で、上げ底。4は高坏脚部で、脚部に方形透かしがある。外面縦方向のミガキ。Ⅲ層出土の34と同一個体の可能性がある。5は砂岩製の磨石。表裏両面と2側面を使用するが、側面には敲打痕がよく残る。　［吉田・山田］

（3）北2区の調査（図64、図版10-6）

北2区は、北3区と同様、電灯基礎新設に伴う調査区である。本来なら、別に報告するべきところであるが、実際にはわずかにⅢ層が検出できたに留まったため、ここで記述を行うこととした。

北2区は、本体調査区北壁から北に約4m離れた、CV15・16区に所在する、南北約1.2m・東西0.7mの調査区。中央部にヒューム管が南北に走り、西壁のみ、辛うじてⅡ～Ⅳ層が残存している。Ⅲ層は、厚さ約40cmを測る。出土遺物は土師器片4点、須恵器片1点である。土師器片のうち1点は、古墳時代中期～後期の土師器甕肩部片と考えられる。その他は小片であり、時期などについては不明である。須恵器片は、6世紀代の須恵器の壺類の口縁部と考えられる。遺構検出ラインは調査区内で確認できていないが、遺構埋土中である可能性も考えられる。　［三吉］

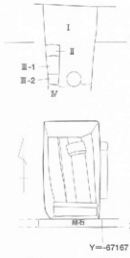


図64　北2区実測図（縮尺1/50）

D　古代以降の遺構と遺物

（1）遺構の分布（図65、図版12）

城北団地基本層序であるⅢ層の上で検出された、あるいはⅣ層の上ながらA類型の埋土をもち、古代以降の遺構と判断したのは、溝8条（SD－1～6・64・71）、土壙6基（SK－7・9・11・12・17・21）、その他の遺構6基（SX－13～16・19・26）、そして柱穴・小穴31基である。

この時期の主要な遺構は、調査区南部を東西に横断するSD－1～3の溝である。西へは13次調査のSD－3に連なり、東側でも27次調査のSD－3・4に連なると考えられ、東西方向に直線的に約150mを確認できていることになる。この他は極めて散在的で、SD－1等に先行するとみられるSD－4～6が北東部に、逆にSD－1～3を切るSX－14他が、やや南西部に偏ってある程度である。［吉田］

（2）溝

調査区南半では、Ⅰ・Ⅱ層下で流路内堆積層を確認した。幅は6m前後。平面検出・断割等により、平行する3単位の流路内堆積であることが判明した。調査段階では流路（SR）と認識し、遺物の取り上げ等を行ったが、ほぼ東西に直線的であることや逆台形に近い断面形状等から、人工的な溝と判断し、SDとした。溝底レベルや旧地形から、東から西への水流である。南北に切り合い関係のない状態で2条の溝が平行し、ちょうどその間に、もう1条の溝が先行して存在する。北側の溝をSD－1、南側をSD－2、これらに先行する中間の溝をSD－3とした（図66・67、図版13－3・4）。さらに、一部SD－1と認識していた部分を、SD－71として後に峻別している。なお、西側の13次調査ではSD－3と一括される溝が、20次調査のこれらの溝群に相当する。［吉田］

①　SD－1（図66～71、図版13－3・4）

SD－1は、X＝93955をほぼ主軸にとる東西方向の溝。東は調査区端から、西は撹乱で不明となる、およそY＝－67173辺りまでの長さ約25mを確認できる。基本的に底幅1m内外で、深さ40cm前後を残す逆台形。底のレベルは、底面に水流に伴うとみられる凹凸が少なくないが、東端で約28.05m、西端で約27.9mと西に傾斜する。また上端幅は、後の撹乱で一定しないが、およそ1.5m内外である。当初、Y＝－67163以西で、北側にSD－1最終埋没溝が薄いながらも広がり、西端ではX＝93958辺りにまで及ぶと認識していたが、これはSD－71として後に峻別した堆積にあたる平面規模に相当する可能性が高い。一方、東半北岸には、SD－4とした粗い砂粒で最終的に埋没する溝があり、北側から南流するSD－5・6に連なっている。SD－1がこれらを切る関係にあるようである。なお、西側の13次調査ではSD－3と一括される溝の①～⑥層が、この20次調査SD－1に相当するとみられる。

SD－1埋土は、上・中・下層に区分でき、遺物の取り上げも以下の分層と主に東西方向の区割に従った。ただし、各層間の接合関係がかなりある。上層は、基本的に0.1mm未満の砂粒からなる砂質土で、しまりがややある。色調はにぶい黄褐色から灰黄褐色。中層は、含む砂礫が3mm未満にまでなり、上層に比べて砂質もやや粗くなる。色調は灰黄褐色から褐灰色。下層は、さらに粒度が大きくなった砂礫層。しまりも弱くなる。

SD－1からは、コンテナ約3箱分の遺物が出土し、その中から95点を図化した。

1～11は弥生土器である。1は大型壺の口縁部。頸部は緩やかに外反して口縁部となる。口縁下端を三角形状に肥厚させ、4条の凹線文を施し、その上に山形文を施す。頸部には、口縁部直下から5条以上の、幅広で浅い凹線文B種が認められる。搬入品と考えられるが、口縁部の山形文は吉備の後期前半の壺に認められるものの、口縁直下からの凹線文はむしろ器台である。2は壺口縁部で、上下に肥厚させた端部に3条の凹線文を施す。3は壺頸部で、屈曲部に押圧突帯が巡る。4・5は壺の底部。4は平底。5は緩やかな上げ底を呈し、体部は球形状に張るらしい。6は甕体部片で、やや浅い多条ヘラ描き沈線と、その下に連続刺突文が2列ある。前期末。7は上げ底状の甕底部。8は高坏の脚柱部である。上半部は中実で、内面にしぼり痕が若干残る。9は脚裾部。上げ底甕の底部にしては高く、支脚とみられる。10は器台の胴部。上下は緩やかに広がり始め、あまり器高は高くなかったことが窺える。下方の屈曲部に円形透孔の一端が認められる。11は把手部分で、あるいは古墳時代に下がる可能性もある。

12は土師器甕の口縁部。横ナデによる粘土のはみ出しを外側に巻き込んでいる。

13～31は須恵器。13～19は坏身口縁部。13は端部を欠損するが、高い立ち上がりを有し、5世紀末から6世紀初頭。14は立ち上がりを欠くが、深みがあり、6世紀中頃と推定される。15～17は器高が浅く、立ち上がりも短く、6世紀後半。18は立ち上がり端部を破損するが、受け部外面はナデによる窪みが顕著。19は立ち上がりをわずかに内傾させ、端部を丸く収める。と

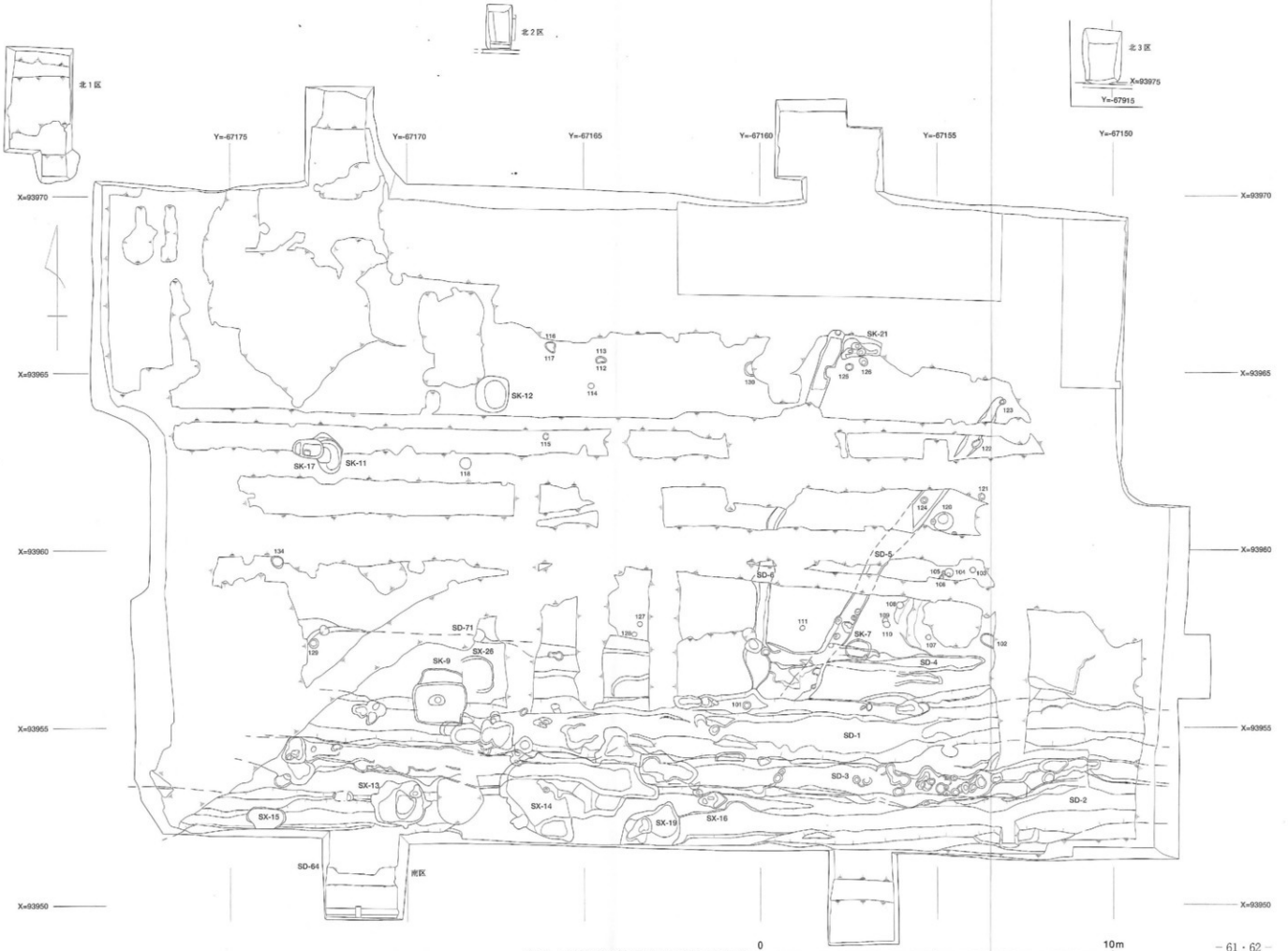


図65　古代以降の遺構配置図（縮尺1/100）

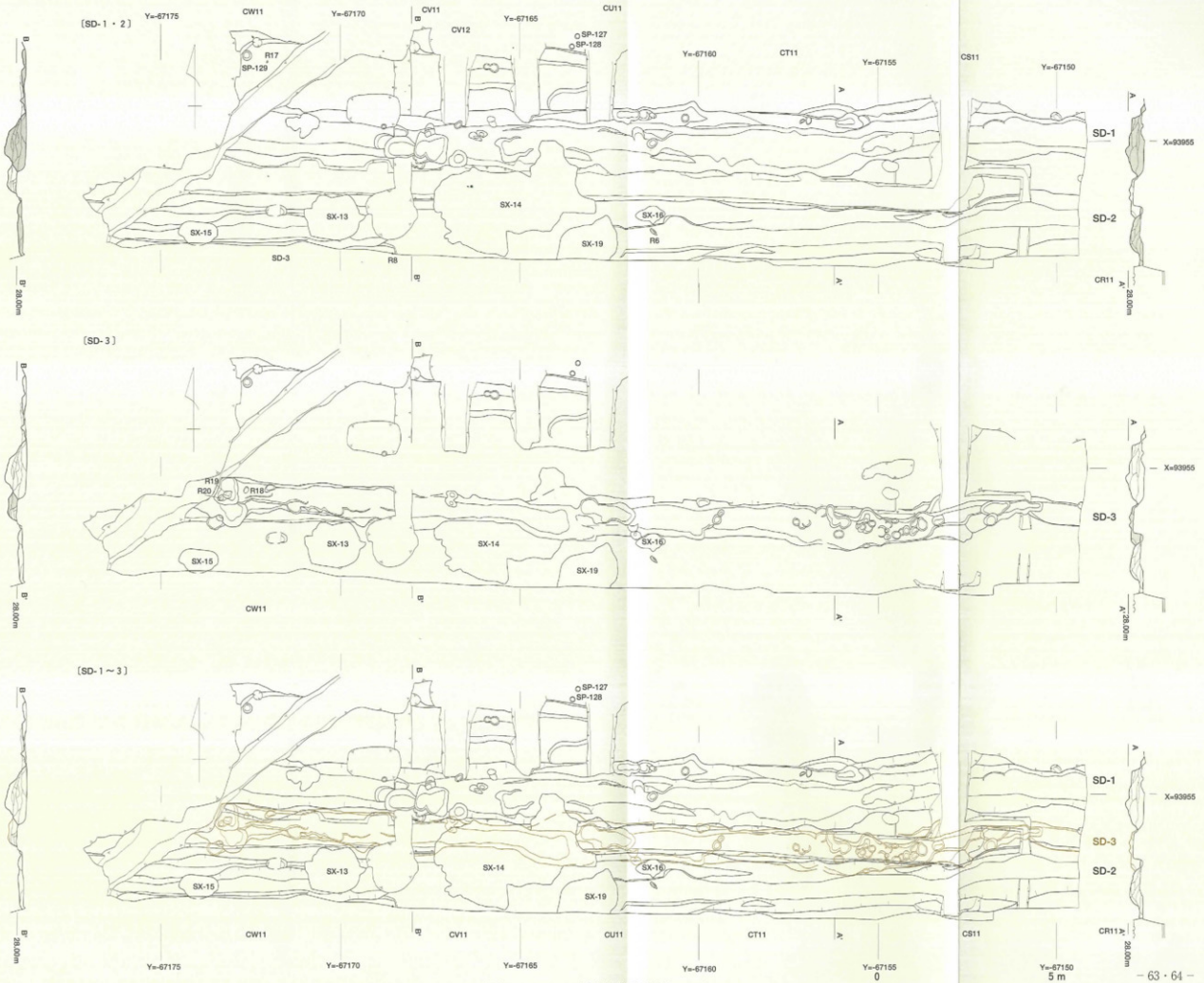


図66　SD－1～3遺構実測図（縮尺1/100）

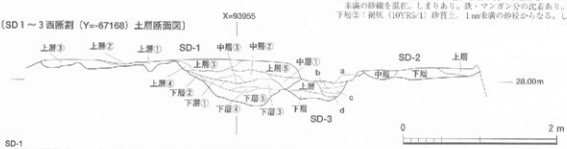
〔SD 1 ～ 3 東断割（Y=-67156.2）土層断面図〕

SD-1
上層：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。1㎜未満までの砂粒を含み、1㎜前後の暗褐色土、にぶい黄色土の小ブロックを含む。ラミナ状の砂層の堆積あり。しまりややあり。
中層①：褐灰（10YR5/1）砂質土。3㎜未満の砂礫を多く含む。1㎝大の砂礫も混じる。
中層②：褐灰（10YR4/1）砂質土。0.1㎜未満のきめの細かい砂質土に、0.5㎜大のやや細い白色砂粒や2㎜未満の砂質土層がラミナ状に嵌入。しまりあり。
中層③：褐灰（10YR4/1）砂質土。
下層①：褐灰（10YR4/1）砂礫。2㎜未満の砂粒をベースに10㎝大までの礫を多く含む。しまりややあり。遺物を多く含む。
下層②：褐灰（10YR4/1）砂質土。幅3㎜未満の褐灰色砂質土層とにぶい黄色土層とが互層状に堆積。しまりあり。
下層③：褐灰（10YR4/1）砂礫。3㎜未満の砂礫層。1㎝前後の礫も見られる。

SD-2
上層①：褐灰（10YR4/1）砂質土。3㎜未満の砂礫を含み、しまり強い。鉄・マンガン分の沈着あり。
上層②：褐灰（10YR5/1）砂質土。上層①よりさらに、砂礫の混在が多く、砂層がラミナ状に嵌入。
中層①：灰黄褐（10YR6/2）砂層。2㎜未満の砂粒からなる。しまり弱い。
中層②：褐灰（10YR5/1）砂質土。2㎜未満の砂粒層をラミナ状に嵌入。しまりあり。粘性ややあり。
中層③：褐灰（10YR5/1）砂質土。2㎜未満の砂粒。しまりなし。
中層④：褐灰（10YR5/1）砂質土。中層③に近いが、やや粘性低い。砂粒もわずかに細かい。
中層⑤：褐灰（10YR4/1）砂質土。0.1㎜未満のきめの細かい砂質土の堆積。
中層⑥：灰黄褐（10YR5/2）砂質土。にぶい黄色土をラミナ状に含む。やや粘性あり。
下層：褐灰（10YR4/1）砂礫層。5㎜未満の砂礫を含む。ベースは2㎜前後の砂粒。しまり弱い。

SD-3
上層：褐灰（10YR4/1）砂質土。砂粒細かく均質。
下層①：褐灰（10YR5/1）砂礫層。3㎜未満の砂礫層をベースに砂質土や1㎝未満の砂礫を混在。しまりあり。鉄・マンガン分の沈着あり。
下層②：褐灰（10YR5/1）砂質土。1㎜未満の砂粒からなる。しまり弱い。

〔SD 1 ～ 3 西断割（Y=-67168）土層断面図〕



SD-1
上層①：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。0.1㎜未満の細かい砂粒からなり、にぶい黄色土のブロックを含む。粘性ややあり。
上層②：にぶい黄褐（10YR5/3）砂。3㎜未満の砂礫層。しまりややあり。
上層③：にぶい黄褐（10YR5/4）砂質土。0.1㎜未満の砂粒層及びシルト層からなるが、3㎜未満の砂粒を比較的多く含み、しまり強い。
上層④：暗褐（10YR3/4）砂質土。上層③に比べて暗褐色土が斑状に混じる。さらにしまり強い。
上層⑤：にぶい黄褐（10YR5/4）砂質土。上層③に比べ、3㎜未満の砂礫の混在あり。
中層①：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。0.1㎜未満の細かな砂粒をベースに3㎜未満の砂礫がやや多く混じる。しまりあり。
中層②：灰黄褐（10YR5/2）砂質土。0.1㎜未満の細かな砂粒がベース。白色の砂層がラミナ状に嵌入。3㎜未満の砂礫も比較的多く含む。
中層③：灰黄褐（10YR6/2）砂質土。中層①・②層に比べて0.2㎜前後と砂粒がやや粗い。3㎜前後の砂礫は含まない。
下層①：にぶい黄褐（10YR5/3）砂質土。細かい砂粒層に、3㎜未満の砂礫層が嵌入。
下層②：にぶい黄褐（10YR4/3）砂質土。下層①の粗い砂粒の混在がなく、暗褐色土の小ブロックがわずかに混じる。
下層③：褐灰（10YR5/1）砂礫。0.5～1㎜程度の砂粒をベースに5～10㎜大の砂礫が多く混じる。
下層④：褐灰（10YR6/1）砂礫層。1㎜前後の砂粒をベースに5㎜程度までの砂礫混在。
下層⑤：褐灰（10YR6/1）砂層。1～2㎜前後の砂粒がラミナ状に堆積。しまり弱い。

SD-2
上層：褐灰（10YR4/1）砂質土。0.1㎜未満の細かい砂粒からなり、ラミナ状に粘質土混在。
中層：褐灰（10YR5/1）砂質土。1㎜未満の砂粒層を多く含み、にぶい黄色土をラミナ状に嵌入。しまりあり。
下層：褐灰（10YR5/1）砂礫土。3㎜未満の砂礫をベースに1㎝大までの礫を多く含む。しまり弱い。遺物多く含む。

SD-3
上層：暗灰黄（25Y5/2）砂質土。0.1㎜未満の細かい砂粒からなりわずかに粘性あり。
下層：灰黄褐（10YR4/2）砂礫層。0.5㎜未満の砂粒をベースに3㎜前後の砂礫を多く混在。
a～dはSD-3埋土を切る。SX-14の焼きか？
a：褐灰（10YR5/1）砂礫層。0.5㎜未満の砂粒をベースに、1㎝未満の砂礫が混じる。しまり弱い。
b：灰黄褐（10YR4/2）砂質土。SD-3上層に近似。わずかに3㎜未満の砂礫の混じりあり。
c：褐灰（10YR4/1）砂質土。0.1㎜未満の細かい砂粒層に粘質土が薄くラミナ状に堆積。粘性あり。
d：褐灰（10YR5/1）砂礫層。1㎜未満の砂粒をベースに3㎜大の砂礫を多く含む。しまり弱い。

図67　SD－1～3土層断面図（縮尺1/50）

もに7世紀初頭。20は坏蓋口縁部で、非常に弱いかえりを有する。7世紀初頭から前葉。21～23は坏の底部である。いずれも断面台形状の貼り付け高台を有する。21の高台は屈曲部にほぼ接するところに位置し、厚くしっかり外に踏ん張る。22はやや内側に高台が位置し、やや踏ん張る。23はかなり内側に高台があり、高台自体やや内湾する。24は小型の蓋口縁部で、体部に稜をもつ。壺蓋と見られる。25・26は高坏接合部。27は横瓶胴部で、外面は横方向のタタキの後、縦方向のカキメ。28は広口壺口縁部で、端部を突出させる。29は甕口縁部で端部を丸く収める。30は甕の頸胴部。外面肩部は縦位方向の平行タタキ、内面は青海波文を残す。31は甕下胴部片。

32～51は土師器の供膳具である。32～39は坏口縁部。

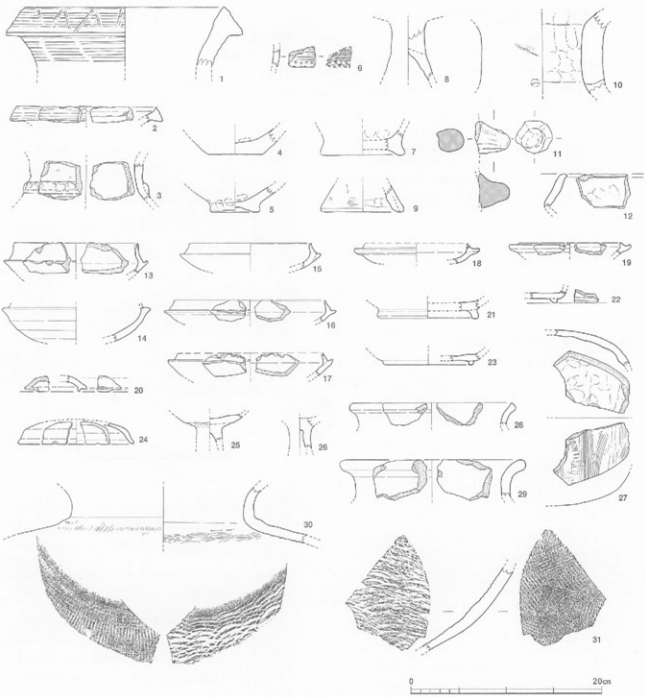


図68　SD－1出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）

39を除き、口縁端部はいずれも丸く収める。40～44は坏の底部で、いずれも回転糸切り痕を残す。44は切り離しの後、板目状圧痕が認められる。45～47は椀底部。46の高台が高く、外に踏ん張る。48～51は口径8cm前後の小皿で、底部の残る例はいずれも回転糸切り痕が見られる。52～63は瓦器椀。52～56は口縁部で、いずれも口縁部外面を横ナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。52・55は内面に丁寧なミガキが見られる。57～63は底部。57～59は断面方形状の、60～63は三角形状の、低平な貼付高台をもつ。64・65は、施釉を確認できないものの、形態・胎土より灰釉陶器とした。64は椀口縁部で、端部が緩やかに外反する。65は椀底部。貼付高台は、内面側を強く横ナデし、広い凹面をなす。いずれも9世紀後半から10世紀前半。

66・67は土師質土器の調理具。66は鍋口縁部。67は羽釜の脚部。68～70は須恵質陶器。68・69は甕の口頸

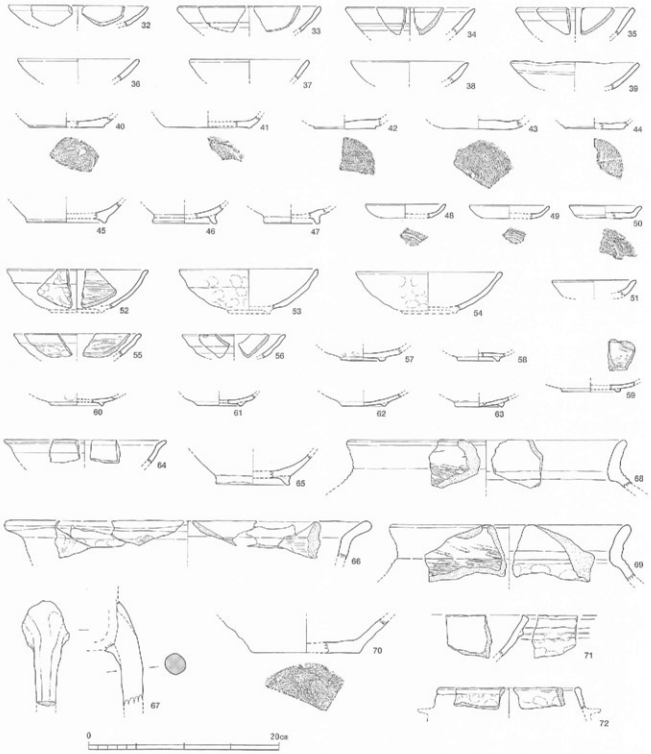


図69　SD－1出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）

部で、肩部外面は横位方向の平行タタキ。70はこね鉢の底部か。底部外面にハケ目を残す。71・72は瓦質土器。71は鉢か、口縁部下に低平な三角形突帯を貼り付ける。72は羽釜の口縁部。

73～75は青磁。73は釉の厚く溜まっている方を下とした。外面には型押しの牡丹唐草文があり、全面に青みがかった緑色の釉が施されている。水差もしくは瓶の胴部下半と推定される。74は皿の見込み部分。釉は灰オリーブ色。75は碗底部。外面には4～5条1単位のクシ描文を縦位に、内面はヘラ状工具により草花文

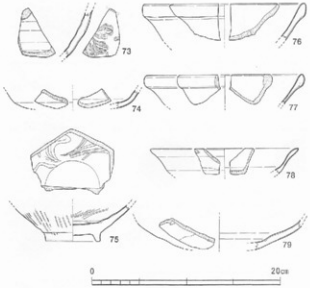


図70　SD－1出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）

を施す。釉は灰オリーブ色で、外面下半以下露胎。同安窯系であり、11世紀末から12世紀初頭。76～79は白磁。76・77は玉縁状の口縁部。78は端反りの皿口縁部、79は碗体部下半の破片、いずれも外面下半に露胎部分が見える。

80～91は石器。80～82は台石。80は上下に平滑な面をもち、砂岩製。81も表裏に平滑な面をもつ扁平な台石。82は安山岩質で、断面五角形を呈する。2面に敲打痕・擦痕が顕著に認められ、破面以外は被熱により灰色～灰赤色に変色している。83～85は砂岩円礫を用いた磨石。86は砥石で、平滑な砥面が1面残る。87は赤色頁岩の石鏃未製品。平面五角形を呈するが、基部と刃部1辺は剥離されてなく、厚みがある。88はサヌカイト製刃器の一部。刃部は交互剥離が認められる。89～91はサヌカイト剥片。

92は鉄鏃。断面長方形の茎部に木質が残り、長頸鏃とみられる。93～95は鉄滓である。

なお、SD－1からは獣歯の小片も比較的多く出土しており、一部は同定分析を依頼し、ウマ臼歯との結果を得ている（詳細はⅡ－5－D参照）。［吉田・濱田］

② SD－2（図66・67・72～79、図版24－6～26－13）

SD－2は、X＝93953をほぼ主軸にとる東西方向の溝。東は調査区端から、西も調査区南西隅部で辛うじてその一端を確認でき、約27.5mに及ぶ。ただし、西寄りで、SX－13～16・19による撹乱が顕著である。底幅は1m内外で、深さは東部で30cm前後を測ることができるが、西部では20cm以下と浅くしか残らない箇所がある。また、東側で底のレベルは、北側に平行するSD－1より10cm前後高く、東端で標高約28.15m。CV11区辺りまでこの段差が見られるが、それ以西ではSD－2の底の傾斜が急に増し、検出した最西端でSD－1より下がり、標高約27.85mとなる。なお、南岸は一応調査区内で確認しているが、工程上別調査となった南区西壁の土層では、SD－64とした灰白色の砂礫堆積が認められ、さらに南側に広がる可能性も残る。ただし、SD－64の堆積は、確認されているSD－2上層の堆積より10cm以上高くに位置し、しかも砂礫堆積であり、SD－2最終埋没段階の土層とも考え難い。後述する出土遺物相にも違いが認められる。よって、SD－2自体、調査区南端から南にはあまり及ばないと想定する。なお、13次調査ではSD－3として一括したが、このうちの⑨・⑩層を、20次調査SD－2に対応させることができる。

SD－2埋土は上・中・下層に区分され、遺物の取り上げも、この分層と主に東西方向の区割に従った。ただし、各層間の接合関係がかなりある。上層は、0.1㎜未満の砂粒からなる細かい褐灰色砂質土で、ラミナ状に粘質土が混在する。中層は、1㎜未満の砂粒を多く含む褐灰色砂質土で、しまりがある。下層は、3㎜未満の砂礫をベースに1cm大までの礫を多く含む砂礫層。しまりは弱く、遺物を多く含む。

SD－2からはコンテナ約3箱分の遺物が出土し、その中から164点を図化した。また図化した以外に、SX－16脇の、CU11区の下層（褐灰色砂質土）から、溝底部から10cm程浮いた状態で、口を川上に向けた下顎骨（R6）が出土し（図104、図版13－1・2）、ウシとの同定結果を得ている（詳細はⅡ－5－D参照）。周辺から他の歯骨は見られないが、SD－2からは他にも獣歯の小片が比較的出土している。一部は同定分析を依頼し、ウシあるいはウマ臼歯とされている（詳細はⅡ－5－D参照）。

1～9は弥生土器。1は大型壺口縁部で、上下に拡張した端部に4条の凹線文を施し、斜方向の刻み目を密に施す。2～5は壺の底部。6は上げ底状の甕の底部。7・8は高杯脚部。7は接合部直下に4条以上の浅い沈線をもち、据が大きく開く。据部には円孔を確認できる。8は筒状の脚柱部。9は筒状の器台で、外面にはカキメ様の横ハケ目調整がなされ、円孔が開く。10～12は土師器高杯の脚部。11は接合時に心棒を刺した痕跡が見られ、古墳時代前期。12は古代。

13～24は須恵器。13～15は坏蓋。13は、口縁部と天井部の境が凹線状に若干の稜を作り出し、口縁内端部に浅い段を有する。辛うじて天井部の回転ヘラケズリを確認できる。6世紀前葉。14は体部の稜が凹線のみとなり、口縁内端部も内傾する緩やかな凹面となっている。6世紀中葉。15も稜部は凹線のみで、口縁内端部はさらに徹底な凹部を残す程度である。6世紀中葉